
EDEN

南 晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

E D E N

【Nコード】

N 2 9 9 1 V

【作者名】

南 晶

【あらすじ】

自殺を決意した、35歳、独身、無職の宇佐美響子。

仲間を探すべく闇サイトを検索して、見つけたのは「自殺ツアーE den」

参加を申し込んだ響子を迎えに来たのは、ハンドルネーム「死神」と名乗る片目の青年だった。

捉えどころのない死神青年の正体、そしてエデンの本当の意味とは・・・？

若干激しめ、大人のラブサスペンス。

始まり 1

朝焼けが始まりかけた、明け方5時。

八月とはいっても、太陽が昇る前のこの時間帯は澄み切った冷たい空気が肌に心地いい。

半分消えかけた月が、まだ僅かに薄紫色の空に張り付いている。

私は、家族が眠っている家の玄関をこっそり出た。

薄暗い玄関を出る時、懐かしい家の匂いがして、私の鼻が少しツンとした。

でも、後戻りはもうできなかった。

私は覚悟を決めて、死への道のりを歩き出した。



「もう死んじやおっかな・・・。」

1週間前のことだ。

35才の誕生日を迎えた先週の日曜日、私は唐突に思った。

何故と言われたら、主な理由は二つあった。

一つ目は失業保険の給付が終了すること。

リーマンショック後、私は今まで勤めていた人材派遣事務所が潰れた。

派遣されていた人たちが一斉に解雇されたあの時、日本中に失業者

が溢れて派遣村ができた。

その派遣会社自体が、経営困難になり潰れていったことはあまり知られてないだろう。

解雇された従業員ばかりクローズアップされ、派遣会社は中間搾取業としてバッシングを受けまくったが、結局は一蓮托生だ。

派遣先がなくなれば、事業自体が存在意義を無くす。

その派遣会社には10年くらい勤務していて、居心地は良かったのだけど、潰れてしまったては仕方が無い。

でも、その後、35歳になっていた私に新しい職場はなかった。

今までは面接で落ちた事などなかったのに、履歴書だけで断わられる。

大した資格も職歴もない三十路の独身女には、どんな職業も狭き門になっていた。

私はその時、自分がいかに価値の無い、何の取り得もない人間だったかを思い知らされたのだ。

失業保険の給付が終わるという事は、私は完全に無職無収入の人間になってしまったということだ。

年金暮らしの親の実家に住んでいるからまだ生きていけるものの、同じくリーマンショック後、押し付けてきた弟夫婦と二人の子供が同居している家で、ニートになる訳にはいかなかった。

私は仕事だけでなく、自分の居場所もなくなっていたのだ。

二つ目の理由は、大したことじゃない。

婚活で知り合って、付き合い始めた男性が、同じパーティーにいた他の女と電撃結婚したことだ。

今まで結婚はしなくてもいいと思っていた私も、経済的に不安定になると、高所得の男性を捕まえて扶養家族になることを考え出した。我ながら、小さい上に姑息な思考回路にウンザリする。

でも、家から出られて仕事をしなくてもいい立場になるには、永久就職するしかないと思われた。

私と同じ思考回路の女はゴマンといて、婚活パーティーは常に男性不足だった。

その中で、何とか私がデートまで漕ぎ着けた、40歳バツ一、チビでメタボの男がいた。

公務員というだけで彼はモテモテで、何と私は二股かけられていた。その場で知り合った女の子と婚活情報を回しあう為、メールのやり取りをしていたのだが、その男が最近結婚したという情報が私の所にも回ってきたのだ。

最初から、好きでもなかった男だったけど、あんな男にまで軽くあしらわれたのが惨めだった。

それでも、学生時代は恋多き女だったのに。

いつの間に時間は経ってしまったのだろう。

私は35年という年月を無駄に過ごして、もうやり直しも効かないことを身に染みて感じた。

やり直すには、一回死ぬしかないと単純に思ったのだ。

その時、既に私は病んでたのかもしれない。

普通の状態ではなかったのは、自覚していた。

彼の結婚情報メールが届いた、先週の日曜日の夜、私はネットで闇サイトなるものを探した。

噂に聞く自殺サイトで仲間を探そうと思ったのだ。

今まで何度も自殺サイトで亡くなる人があるんだから、すぐに見つ

かりそうなもんなのに、自殺仲間を一般公募しているサイトはなかなか見つからなかった。

やっぱり、規制されてるのかな・・・。

半分諦めかけたその時、検索サイトを見ていた私の目に飛び込んできた文章。

一人で逝くのが不安なあなた。このツアーと一緒にE d e n（楽園）へ逝きませんか？ b y H N死神

私は何かに誘導されるかのように、その文章に引き付けられ、無意識のうちにクリックしていた。

始まり 2

クリックした先のサイトは、誰かの個人ブログみたいな簡単にできたページだった。

真っ黒な画面に文字だけが白く浮き上がっている。

画像も背景も何も無いそのページは、シンプルが故にむしろ不気味だった。

エデン（楽園）を目指すツアー 参加者募集中

人生の幕をご自分の手で引こうとされている貴方。

でも、勇気がなく戸惑っているあなた。

このツアーに参加して一緒に逝きましょう。

最後の楽園に。

興味をもたれましたら、下記の手順で会員登録してから、改めてログインしてください。

その後、ツアー詳細を登録されたメールアドレスに送らせて頂きます。

私は記載通りの手順で会員登録して、返事が来るのを待った。

5分も経たないうちに、見知らぬアドレスから携帯にメールが送信されてきた。

私は早くなった鼓動を抑えて、携帯の受信トレイを開く。

送信者 死神

件名 ツアー詳細

本文 会員登録ありがとうございます。

サイトで見て頂いたとおり、こちらは自殺ツアーです。

路線は毎回変えておりますが、定期的に運行しておりますので、あなたの街に近いところに

停車した時に乗り込んで下さい。

希望日、希望停車場決まりましたら、こちらのメールに返信お願いします。

メールの本文にはそこまで書かれていて、その後には運行スケジュール表が添付ファイルに入っていた。

名古屋に止まるのは8月某日、午前6時。

自宅との距離を考えると、何とか行けそうな場所はそこしかなかった。

私はその旨をメールに打ち込んで送信した。

再び5分も経たない間に返事が来た。

送信者 死神

件名 ツアー申し込みありがとうございます。

本文 ご希望通り、8月某日 6:00am 名古屋駅に停車します。

15分以上遅刻された場合はキャンセルと見なします。

時間厳守でお願いします。

尚、貴方がご覧になりましたサイトは、これで閉鎖されま

す。

今後の連絡は直接こちらのアドレスにお願いします。

中学生のイタズラのような、怪しさこの上ないメールだ。

私は思わず苦笑いした。

どうせ、誰かが面白半分にやってるに決まっている。

その時間に行っても、誰もいないに違いない。

いや、もしくはデジカメ片手に構えた中学生が、ドッキリ企画を楽しんでるかもしれないが。

とにかく、全く信用していなかった私だが、逆にそれが興味をそそった。

一体、誰がこんなくだらないイタズラを時間を裂いてやっているんだろう。

きっと私みたいな、無職で独身の暇な人に違いない。

どうせ死のうと思ってた矢先だ。

面白半分に、このイタズラに乗ってやるのも冥途の土産になるかもしれない。

死神という、ベタなHNのこの送信者のバカ面を見てから帰ってくるのも悪くない。

最初はそんな軽い気持ちだった。

実際の所、自分が本当に死ぬことはまだ考えてなかったんだろう。

ただ、死のうと思った瞬間、何かが私の中で弾けたのは事実だ。

何にも興味が無かった私が、このツアーには以上の興味を持ったのだから。

何かの啓示だったのか。

かくして私は、家を出る事に決めたのだ。

死神 1

名古屋駅周辺の指定されたバス亭に私は到着した。

通常は市バスの停車所であるその場所にバスを待つ人はまだいなかった。

今日が日曜日だったせいかもしれない。

時計を見ると、予定時刻より少し早い。

100mほど先の店舗の軒先に設置された自動販売機に気が付き、私はコーヒーでも買おうと歩き出した。

自販機の前で私は財布を開けた。

中には昨日下ろしたばかりの失業保険が全額入っている。

もし、私が本当に死んでもう戻らなくなったらこのお金は宙に浮いてしまう。

遺族が親ならまだしも、万が一、弟夫婦に渡ってしまったら死んでも死に切れない。

いっそのこと、と全部持って行くことにしたのだ。

その中で120円だけ摘んで私は自販機に入れた。

まだ、会社で働いてた時に毎朝飲んだBOSSカフェオレのボタンを押す。

口にすると、懐かしい甘ったるい味が広がって、忙しかったけど充実していた会社員時代を思い出した。

死んだら、これを飲むこともなくなるのかな？
そもそも、私は本当に死ぬ気なんだろうか？

早朝に家を出るという、イレギュラーな行為が、何となく私をハイにさせていた。

遠足に行く前の子供みたいに。

正直、これから死ぬという危機感はあまり感じていなかった。

その時、私は背後に人が待っているのに気が付いた。
私が自販機の前から離れるのを待ってるみたいだ。
慌ててペコリをお辞儀をして、私は場所を空けた。

背後で待っていたのは長身の男性だった。

この暑いのに真っ黒の半袖Tシャツにブラックジーンズ。
私の横を彼が通ると、大きな影のような印象を受けた。

Vネックの黒いシャツから出た首と腕は異常に白い。
男の人でこんなに色白の人を見るのは珍しいくらいだ。

それより何より、私の目を引いたのは彼の顔だ。
首と同じように白い顔は、まあ普通の日本人だ。
イケメンとは言い難いが、すごく悪い訳でもない。
つまりあまり印象のない普通の人だ。

それなのに、顔に目がいったのは、彼の斬新な髪型故だった。
七三で分けた黒い前髪の七割の部分が顔の左半分を覆っているのだ。

平たく言えば、顔の半分、髪で隠れている。
子供の頃に見たゲゲゲのなんとかを思い出した。

左の目には白い眼帯がかけられてて、髪はそれを隠すように覆っている。

眼帯の二本のゴムが右目の上下を囲んでいて、これで前が見えているのかと、こちらが心配になる。

私の心配に反して、良く見えているようだ。

戸惑うことなく、その男性は真っ直ぐ自販機の前に立ち、小銭を入れる。

無糖のコーヒーを選ぶと、それを白い手に掴んでクルリと私の方を振り返った。

左目が見えていないせいか、右目が顔の中央にくるように少し首を傾げて私を見つめた。

紅茶のような赤みの強い茶色の瞳だった。

光の角度によっては、赤く見える。

不吉な印象を持たせる色だった。

彼はその紅茶色の瞳で私を観察するように見つめてから言った。

「もしかして、ツアー参加者のウサギさん？」

いきなり言われて、私はビクっとして肩をすくめる。

飲みかけのBOSが大きく揺れ、手の中でタプンと音を立てた。

ウサギというのは私がログインする時に適当に登録したハンドルネームだ。

本名が宇佐美響子である私は、学生時代のニックネームもウサギであることが多かった。

「そ、そうです。」

「あ、初めまして。俺は死神。ツアー主催者です。時間は少し早いけど、まあ、ここで会っちゃったし、行きましようか？他の参加者はもう乗って待ってる。後はあなただけだ。」

死神さんは無表情のまま、ツアーコンダクターよろしく言った。低めの落ち着いた声で、外見よりは年齢が高いような気がした。それでも、30前半といったところだが。

「あ、あの、エデンって書いてありましたが、具体的にはどこに行くんですか？」

どこで死ぬんですかって聞くべきだったかもしれない。私は当然の疑問を彼に投げかけた。

その質問に、彼は少しバカにしたような笑みを浮かべた。

「最終的な行き先はエデン、つまりあの世ですよ。それだけじゃダメですか？それとも、ここにまだ未練がある？」

私は言葉に詰まった。

未練がある訳ではないけど、全く無いと言えば嘘になるかもしれない。

私が黙っていると、彼が先に口を開いた。

「悩んでるなら辞めた方がいい。他の参加者の迷惑になります。刑

事事件になることは避けたいのね。じゃ、俺はこれで・・・」

黙ったまま立ち尽くす私を残して、彼は振り返ることなく歩き出した。

全身黒づくめの彼の後ろ姿は、まるで影が立って歩いているようだ。

私は無意識にその後を追いかけて走り出していた。

死神 2

「ま、待って下さい！私、行きます！」

私は、長い足でスタスタと先に行く死神さんの後を追いかけた。走ってくる私に気が付いて、彼は立ち止まって振り返る。

ハアハア息を切らしている私を、彼は紅茶色の右目で見下ろした。

「・・・無理しなくてもいいですよ。途中で帰るって言われても困りますから。」

「言いません！私、考えたら帰る所もないんだから。連れてって下さい。」

言いながら、私の脳裏に押しかけてきた弟夫婦と子供達が浮かんだ。失業保険を受給している弟、専業主婦という名の下に働く気が全くない弟の嫁と、年金生活の両親。

弟夫婦は子供がいるので、実家に戻る理由は一応正当化されている。だけど、私はただのいき遅れのパラサイトだ。

あの家にこれ以上、無職の人間はいらない。

死神さんは首を傾げて私を見た。

目が中央に来るように無意識にやってるクセみたいだ。

「途中下車は認めませんよ。本気なら止めません。」

彼の言葉に私は覚悟を決めて頷いた。

実際のところ、この時ほど死ぬ事を考えてなかった時はないだろう

と、私は思う。

私はただ、置いていかれたくなかった。

死神さんに付いていけば、行き先は永遠の楽園だ。

それがどういう意味かを考えることなく、私はただ、彼に付いて行きたかった。

ここではないどこかに行ければ、それで良かったのだ。

私の歩幅に合わせて、死神さんは歩くペースを落とした。

私を見ることなく、真っ直ぐ前を向いて彼は終始無言で歩き続ける。

彼は主催者だと言った。

だとしたら、彼は一緒に逝くつもりなのか、単に人を集めただけなのか、私には判断しかねた。

最初に待ち合わせていた市バスの停留所に戻ると、そこには黒いワゴン車が止まっていた。

ワゴンと言っても高級車だ。

彼はそこでくると振り返って私を見た。

「今から、この車で出発する。あんたは同行者と一緒に後部座席に乗って。行き先は太平洋側とだけ言っておくよ。」

そう言いながら死神さんが車のキーをポケットから出したので、私はギョっとした。

まさか、彼が運転するんだらうか？

その目で？

「あ、あの、あなたが運転して大丈夫？」

「何で？」

私の問いに彼は首を傾げる。

「だって、その目じゃ危ないでしょ？」

やっと意味が分かったみたいに、彼はああ、と言って髪をかきあげた。

真っ白い眼帯が左目を覆っている。

「朝、起きたら結膜炎になった。でも、あんた変った人だな。どうせ死ぬのに事故ること心配してんの？」

意地悪そうな顔をして、彼は開いてる方の目を細める。

バカにされてるみたいで不愉快だったが、言われてみれば確かにそうだ。

私は、死ぬ前に不慮の事故で死ぬのは嫌だった。

どっちにしても同じ結果になる筈なのに。

「心配しただけよ。運転が疲れるかと思って。大丈夫ならいいよ。」

私は負け惜しみみたいに言い捨てて、後部のドアを開けた。

薄暗い車の中には3人の乗客がいた。

一番奥に座っていた一人は60歳くらいの恰幅のいい男性。

いかつい顔に四角いメガネをして、スーツ着用だ。

何となくお金持ちのイメージだ。

同じ席で反対側の窓にピッタリくっついて座っている40歳くらいの女性。

私より、少し上に見えた。

細くて、色の白いきれいな人だ。

肩までのサラサラの髪をセンターで分けている。

黒っぽいレトロなワンピースが良く似合っていた。

真ん中の席に座っていたのは、40代位の男性。

こちらの色白で細身だ。

白いポロシャツに綿のスラックス、そしてメガネ。

インテリな感じだ。

私が車のドアを開けた途端、彼らは一斉に私を見た。

私は、突然3人の視線の的になって、思わず目を逸らす。

真ん中のインテリが笑みをを見せて、自分の横の座席をポンポン叩いた。

ここに座れということらしい。

私はぺこっとお辞儀して、なるべく彼の反対側の窓の近くに体を寄せてチョコンと座った。

私が座るや否や、ドアは自動で閉まり、運転席に死神さんが乗り込んだ。

運転席から首だけ動かして、後部席の私達を振り返る。

「では、人数も揃いましたので出発します。到着予定地はエデン。ですが、まず東名高速乗ります。最初の休憩は上郷サービスエリア。よろしく願います。」

どこまでも堅苦しい感じで、死神さんは私達に向かって言った。

出 発 1

車の中は効きすぎるクーラーのせいで肌寒いくらいだった。運転席にはゲゲゲの眼帯男、2列目には私とインテリ眼鏡、3列目には綺麗な奥さん風女性と、ミナミのドンみたいなおじ様。得体の知れないこのメンバーと、私は楽園に逝くのだろうか。

車内で話をする人は誰もなかった。

これから一緒に人生に一度の大イベントをするのだから自己紹介くらいしてもいいものだろうに。

そう思ったけど、何となく軽いノリが憚られる雰囲気だったので、私も黙っていた。

沈黙に耐えかねたのか、運転席の死神さんがラジオをつけた。

FMの人気DJが洋楽をBGMに早口で喋っている。

誰もラジオを聴いていなかったけど、音声が流れるだけで車内に張り詰めた緊張感が少し和らいだ。

「どちらからですか？」

突然、反対側の窓際に座っていたインテリ眼鏡が私に話しかけた。細面で白い顔に眼鏡はよく似合っている。

「あ、名古屋です。あなたは？」

「僕も名古屋です。ハンドルネームはネオ。マトリックス見ました？」

キアヌ・リーブスの顔が脳裏に浮かんで、私は思わず苦笑した。白くて面長な顔立ちは、言われて見れば少し似ている。

私も少し気が楽になって口を開いた。

「初めまして。私はウサギです。あの、こんなところ来たの私初めてで、ちょっと緊張してます……。」

私の言葉にネオさんは、プっと吹き出した。

「自殺ツアーのリピーターは有り得ないでしょ、普通。もちろん僕も初体験です。あなたはどうしてこんなツアーに参加したんですか？」

優しい、穏やかな声でネオさんは問いかけた。

私は言おうか言うまいか、少し悩んで沈黙した。

職を失ってから、実家にも居辛くなって、失業保険も終了するし、婚活であったダサ男に二股かけられてフラれたから、というのは正当な動機として認められるのだろうか。

私が黙っているので、ネオさんが先に口を開いた。

「言いたくないならいいですよ。これから死ぬメンバーに何も話す必要はないですから。悩みなんて人には理解されないものです。」

眼鏡の奥の二重の瞳が優しく微笑んだ。

それを見て、私は少し気が楽になった。

ふと前を見ると、バックミラーに運転中の死神さんの顔が映っている。

こっちを見ていた中学生みたいに、ミラー越しに私と目が合うと、慌てて視線を泳がせて前を見た。

私を見てた・・・？

私は、再び前を向いてしまった彼の後頭部をじっと見つめた。

出 発 2

日曜日の朝の東名高速道路は、まだ交通量も少なかった。

カーステレオからはFM放送の早口のDJの声が流れてくる。

何を言ってるのか意味不明だったが、沈黙が続く車内の中では重要な役割を果たしていた。

「ネオさんはこれからどこに行くのか知ってるんですか？やっぱり、あのサイトでこのツアーを見つけたんですか？」

死神さんに声が聞こえないように、私は少し体を屈めてネオさんに耳打ちした。

彼は理知的な顔を少し緩めて、笑った。

「どうして内緒で話すんですか？」

「・・・だって死神さんに聞かれたらマズイんじゃないですか？」

「どうして？彼は運転手ですよ。ツアコンみたいなもんじゃないですよ。」

「・・・ツアコン・・・」

自殺ツアーのツアコン兼運転手。

毎日運行している訳ではあるまい。

普段は何やってるんだろう。

私は死神さんの素性が少し気になりました。

「うさぎさんは聞いてないみたいですね。これからの日程。」

ネオさんの声に私は我に返った。

「あ、はい。行き先はエデンとしか教えて貰えなかったので。でも、

死に場所は知っておいてもいいと思うんですけど。」

「確かにね。おい、死神クン、ツアーの日程表くらいないのか？」

ネオさんが運転中の死神さんに向って呼びかける。

バックミラーに映る死神さんの片目がチラリとこっちを見た。

「そんなに気になるなら、次のパーキングで教えますよ。最終的に行く所はエデンですけどね。」

なのに、どうして知りたがるのか分からないといった顔で、死神さんは私を見て溜息をつく。

うるさい女だって、顔に出ていた。

でも、確かにそうだ。

私は自分がどこに連れて行かれるのか分からず、怖かったのだ。

つまりそれは、自分が生きる事に執着してるって認めることになるんだけど。

私達が話しをしている間、後部席のドンと奥様は、窓にもたれて外を眺めていた。

会話に口を挟む様子もない。

二人のその余裕の表情に私は少し悪寒がした。

何となく、この二人は覚悟がある気がした。

死ぬ為の準備はできているみたいだった。

車は20分ほど走った後、パーキングエリアに入って停車した。

名古屋から東京方面に向う最初のパーキングで、岐阜から静岡、三重くらいまでの広範囲すぎる土地名物売っている土産屋がある。

巷で流行った、大食いのタレントも来たと言う、結構規模の大きいパーキングだ。

「ではここで10分休憩入れます。外に出ても構いません。」
運転席で前を見たまま、死神さんは言った。

後ろの二人が立ち上がったので、私は慌ててドアを開けて、外に出た。

私が座っていると、シートが上がらず、後部席の人が出れないからだ。

私が外に出ると、後ろから二人、そして私の隣に座っていたネオさんも出てきた。

「ウサギさん、ちょっと店の中見てきますよ。死神さんと話でもしたらどうですか？」

「あ、はあ・・・。」

私は曖昧な返事をした。

ネオさんは颯爽と、店に向っていく。

以外に背が高くて痩せているネオさんの後姿は、ホントにマトリックスのキアヌ・リーブスみたいだ。

後の二人も無言のまま、彼の後に続いたので、車には死神さんと私だけが残された。

いつの間にか、死神さんも車から降りて、ぼんやり突っ立てる私の隣に来た。

背が高くて、真っ黒ないでたちの死神さんは、隣にいただけでも威圧感がある。

おまけにこの髪型。

左目が結膜炎になったって言ったけど、この斬新過ぎる髪型のせい

ではないだろうか。

「・・・タバコ、吸ってもいい？」

突然、低い彼の声がした。

私が返事する前に、彼はポケットから半分潰れたキャスターマイルドを引っ張り出した。

同じくポケットに突っ込まれていた安物ライターで火をつけ、煙を吐く。

いいって言ってないのに・・・。

喫煙者ではない私は、少しムっとして彼を横目で睨む。

彼も片目をチラリと動かして私を見て、潰れたタバコの箱を差し出す。

どうやら勧めているらしい。

「要りません。私、吸わないから。」

「だったら尚更、どう？ 最初で最後じゃん。」

彼は意地悪そうにニヤッと笑った。

バカにされたみたいで、私はムキになって差し出されたタバコを掴んだ。

そこから一本だけ引っ張り出して、口に咥える。

「火！ 火つけてよ。」

「はいはい。」

ニヤニヤ笑いながら、死神さんは体を屈めて、ライターを私の顔に近付けた。

しばらくタバコの先端が燃えていたが、火がつかない。

「あの、吸わないと付かないよ。」

彼の言葉に私は慌てて思いっきり息を吸い込んだ。

その途端、大量の煙が口の中に入って、私は思わずむせ返る。

ゲホゲホ咳をしている私を、彼は面白そうに眺めていた。

「吸った事、ないの？」

「な、ないよ。体に悪いじゃない。」

「じゃあ、死ぬ前に吸つといて良かったね。好きになるかも知れないよ。結構、クセになるし。」

「なりません！てか、クセじゃなくて中毒って言うのよ、それ！」

彼は面白そうに笑いながら、煙を吐いた。

「日程、聞きたいんだろ？そんなに長くはないよ。死亡推定時刻は夜10時になってるからな。」

普通に語る彼の紅茶色の目を見ながら、私は硬直した。

出 発 3

「死亡推定時刻10時」

私はその言葉に悪寒が走った。

無意識に腕時計に目をやると、今は朝8時だ。逆算すると、これから14時間後に私は死ぬ。その現実には私はぞっとした。

硬直して黙り込んだ私を、死神さんは啞えタバコでニヤニヤして見ている。

私は何を思ったか、もう分かっているらしい。

「ビビった？」

彼の声に、私の身体はビクッと反応する。

「そ、そりゃ、まあ・・・。」

私は口籠るしかなかった。

どう見ても年下のこの男にからかわれているのは、シャクに触るが認めるしかない。

私はビビっていた。

ゆっくり煙を吐き出しながら、死神さんは言った。

「これから南下して、太平洋に面した、とあるホテルに行く。
夜まで自由時間。大浴場で最期の風呂に入ってもいいし、浜辺を散

策してもいい。

それから、このメンバーで最期の晩餐をしてツアー終了。最期にプチ贅沢してから楽園に行こうっていう画期的なプランだろ？」

「ツアー終了っていうのは、つまりそこで死ぬってこと？」

「そうだね。」

私の問いに、彼はこともなげに言った。

「死因は、何？」

「そこは客のあんたが考える必要はない。主催者側に任せてくれればいい。希望があれば聞いとくけど。」

この人は正気なんだろうか・・・？

私は淡々と話すこの男が恐ろしくなってきた。

「つまり、私はあなたに殺されるってこと？」

「俺は手は下さないよ。どうせ殺されるなら、イケメンじゃなきゃ嫌だろ？」

ニヤニヤしながら彼は言った。

冗談のつもりなんだろうか。

だとしたら、恐ろしいレベルの低さだ。

その時、車を降りたネオさんとドンと奥様がこっちに向って戻ってきた。

死神さんはタバコを足で踏み消して、首を傾げて私を見てから言った。

「苦しまないようになってるから、安心していいよ。気が付いたら、あんたはエデンにいる筈だ。」



私が一番先に車に乗ったため、後部座席の一番奥の席に座ることになった。

その後に続いたのが、きれいな奥様だった。

つまり、3列目は私と彼女が一緒に座ることになった。

2列目はネオさんとドンと一緒に座った。

死神さんは伸びをしながら運転席に乗ると、エンジンをかけた。

途端、つけっ放しだったFMが車内に響く。

バックミラー越しに彼の片目が車内をぐるっと見回した。

車はゆっくり走り出し、パーキングを出た後どんどん加速し、高速道路に合流した。

することもないので、私は景色が変わった3列目から外を眺めていた。反対側の窓にもたれている奥様をちらりと見ると、目を開けて、同じように外を見ている。

「あの、初めまして……。」

緊張感に耐えられず、私は奥様に話しかけた。

奥様はハットとして顔を私に向ける。

笑顔を見せたり、お辞儀をしたりは、してくれなかった。

「あ、はあ。初めまして。」

落ち着いた大人の女性の声だった。

でも、それだけ言うと、彼女はまた窓の外を見つめる。どうやら関り合いたくないらしい。

私は益々気まぎれになって、黙り込む。

バックミラーに死神さんが、苦笑しているのが見えた。

チラチラこっちを見て様子を伺ってるらしい。

片目で運転しながら器用な人だ。

かっこ悪いところを見られて、私はふてくされた。

でも、今更、席替えもできないので、仕方なくまた窓の外を眺める。

再び、車内はFMの音声だけが響いて、口を開く者はいなくなった。40分ほど経った後、車は高速道路を下りて、ETCの出口を抜けた。

到着 1

高速を降りてから、しばらく道なりに車は真っ直ぐ進んでいく。国道を走っているようだ。

私は、自分の車で高速に乗ったことがないので、現在地がどこなのか把握しかねた。

ペーパードライバーという程ではないけど、遠乗りするほど車好きでもなかった。

大した距離でもなかったと思う。

ただ、この車内の重苦しい雰囲気、一層、時間の流れを遅く感じさせていた。

名古屋から高速に乗ったから、太平洋岸に行くとなれば静岡か、愛知の半島だろう。

そこで、ホテルでプチ贅沢という趣旨は納得できるような、できないような・・・。

こんな見知らぬメンバーと一緒に宴会して楽しい訳がない。

だったら、一緒に死んで楽しい訳もないか・・・。

私は、何故、集団で死のうと思ってしまったのか、少し後悔した。今まで、何度も見た集団自殺のニュース。

ネットで知り合った全国津々浦々の初対面のメンバーが、いきなり同じ車の中で自殺する。

一人は心細いのだろうが、見知らぬメンバーと一緒にいても安らぐとは思えないのだ。

自分は集団生活に向かない性格だからだろうか。

少なくとも、このメンバーが最期に一緒にいることに、私は不安を

覚えるばかりだった。

私は2列目に座っているネオさんとドンをこっそり見た。
ネオさんはイヤホンをしてケータイから音楽を聴いている。
ドンは腕を組んだまま、窓にもたれて目を閉じていた。
人には人の悩みがあるんだろうけど。
この人たちは何故、死にたいのだろうか。



国道から外れた車は更に1時間くらい片道一車線の道を走った。
建物がだんだん減ってゆき、開けた田んぼや、畑が眼下に広がる。
いわゆる田舎の一本道を走っているのが分かった。

その畑の向こうに時々、キラキラ光る波が見えて、もう目的地までは遠くない事が分かった。

畑の後ろには太平洋が広がっている筈だった。

やがて、一本道も終点になる頃、巨大な要塞のような施設が見えてきた。

「リゾート施設 パシフィックホテル」

そう書かれた大きな看板が見えて、車はその看板の矢印に沿って、施設の中の滑走路のような車道に入っていく。

ホテルらしき白い建物の向こうに、プールと、テニスコートが隣接しているのが見える。

施設をグルリと回ったガードレールの向こうは、白い砂浜と波が打ち寄せる太平洋が見えた。

広大な敷地の中には、ホテル以外の施設も併設されているようだ。ホテルの横には広大な駐車場、それを挟んで大きな建物が並んでいる。

企業の保養所のような雰囲気だった。

老人ホームでもやっているのだろうか。

ともかくにも、その広大な施設に入った車は、滑走路のような車道をグルリと回って、南国系の木が並んだホテルのエントランスに到着した。

「お疲れ様です。到着しました。一先ずロビーに集合願います。」

死神さんが、振り向きもせず、ミラー越しに話しかけた。

その声に、まず、窓際にいたネオさんがドアを開けて外に出て、その後はドンが出て行く。

二人が出た所で、2列目シートが上げられ、奥様が降りる。

最初に取り込んだ私は、一番最後に外に出た。

ドンと奥様は私を待つことなく、ホテルのエントランスに向ってどんどん歩いていく。

ネオさんだけが、私が車高の高い車から降りるのを待って、手を貸してくれた。

「やっと着きましたね。自分で運転してればなんて事ない距離なんです、人の運転は疲れますね。」

ハハハ・・・と笑いながらネオさんは言った。

ネオさんも、車内の重い空気が苦痛だったんだろうか。

私はホっとして、笑った。

「ヘタな運転で申し訳ございませんね。さっさと中、入って下さいよ。」

いつの間にか、車に持たれてタバコに火をつけてた死神さんが、横目で睨んで言った。

聞こえてたか、とネオさんは肩をすくめて、私にウィンクする。

「君の運転はヘタじゃないよ。ハンデがあるにしてはね。さ、行きましょうか。」

ネオさんは、私の肩を抱くようにして、グイグイ押して行った。

私は、横目で睨んでいる死神さんを見ながら、その時、何か違和感を感じた。

今日、会ったばかりの死神さんとネオさん。

私は最後の乗客だった。

ネオさんがどこから乗り合わせたのかは知らない。

でも、初対面にしては二人が馴染んでいる気がした。

到着 2

アジアンテイストなホテルの中は、客らしい客もいなかった。

ロビーの中に川が流れていたり、藁で編んだランタンのような電灯がぶら下っていたり、リゾート感が必要以上に出ている。

こんなリッチな所で、エステを楽しみながらテニスしたりする人種が、今だにいるのだろうか。

バブルも弾けて久しいのに。

少なくとも、今までの自分の人生とは無関係な施設に違いなかった。

籐細工の涼しげなソファに、先に着いたドンと奥様は向かい合って座っている。

何かをボソボソ語り合っていた二人だったが、私とネオさんが連れ立って入ってくると、俯いて口を閉じた。

身の上話でもしていたのだろうか。

開いているソファを私に勧めると、ネオさんもその横に腰掛けた。

「せっかくだし、自己紹介でもしませんか？ここで会ったのも奇妙な縁ですよ。」

ニコニコとメガネの奥の目を細めてネオさんは笑った。

白い顔に細いフレームのメガネは良く似合っていた。

デキる営業マンといった雰囲気だ。

その言葉にドンが煩そうにジロリと睨んだ。

「これから死ぬのに、仲良くなる必要もないと思うがね。そんなに

したかったら、自分から始めたまえ。」

ドスの効いたいい声だ。

腹の底から響くその声は、百戦錬磨の会社役員を思わせる。

ネオさんは、まいったな、と頭を掻いてヘラヘラ笑った。

こちら、接待で鍛えたベテラン営業マンの貫禄だ。

「じゃ、僕から始めますよ。僕は名古屋出身39歳、身長は178cm、学生時代はテニスしてました。趣味は映画鑑賞に読書、志望動機は死んだ妻に早く会いたいから。これでいいですか？」

私はギョっとして彼の顔を見た。

最後になんかシュールなこと言わなかった???

ネオさんは、営業スマイルのまま、どうぞ、と言ってドンに手を差し出す。

彼の言葉には反応せず、振られたドンが思い口を開いた。

「私は生まれは長野だ。名前は名乗る必要ないだろう。どうせ、匿名だ。趣味なんてないが、ゴルフは人並みにはできるがね。将棋はそこそこの腕前だ。志望動機は、借金だよ。経営破綻。私が死んだら助かる家族がいるもんでね。」

そういう終わると、ドンははああ・・・と深い溜息をついた。

その姿から、何となく想像していた動機に、私も重い気分になる。

次、と言わんばかりにドンは奥様を横目で見て顎をしゃくった。

突然、話を振られた奥様は、少し視線を泳がせて考えてから、小さな声で話し出した。

「わ、私は「しずかちゃん」の名前で登録しました。愛知県出身です。結婚してから、趣味らしい趣味ありませんけど、洋裁は得意です。動機は、色々あるんですが、ちょっと育児に疲れて……。ウチの子、障害があつて、もう治らないんです……。」

最後の重い一言で、空気は更に重くなった。

場の雰囲気盛り下げたしずかちゃんは落ち着きなく視線を泳がせると、私の方に手を差し出して、どうぞ、と言った。さっさと面倒くさいバトンを渡してしまいたいみたいだ。

皆の話を一通り聞いてしまった私は、自分だけ黙ってる訳にはいかなくなって、仕方なく口を開く。

「私は「うさぎ」で登録しました。名古屋出身です。趣味なんて特にありません。動機は、失業と失恋・かな。軽くてすみません。」

重苦しい他のメンバーの紹介に比べて、なんてカルイ私の動機だろう。

言つてて恥ずかしくなってきたが、それについてコメントするものは誰もいなかった。

再び、皆が沈黙した時、レセプションでチェックインを終えた死神さんが、4人分の個室の鍵を持って近づいてきた。

これ以上、話をする必要がなくなって、私はホっとした。

「これから夕食まで自由時間です。夕食は地下の宴会会場で、7時集合。時間厳守でお願いします。」

部屋も自由に使つていいですから、くつろいでいても構いません。

温泉は一階にありますので、ご自由に。」

鍵を渡されて、私はふと時計を見た。

名古屋で待ち合わせしたのが朝の6時。

現在の時刻は、まだ11時になるところだ。

ホテルってこんなに早くチェックインできたっけ？

私が考え込んでいる間に、鍵を手にしたメンバーは次々と席を立って、エレベーターに向って歩いて行った。

こんなに早く到着してしまっても、死ぬ以外にやることがあるんだろうか。

今更、温泉に入るのもなんだか・・・。

いや、最期に身を清めるべきか・・・。

ぼんやりしている私の前に死神さんが座った。

面白そうに私の顔を覗き込んでニヤニヤしている。

完全にバカにしたその顔に私は腹が立ってきた。

「何か、用ですか？」

「別に。これから何するの？お風呂？」

「あんたに関係ないでしょ？入りたかったら、入ればいいじゃないですか。」

「俺は公共のお風呂は入れないんだ。」

死神さんはTシャツの袖をグイッと撒くってみせた。

真っ白なのに意外に逞しい、その二の腕には黒い墨で描かれた暴れる竜のような、燃え上がる炎のようなデザインのパトウが彫られている。

トライバルっていうヤツだろうか。

肩から広がっているその紋様は、腕が網に絡まれているみたいだった。

広範囲に広がるその模様には私は思わず息を呑む。

「刺青してる人は、入浴禁止って書いてあるだろ？隠すにしても、デカ過ぎるからな。」

捲くった袖を伸ばしながら、死神さんは言った。

「あの・・・、そういう業界の人ですか？」

私は恐る恐る聞いてみる。

ファッションに疎い私には、刺青と言えば、そういう業界しか浮かんて来ない。

「まさか。単なる若気の至りだよ。こうすれば風呂に入らない言い訳になると思ってね。」

・・・入りたくないのか。

話すほどに、この人の思考回路がよく分からなくなる。

「まあ、俺のことはいいからさ。暇なら付き合ってよ。」
立ち上がって、死神さんは私に手を伸ばした。

理由 1

露骨にイヤな顔をして、私は死神さんの手を払いのけてから、立ち上がった。

「どうせ暇だから付き合いますよ。どっか案内してくれるんですか？」

「光栄です。じゃ、海でも見にいきますか？名古屋からじゃ、あんまり来た事ないでしょう？」

私のツンケンした態度に、死神さんは更に面白がって両手を上げて言った。

どうして彼がこんなに絡んでくるのかよく分からないけど、今、ここで一人にされるよりは、こんな男でもいてくれた方が心強かった。

私はホテルのエントランスを出て、駐車場を縦断してガードレールまで歩いた。

真夏の日差しが強くなって、影が短くなっている。

それは太陽が真上に昇っていることを意味していた。

ガードレールを境に砂浜が広がっていて、その向こうは白い波が打ち寄せる大海原だ。

潮風が鼻について、私は思わず深呼吸をした。

どうして海を見ると、テンションが上がってしまうのだろうか。

遠足に来了子供のように、私の胸はワクワクしていた。

「浜に出てみようよ。」

そう言って、死神さんは長い足でガードレールをヒョイと跨いだ。

彼の背の高さを私は再認識する。

何故なら、私が跨いでも、ガードレールの上に乗ってしまい、乗り越えることができなかったからだ。

「足、短いなあ。」

よろよろとガードレールにしがみついている私に、死神さんは笑いながら暴言を吐く。

自覚はしてるけど、人に言われるほど短くもないはずだ。

「あんたがデカいんでしょ？人の足なんてほっというてよ！」

「はいはい。」

そういうながら、彼はモタモタしている私の腕をグイッと掴んで持ち上げた。

私は何とか、ガードレールを跨いで、砂浜に降りる事ができた。

サンダル履きの素足に熱い砂がかかって気持ちいい。

その時、よろけた私を抱き止める格好で寄り添っている死神さんに気が付いて、私は慌てた。

「あ、ありがとう。もう大丈夫だよ・・・。」

「それは良かった。」

まだ私の腕を掴んでいる、彼の白い手に、何故かドキドキして私は慌てて振り払う。

気を悪くする風でもなく、眼帯の紐で囲われた開いてる方の目を細めて、死神さんは笑う。

影のような最初の不吉な印象はだんだん薄れていった。

子供のような無邪気さがその笑顔にはあった。

波打ち際まで来て、座り込むと、私達は寄せては返す波を見つめた。海なんて、仕事を始めてから来た事ない。

休日出勤もザラだったため、あの会社に入ってから友達とも疎遠になっていた。

それはそれで仕方なかったし、仕事が充実してたから不満に思うこともなかった。

が、結局はこれだ。

35歳になって特に何の資格も持たない、無職の人間が有り余る社会に放り出されてしまった私には、今までの充実していた生活さえ、時間の無駄だったと思わざるを得なかった。

今まで何してきたんだろう……。

冷たい海水を指で触りながら、私は今までの自分の人生を反芻してみても、暗い気持ちになった。

頑張ってきた今までの時間が、報われなかったことに落胆した。

「なあ、あんたさ、何で死にたいの？」

私の気持ちを聞いていたかのように、死神さんは突然、声を掛けた。同情するでもない。

好奇心を抑えられない子供みたいなノリだ。

こいつに私の気持ちは分かんないだろうと思いつながらも、私はブツブツと話出した。

「……会社が潰れちゃって、今まで、失業保険でやってたの。それも終わるし、無職の弟夫婦もいるから家にもいられないし。後は、婚活で知り合ったつまんないチビのメタボ男に二股かけられて、フ

ラれたの。就職も決まらないし、今までの努力とか、時間とか全部無駄だった気がしてさ。

失った時間が多すぎて、やり直すには歳取りすぎてて、もう全部リセットしたくなっただ・・・。バカでしょ？」

自嘲的に私は薄笑いして言った。

死神さんは波を見つめながら、黙って私の話を聞いている。

「気持ちちは分かるよ。俺も長いこと仕事してなかったから。」

くっだらねえ、と笑われるかと思いきや、死神さんは意外にも真面目な顔で応えた。

私は思わず、彼の顔を見上げる。

「俺、定職就いたことないんだ。今まで工場で短期雇用の仕事しかしたことがない。だから、景気が悪くなってからは速攻クビになって、それから何にもしてないよ。失業保険なんて掛けて貰ってなかったし、厚生年金も入ってなかった。もちろん、彼女なんて最初からいないしね。どう？俺の方が酷くない？」

私は、呆氣に取られた。

すごい自虐ネタだ。

何故か自慢げに、彼は首を傾げて紅茶色の瞳で私を見つめた。

「・・・どうして定職に就いてないの？」

「就けないんだ。この顔じゃ・・・。」

彼は苦笑いして、髪をかきあげた。

左目を覆っている真っ白な眼帯が顕わになる。

「・・・結膜炎だから？」

「それ、信じてたの？有り得ないバカだな、あんた。・・・見ろよ。」

慣れた手つきで、死神さんは眼帯を外した。

髪をかきあげた彼の顔を正面から見た私は、思わず息を呑む。

眼帯で覆われていた彼の左目は、スモークガラスのように白濁していた。

右目が赤い紅茶色のコントラストで、白い作り物のような左目が一層引き立って見える。

「死神みたいだろ？だからいつもあだ名は死神。本名が岸上^{キシガミ}だからな。」

面白いだろ？と、ニヤッと笑って彼は言った。

理由 2

強い潮風がザアッと吹いて、彼の長い髪を吹き上げた。

白い顔に片方だけ白濁している目は、どうしても目を引いた。

もう片方が明るい色なので尚更目立ってしまう。

死神、と言われればその名前は相応しいと、思った。

失礼だけど。

「・・・それ、もちろん、見えてないんだよね？」

聞いてはいけないことを、聞くのが申し訳なくて、私は小さな声で言ってみる。

「見えないよ。でも、右目は今の所、すごく良いんだ。片目だけでも1.0以上あるんだから。でも、それが逆に問題でさ。」

彼は長い髪をかきあげる。

私は、左目を覆っている、その斬新な髪型の意味をやっと理解した。

「障害認定って知ってる？」

私の顔を紅茶色の方の目で見て、彼は聞いた。

「・・・障害者手帳貰うヤツ？」

「そう、生活に支障が出る位の障害を持ったら認定されるんだ。そうしたら医療費は全額タダになるし、障害年金も貰えて、国から支援金も出る。でも、俺は見えないのに認定されない。生活に支障がないからだって。」

死神さんの顔が陰しくなって、語気が少し荒くなる。
私は彼の顔を凝視するしかなかった。

「実際は、見える見えないの問題じゃないんだよ。仕事に就けないんだ。

この顔じゃ、まず営業職は無理だ。

工場だって片目ですって言った所でアウト。危ないって思われる。

企業は危険だからって採用してくれないのに、役所じゃ生活に支障は無いって認定してくれない。

おかしいだろ？

視力以前の所で支障だらけだよ。

うつ病だか何だか知らないけど、五体満足でビジュアル的に普通のヤツらが、障害年金貰ったり、生活保護受けたりしてて、俺はこの顔で仕事にも就けないのに何の認定もされないんだ。」

白い顔を紅潮させて、死神さんは一気に吐き出した。

さっきまでの人を食ったような態度の死神さんとは別人みたいな激しさに、私は硬直してしまった。

朝、会った時の暗い影が、再び彼を覆っていくのが目に見えるようだ。

彼は続けた。

「顔で怖がられるから、友達なんていなかった。

ましてや、彼女なんてできる訳ない。

でも、そこは納得してるんだ。

子供の時、家の前に捨てられてたノラ猫がいてさ。

抱いた時に、その目が俺みたいに白濁してて、ビククリして離しちやった。

見えてないのに、ジっと見ているあの白い目がすごく怖くてさ。
で、俺、分かったんだ。

友達ができなくても、苛められても、もうしょうがないなって。
だって、俺もやっぱり怖いんだから。」

そこまで言うと、彼は軽く溜息をついて眼帯を目にかけた。

硬直したまま、黙っている私を見て、恥ずかしそうに笑う。

今までの激しさが眼帯で封印されてしまったみたいな、無邪気な顔
に戻っていた。

「ごめん。つまらないこと言っちゃったな。つまり、何が言いたいかって言うと、人の悩みとか、辛さとかは他人が定規で測れるものじゃない。だから、俺はあんたがどんな理由で死を選んでも、それはリスペクトする。あんたの辛さはあんたにしか分からないからな。」

私は呆然として彼の顔を見つめていた。

何故だろう。

涙が勝手に溢れてきて、私の頬を濡らした。

彼の人生に同情したのか、自分の人生を少しでも理解してくれよう
としてくれて嬉しかったのか。

私の涙を見て、ギョっとした彼は慌てて手をバタバタ振る。

「な、泣くなよ！同情して欲しくて見せた訳じゃない。ただ、あなたの気持ちは分かるよって言いたかったんだ。」

「・・・うん。ありがとう。でも、死神さんに比べたら、私の動機
なんて軽いもんだわ。バカみたい・・・。」

涙をゴシゴシ擦りながら応える私を、死神さんは、ハハハと笑い飛

ばした。

「ああ、でも正直言って、どうしてチビでメタボな男にフラれたのかは理解に苦しむよ。オヤジと寝るのが好きなの？ あんたまだ若いのに。よっぽど男に飢えてた訳？」

「はあっ？」

さっきと打って変わった品の無いモノ言い、私は泣きながらもカチン！ときた。

ヘラヘラした顔に悪気はなさそうだけど、元来、毒舌な性格なんだろう。

仕返しに、掌で打ち寄せてきた波をすくって、私は彼の顔に向って撒き散らした。

「ええ、そうですよ！ 彼氏なんて何年もなくって飢えてましたよ！ あわよくば、結婚して楽な人生歩んでやろうと思ってましたよ！ 悪い？」

「悪くないよ。でも、結局、メタボにもフラれたんだろ？ ちよ、ちよっと、濡れるとまずいって！ おい！」

「何よ！ 自分だって彼女いなかったんでしょ？」

「俺は飢えてないよ。店行くし。」

「やだ、サイテー！ 下品なこと言わないで！」

私の水攻撃に、彼は腕で顔を庇いながら後ずさる。

彼の黒いジーンズが海水に浸かり、そのまま濡れた砂に足を取られて、背中から転倒した。

仰向けに海水に浸かっている彼を跨いで、私は更に水をかけた。

「あーあ、これ、どうしてくれるの？」

「いいじゃん、もう泳げば？」

恨めしそうに波の中から身体を起こした死神さんに、私はべーっと舌を出した。

理由 3

完全にズブ濡れになった死神さんは、半身水に浸かったまま、Tシヤツだけガバッと脱いだ。

濡れた白い上半身に、さっきの網のような刺青が右肩から二の腕にかけて広がっていて、私はドキっとした。

ワンポイントとは言い難い、かなり派手にやってしまった感じた。

私が凝視しているのに気が付いて、彼はニヤッと笑った。

「興味ある？ どうせ死ぬなら何でもやってみたら？ 公共のお風呂には入れなくなっちゃうけど。」

「け、結構です！ 私は温泉好きなの！ もう時間もないでしょ？」

「そうだね。本物は時間ないし、俺がマジックで描いてあげようか？」

「何が悲しくて、あんたにマジックで落書きされて死ななきゃなんないのよ？」

私の突っ込みに彼はハハハと笑った。

「あんた、面白いな。もっと笑えること言ってやろうか？」

「何よ？」

彼は自分の身体を見て、自嘲的に言った。

「これ、やって貰うのに、金払ってないんだよ。」

「・・・どうして？」

「これ彫ったヤツが、初めてだって言うんで、俺が実験台になってやったんだ。逆に金貰ってやったんだよ。だから自分でデザイン選べなかった。できたの見たら、デカ過ぎてビックリだよ。仕事ないから、身体で稼ぐことしかできなくてさ。最後の仕事は3ヶ月病院

に閉じ込められて、新製薬のモニタリング。顔がマシだったら売春もやってるね。今んとこ需要はないけど。」

・・・笑えない。

自虐もそこまでいくと、痛々しい。

私は眉間にしわ寄せて、イヤな顔してみせる。

「そのシュールなギャグに、どうやって突っ込んだらいいの？」

「別に。そんなん要るか！って笑ってくれたら嬉しいけど？」

「死神・・・岸上さんだっけ？あなた、変ってるね。」

ヘラヘラしてた彼の顔が岸上という名前を言った時、少し強張った。

「うさぎさん、その名前は言わないで。死神って呼んでくれ。」

「? どうして？」

死神さんは、困った顔で舌打ちする。

名前を言っではいけなかったんだろうか？

言われて見ると、彼はこのツアーの主催者だし、刑事事件になった時には名前を知られたら困るんだろう。

弱みを握ってしまった私は、ニヤリと笑ってみせる。

「いいわよ。別に誰にも言わないから。下の名前は何？」

「・・・口が滑った。これ以上聞くなよ。」

「じゃ、私の名前、教えようか？」

「いいよ、大方、宇佐美さんと言うんだろ？クラスにウサギって呼ばれてるヤツいた。分かり易いよ。」

私はあっけなく言い当てられて、ブスッとむくれた。

もつとひねって登録すれば良かったが、もう遅い。

彼は真面目な顔で近づいて来ると、私の両肩に手をかけた。裸の彼の胸が目の前に来て、私は焦ってオタオタする。

「な、何？」

「約束しろ。岸上って絶対、他のヤツラの前で呼ぶな。」

赤っぽい右目が強い光で私を睨む。

有無を言わせない彼の低い声に私は圧倒されて、首をブンブン振った。

「分かった。死神さんて呼ぶ。」

「頼むよ。死亡推定時刻まで後10時間くらいだ。それまでそれで通してくれ。」

後、10時間。

私はその言葉に再び、悪寒が走った。

彼は私から手を離すと、ずぶ濡れになった黒いTシャツを両手で絞った。

網が掛かったみたいなたトゥーは背中から見ると更に鮮やかだ。

理屈抜きで、素直に綺麗だって思った。

「ねえ、あんたの部屋貸してくれないかな？俺は主催者だから部屋取ってないんだ。コインランドリーくらいあるだろうから、服乾くまで部屋で浴衣貸してくれよ。」

突然、くるりと振り向いて、彼は言った。
その依頼に私はギョっとする。

と、いうことは、服が乾くまでの間、一緒にいるって事？
私は咄嗟に考えて、赤面した。

「や、やだよ！何で死の際にあんたと同じ部屋で一緒に過ごさなきゃなんないのよ！」

「だって、水かけたのはあんただろ？俺に濡れたままでもいいってのか？」

「他の人に言えはいじゃない！あ、あのネオさんとか・・・。」

「あいつは苦手だ。それに俺も男だし、トウが立ってても女の部屋の方がいい。」

最後になんかとてもなく失礼なことを言ったような・・・。
私は眉間に皺寄せ、首を傾げる。

でも、確かにこのままではホテルの中にも入れないだろう。

私は渋々頷いた。

「いいわよ。責任は取るわよ。でも、服が乾くまでだからね。」

嫌々返事をする私の顔を見て、彼の顔は逆にパッと輝いた。

手をグッと握ってガッツポーズをしてみせる。

褒められた子供みたいな無邪気な笑顔だ。

「了解！お礼に相手しようか？」

「・・・何の？」

「男に飢えてるんでしょ？」

へらへら笑っている死神さんを、私はもう一度突き飛ばして波に沈めた。

迷い 1

裸でホテルのロビーに入る訳にもいかないので、死神さんはもう一度絞り直したTシャツに仕方なく袖を通した。

海水が滴り落ちるジーンズに、ベツタリ張り付いたTシャツが痛々しい。

「うああ・・・、気持ち悪・・・。うわ、ワカメ付いてる！早くシヤワー浴びよう・・・。あ、タバコも濡れちゃった！あーあ・・・。」

一人でブツブツ言っている彼を背に、私はホテルに向かってズンズン歩いていく。

自業自得だ。

子供みたいに彼は私の後をベツタンベツタン追いかけてくる。

朝見た暗闇のような不吉な死神は、今は影を潜めている。

この死神さんの不可解なキャラを私はまだ把握し兼ねていた。

己の身体、いや、人生さえとくに捨ててる妙な潔さ。

人を小バカにするようなおちゃらけた態度の裏で、社会を敵だと思ってるみたいなの、時々現われる毒舌と皮肉。

全てはこのガラスみたいな左目のせいなんだろうか。

白い眼帯は彼の隠された心の闇を覆っているようだった。

ロビーに入った私達は、レセプションの女性に露骨に嫌な顔をされながら、エレベーターに向った。

私の後ろには、海水をジーンズの裾からボタボタ滴らせている死神さんが突っ立っている。

彼が歩いた後には水溜りが点々と続いていて、レセプションの女性はそれを見て、白々しく溜息をついた。

さっき彼に渡された部屋の鍵は302号室だった。

エレベーターが三階に着いたところで、私達は降りた。

その時、私は妙な違和感を感じていた。

長らく会社勤めをしていない私でも、今日が日曜日だったことは覚えていて。

いくら時代錯誤のリゾートホテルと言っても、週末にこんなに客がいないものだろうか。

ロビーに入った時から、従業員以外に客らしい人を見ないのだ。

ドアがずらりと並ぶホテルの廊下にはやはり人影は見当たらなかった。

本当に潰れかけてるんじゃないかしら・・・？

誰もいない廊下をキョロキョロ見回して、私は部屋に向って進んでいった。

後ろから、水に濡れた彼の足音がベッタンベッタンと聞こえてくる。

こんな男でも、一人じゃないのは心強い。

一人だったら、死ぬ前に逃げ出していたかもしれない。

死ぬ為に来たのに、その前に逃げるといいうのもおかしい話だけど。

302号室のドアを開けると、思ったより綺麗な、海が見える洋室が現われた。

ワンルームマンションみたいな部屋にはユニットバスに、かわいい薄いピンクのベッド、大きな花柄のカーテンの後ろは太平洋が広がっている。

ベッドが少し大きいのを見ると、ここは二人部屋みたいだ。

そう、多分、新婚さんの・・・。

私は、濡れたジーンズから必死で足を引っ張り出している彼を振り返った。

どうして、人生最期の日にこんな素敵な部屋で、この人と一緒にいるのか・・・。

本当に人生分らない。

勝手知ったる仕草で、彼は造りつけのクローゼットを開くと、私の了承も得ずに、中に用意されていたバスタオルと浴衣を掴んで、ユニットバスに立て籠もった。

中からシャワーの水音が聞こえてきて、手持ちぶたさに私はソファに座った。

ポットに入っていた冷たい麦茶を飲みながら、ユニットバスから聞こえてくる水音に耳を傾ける。

何故か、昔の彼とラブホテルで過ごした夜のことを思い出した。

疲れた・・・。

そう言えば、朝、早かったんだっけ・・・。

ソファにもたれて、私は束の間目を閉じた。

今頃、家ではいなくなった私を探して大騒ぎしてるかもしれない。

・・・いや、いないことに気付きもしないか。

弟夫婦とその子供達が押しかけて来てから、あの家には静寂というものが無くなっていた。

私の居場所も・・・。

ユニットバスのドアが開く音がして、浴衣姿の死神さんが、頭をタオルでガシガシ拭きながら出てきた。

濡れた髪の間から、眼帯を外した左目がチラチラ見えて、私は思わず目を逸らす。

子供の頃から、身体の不自由な人をジロジロ見ちゃいけませんって教育されてきた私は、彼の顔を直視するのがタブーに思えて仕方ない。

さっきのタトゥーだって、知らない人だったら絶対に見てないだろう。

人が気にしているであろう事には、視線を合わせないフリをする。その程度には、私も大人だった。

気まずそうな私の表情に気が付いたのか、彼は意地悪そうにニヤリと笑った。

「怖いモノ見たさだろ？見たけりゃ見れば？」

私の深層心理まで見抜かれそうなスモークガラスの左目に見つめられて、私の鼓動が早くなった。

まさか、本当に怖いモノ見たさだとは言えず、私は黙った。

上背のある死神さんの浴衣姿は思いの他、セクシーだった。

何故かどきどきして、許可の下りた左目を観察する。

一つ分かった事は、彼が怖い存在だという事。

見たくて堪らないのに見ちゃいけない、禁忌を散りばめた彼の身体に私の興味は尽きなかった。

こんな人は初めてだった。

突拍子もない彼の言動は、多分、理解できないまま終わるんだろう。時計は1時を指していた。

死亡推定時刻まで、あと9時間。
未練のなかったこの世界に心残りができそうな予感を感じて、私は
言いようのない焦燥感に駆られた。

迷い 2

「ねえ、これから夕食まで何するつもり？」

私が座っている一人掛けのソファの前に、彼は向かい合ってドカッと座った。

肌蹴た浴衣から足がすらりと出てきて、私は中まで見えてしまうんじゃないかと慌てて下を向いた。

面白そうにニヤニヤ笑って、彼は首を傾げて私を見つめる。

この人の見えない左目には、見えないモノが見えているみたいだ。どんな嘘についても、見透かされてしまう。そんな気がした。

「・・・何もしないよ。ここで海見てる。他の人たちも自分の部屋に籠っちゃったんでしょ？なんか、集団で来た意味がなかったわ。」

「・・・そうだね。どうして一人で死ななかったの？」

私は沈黙して考え込んだ。

どうしてだろう。

一人が怖かったのかな・・・。

「死んだ事ないから自殺するのが怖かった、と思う。きっと、私と同じ思いの人が一緒にいれば、心強いと思って・・・。でも、ちょっと後悔してる。これから死ぬ人たちと今更仲良くなったって、意味がないことに気が付いた。」

「・・・そう。でも、ちよっと遅かったね。」

彼の言葉に私は思わず、顔上げた。

色違いの両目で死神さんは無表情で私を見つめている。

「・・・遅いよね。」

「そうだね。生きたくなかった？」

言葉が出なかった。

唇を噛み締めて俯く私を、死神さんは見ている。
心を見透かすスモークガラスの瞳で。

それを見つめ返す勇氣は、私にはなかった。

やがて、彼は無表情のまま、立ち上がった。

「・・・夕食は7時から地下のレストランで。時間厳守でお願いしますね、うさぎさん。」

私は彼の顔を見上げた。

この自殺ツアーエデンから抜け出す事は、彼の許可がいるに違いはない。

濡れた髪で彼の顔はよく見えなかったが、厳しい表情をしているのは分かった。

彼は濡れた自分の服をユニットバスから集めてくると、まだ座ったまま茫然自失している私を見下ろして少し笑った。

「浴衣、借りるよ。じゃ、後からレストランでね。」

パタンと部屋のドアが閉められる音がして、私は一人で取り残された。

もう帰ったら？なんていう台詞を、私は待っていたかも知れない。
残念なことに、彼の口からその言葉は出てこなかった。
私は、脱力してソファに座り込んだ。

窓の外には白い波が光る太平洋がキラキラ輝いていた。

晩餐 1

結局、私は死神さんが出て行った後も、部屋で一人でボンヤリしていた。

七時の夕食まで時間はあったけど、何かをしようという気にはならなかった。

そもそも死の際に温泉入ろうとか、宴会しようとか、そんなポジティブな人間がいたとしたら、その人は絶対死さない。

死神さんが考案したであろうこのツアーE D E Nに、私は若干の違和感を感じていた。

多分、彼は死の間際までポジティブにヘラヘラしているタイプなんだろう。

その死神さんの紅茶色の瞳を、私は何度も思い出していた。

止めれば？って言うてくれたら、私はきっと頷いただろう。

でも、彼の口からその言葉は出なかったのだ。

私は、その時初めて悲しくなった。

私が生きる事を誰も望んでいないのだと、痛烈に感じたのだ。

鼻の奥がツンとして目頭が熱くなる。

溢れてくる涙を私はゴシッと腕で拭った。

部屋に掛かっている時計は2時になろうとしている。

私はベッドに身体を投げ出し、枕を抱き締めた。

マットの心地よい弾力と清潔な布団の匂いが眠気を誘う。

私は、本能に抗えなくなつて、そのまま目を閉じた。



トントントン・・・

部屋のドアをノックする音で私は目を覚ました。

ハットとして周りを見ると、部屋の中はもう真っ暗だった。

さっきまで波がキラキラしていた窓の外の海が、真っ黒な絨毯を敷き詰めたように不気味に広がっている。

一瞬、自分がどこにいるのか分からなくて、私は寝ぼけた頭をブルンと振った。

・・・そうだ、私はツアーに参加して・・・。

だんだん頭がハッキリしてきた時、トントンと部屋のドアが再びノックされる。

私は時計を見た。

既に6時半を回っているではないか。

あのまま泣き寝入りしてしまったらしい。

ヨロヨロとベッドから這い上がって、私は部屋のドアを開けた。

「うさぎさん、もうすぐ夕食です。見当たらないんで呼びにきましたよ。」

そこに立っていたのはネオさんだった。

バスの中にいた時と同じ格好で、柔らかな笑みを浮かべて部屋の前で立っている。

浴衣も着てないところを見ると、温泉には入ってないようだ。

銀縁メガネの奥の理知的な目を細めて、彼は私を見下ろした。

さっきの紹介で178cmだと言っていたが、全体に細くて頭が小さいネオさんはバランスが良くて、実際よりもっとすらりと長身に見えた。

「一緒に行きましょう。もう皆集まる頃ですよ。・・・目が腫れますけど、大丈夫ですか？」

言われて、私は慌てて目をゴシゴシ擦った。

「だ、大丈夫です。今、うたた寝しちゃってて・・・起こしてくれて良かった。すぐ顔洗ってきます。」

私は一旦部屋に入って、慌てて顔を洗う。

落ちた化粧を洗った後、もう一度塗りなおそうと、バッグの中に入っていた化粧ポーチを取り出した。

急なお直しができる優れものポーチだ。

つまり、私は化粧を落として、し直すことまで想定していたのだ。最初っから死ぬつもりじゃなかったのかも。

私はそう思って苦笑した。

ネオさんと私は連れ立って地下のレストランに向った。

竹の柵の囲いに、ご丁寧に堤燈が立っている料亭みたいな純和風のエントランスが見えた。

中に入ると、襖で仕切られた座敷になっている個室が並んでいて、ちょっとした宴会会場になっている。

ネオさんは私を促して、その中の一番奥の座敷に誘導する。

「遅くなりました、すいません。もう始めてますかね？」

柔らかな営業スマイルでネオさんは、襖を開けた。

そこにはバスで一緒だったミナミのドンみたいなおじさんと、奥様風の女性「しずかちゃん」が既にテーブルに座って待っていた。

二人がテーブルに向かい合う姿は、亭主関白の夫と控えめな貞淑な妻のようだ。

テーブルには天麴羅盛り合わせや、刺身、茶碗蒸し等、純和風メニューが並んでいる。

蓋が既に開いたビール瓶と日本酒がテーブルの中央に並んでいて、本格的に宴会モードだ。

盛り上げればの話だけど。

テーブルを挟んで向かい合って座っているしずかちゃんの隣に私は座った。

続いてネオさんはドンの隣に座る。

ドンもしずかちゃんも数時間前と全く変らない装いで、この人たちも風呂に入っている心境じゃないんだと私は少しホットとした。

自殺志望者の4人がここに終結した。

こんな時まで気配りを怠らないネオさんは、早速皆のグラスにビールをついで回る。

先にお酌をされてしまった私は、慌ててネオさんのグラスにお返しした。

ありがとう、と言ってネオさんは私にウィンクして、ビールの入ったグラスを掲げた。

「では、僭越ながら、私が音頭を取らせて頂きます。楽園への出発を祝して、乾杯！」

・・・樂園への出発・・・。

冗談にしても笑えるレベルじゃなかった。

私は背筋が寒くなりながらも、ビールに口を付ける。

ゴキゲンな顔で音頭を取ったネオさんは、満面の笑みを浮かべたま
まグラスのビールを一気に飲み干した。

私はビールを舐めながら、キョロキョロと辺りを見回していた。

そこには主催者である筈の死神さんの姿がなかった。

晚餐 2

ネオさんの挨拶を皮切りに、一同箸を手料理に手をつけ始めた。

座敷内は静かな和風ヒーリングミュージックが流れている。

その低い音の他は、人の声さえしなかった。

そう言えばこのレストランだって、襖で仕切られた座敷がまだ他にも沢山あるのだ。

なのに、さっきから話し声一つしない。

私達の他には誰もいないに違いない。

このツアーの為に貸し切っているんだろうか。

あのヘラッとした死神さんにそんな財力と権力があるとは思えないけど。

「さあ、飲んで飲んで。人生の最期は楽しい酒で逝きましょうよ。ね、うさぎちゃん。」

新たにビールを注ぎながら、ネオさんは軽い口調で私に話しかける。その明るい笑顔を見ながら、私は小さな声で聞いた。

「・・・あの、私達の最期はどうなるんですか？これからまだ、どこかに行くの？それとも海で入水自殺とか？」

「そんなことは僕らが心配しなくていいんだよ。こっちは客だからね。主催者側に任せておけばいいんだ。気が付いたらあの世だった、みたいな楽な死に方だと思うよ。」

客って・・・料金も払ってないのに？

そもそも主催者側に何のメリットがあるんだろう。

私は溢れんばかりに継がれたグラスのビールに口を付けながら考え込んだ。

「ウサギさんは、どうして死のうと思ったの？」

突然、私の横に座っていた奥様が話しかけた。

さっきまで俯いていた奥様の顔が、思い詰めた様子で強張って私を凝視している。

その必死の形相に、私の軽い動機を話すのが憚られた。

「・・・まあ、失業してから実家に居場所もなくなって、ちょっとだけ付き合った人にもフラれて・・・何となくヤケになってって感じですかね。」

言ってる私自身が恥ずかしくなるようなチープな理由だ。

本当にこんな事で死ぬ理由になるのか、改めて疑問に感じる。

奥様は一瞬、整った白い顔を引きつらせた。

「あなたは結婚もしてないし、守る家族も子供もないのに、どうして死ぬ必要があるのかしら。養うべき人間がいらないんだから身軽じゃないの。これから何でもできるのに・・・。」

耳にタコが出来るほど聞かされてきた正論を突きつけられ、私はムっとした。

この歳になると、結婚してる友人は子供も小学生くらいで、会う度に「独身は身軽でいいわね」なんて厭味を言われる。

その度に、「しないんじゃないかって、できないのよ」って笑いながら

ジョークでかわすけど、本当は笑い事じゃないのだ。

早く落ち着きたい、経済力のある人と一緒になって子供を作って安定した生活をしたい。

私の見果てぬ夢をあっさりと叶えて、専業主婦の名の元に働きもせず、旦那の収入でのんびり子育てしている友人達にどれほど憤りを感じるのか。

それを「いいわね」なんて・・・。

全てを手に入れ、楽な人生を送っているクセに、旦那の悪口ばかり言ってる友人達には絶対言われたくないことだった。

私は奥様がそういう友人の一人のような気がして、無性に腹立った。

「あなたには三十路の売れ残り女の気持ちなんか分からないと思いますよ。できるなら私だって、子供育てながら、家で昼ドラ見て、旦那の愚痴言っただらドラ生きていきたくったです。」

明らかに悪意のある私の言葉に、奥様の白い顔がサッと赤くなった。あわや一触即発・・・と思った時。

「まあまあ、僕の死んだ妻みたいに子供もいないくせに、働きもせず、韓国ドラマにハマって、昼間っからスタバでミクシー友達とコーヒー飲んでた女もいますからね。」

独身でも働いてる方や、働いてなくても子供の世話がある方は大変ですよ。何にもしない女性だってそれなりに大変ですけどね。僕の妻曰く。」

凍りついた場の雰囲気や和らげようとしてくれたのか、ネオさんが口を挟んだ。

ネオさんの分かりやすくも冷静な対応に、自分の子供っぽさが恥ずかしくなって私は黙った。

奥様も気まずそうに顔を背けて、黙り込む。

「私に言わせりゃ、女なんて皆甘いさ。男ほど背負う物もないくせに、所有権だけは主張したがる。」

私の女房だって、いい加減なもんだ。

人の給料握ってる上に預金通帳の記帳は怠らず、何を買ってるのかチェック入れてる。

お前の金じゃないって一度言ってやりたいね。」

ドンが貫禄のある低い声で私達にとどめの喝を入れた。

人生経験も豊富そうなドンがそう言うのと、何故か反論できなくなっただ。

「まあまあ、楽しい酒にしましょうよ。僕はそれでも女性が好きですけどね。それにしても死神クンは遅いですねえ。時間厳守だって自分が言ったのに。」

手酌でビールを注ぎながら、ネオさんはわざとらしく話を逸らす。さっきから気になってた彼の事がネオさんの口から出て、私は思わずビクつとした。

その反応が分かり易かったのか、ネオさんは私の顔を覗き込んで、微笑んだ。

「ウサギさん、彼の事が気になる？　そう言えばロビーで二人で話して入ってたね。」

「い、いいえ！　そんなんじゃないやしません。彼が勝手に絡んでくるので……。」

「ほお……。好かれちゃったのかな？」

「そんなんじゃないやしませんって！」

私は赤面しながら手を振った。
何だろう。
顔が熱くて、ヘンな汗が出る。
動悸も早くなってきた。

「いいじゃない？ 最期に若いもの同士、いい思い出作ってから逝くのも。彼は来るもの拒まずな感じに見えるけど？ 役不足かな？」
「な、何の話ですか！ 私はそんなに軽い女じゃありません！」
「ハハハ・・・かわいいな、ウサギさん。あなたに誘われたら、死神くん大喜びですよ。彼、案外イケメンなんだよ。目が怖いけどね。」

ネオさんの言葉に私はもう真っ赤になって首を振った。
こんなふうに冷やかされるのは中学校以来だ。
不思議と悪い気はしないのだが、何でだろう。

顔が熱い。
いや、身体が熱い。
お酒が回ってきたみたいだ。
そして急激に襲ってくる抗いがたい睡魔。
指先や舌が痺れて呂律が回らなくなっている。

そして何より、気持ちいい。
だるくなってくる体を支えきれなくなって私は座敷に蹲った。

「・・・ウサギさん？　ウサギさん・・・」

ネオさんの優しい声が遠くに聞こえる。

熱い体が浮いてるみたいに軽くなってきた。

ビールってアルコール何度だっけ・・・？

ボンヤリ考えている間に、痺れていた手足の感覚がだんだんなくなっていく。

自分の身体じゃないみたいに重力を感じない。

ラリってるってこういう感覚なんだろうか・・・？

気持ちいい・・・。

眠気で霞んでくる私の視界に見覚えのある顔が映った。

髪で半分隠れた白い顔に、紅茶色の瞳。

ホントだ。

良く見るとイケメンかも。

死神さんの顔を見続けることはできなかった。

私は完全に睡魔に取り付かれ、意識を手放した。

晩餐 2（後書き）

ここまで読んでいただいた方々、ありがとうございます。
ここで一部終了です。

次なる展開にご期待下さい。

経緯 1

俺は片目が見えない。

隠しようがない。

顔見れば、見えないってバレバレだ。

俺の左目は白濁して、白いビー玉みたいだからだ。

生まれた時はこうじゃなかったと思うけど、物心ついた頃には既にこうだった。

俺が物心ついた頃というより、周りの子供が物心ついて、俺をからかったり、苛めたりし始めた頃だ。

「岸上」という苗字を文字って「死神」と呼ばれるようになったのもその頃だった。

片方見えないともう片方も悪くなるって医者は言っただけど、幸か不幸か右目の方は全然悪くならなかった。

だから、生活には支障はないし、何の不自由もない。

普通はそれを幸だと考えるべきなんだろうけど、そうでもないらしいと気付いたのは大人になってからだった。

角膜移植すれば治るかもしれない。

大昔、当時の担当医はそう言った。

だけど、金にかかるし、まずドナーが見つからない。

腎臓とか骨髄とかと違って、目は完全に死んだ人間からでないと言

えない。

二つあるからと言って、生きてるうちに片方寄付するヤツなんている訳ない。

だから、俺は移植は半分諦めていた。

だったら、摘出して義眼にすれば？と親は言ったけど、アンドロイドじゃないんだから。

この歳になって身体の中に異物が装着されるのは、絶対違和感を感じるに違いない。

考えただけで鳥肌が立って、俺は首を横に振った。

親がそう言ったのは、尤もなことだった。

この顔してる限り、企業には障害者に見えるし職場も限られてしまう。

少なくとも摘出してしまえば、右と同じような目が入るだろう。

でも、俺は躊躇した。

もし、万が一、医療技術が進歩して治ることがあったとしても摘出した後だったら、もう終わりだ。

俺は日本の技術力を信じている。

たった20年前までインターネットなんてなかったのに、今では俺でさえもスマートホン持ってるんだから。

もしかしたら、いつか治るかもって期待を俺は持ち続けていたのだ。

そんな感じだったから、片目でも学業には支障はなかった。

しつこくからかってくるバカがウザイことと、女の子にモテないこと以外はあまり困ることはなかった。

卓球とかバドミントンとか、球が速くて小さいスポーツ以外は適当にこなせたし、普通科高校卒業してから大学も行った。

問題はその後だった。

卒業しても就職先が決まらないのだ。
優秀じゃない自分を擁護する訳じゃないけど、八割方はこの目のせいでいいのだ。

いつも眼帯をかけている訳にはいかないし、入社後バレてもめるのも嫌なので、入社試験時にはいつも素顔で行った。

それが悪かったのかもしれないけど、いつも面接で撥ねられてしまうのだ。

今なら、それは当然だと思う。

営業職はまず無理だし、運送系とか工場系の仕事は、仕事中的事故の際に会社が責任を負う羽目になるのだ。

最初からややこしい人間は入れない方が賢い。

その年に卒業したことも俺には逆風だった。

景気がいいとは言えないご時世で、五体満足で俺より優秀な学生が溢れているのに、あえて障害のある俺を採用しようという会社がある訳なかった。

仕方がないので派遣会社に登録して夜勤専門の期間工やったり、コンビニで深夜のバイトしたり、卒業してからの俺は夜の仕事ばかりスポット的にやって小遣いを稼いでいた。

何で夜勤かと言うと、昼間だと客の目につくからだ。

かなり人権侵害的な暴言だが、それをコンビニの店長に言われた時、本当のことなので腹も立たなかった。

そうしている内に、俺と同じように定職につかないフラフラしたヤツラと交友関係ができた。

「タトゥー入れてみないか？金はこっちが払うよ。その代わり失敗しても文句なし。」

悪友の一人が俺に話を持って来た時、俺は何も考えずに頷いた。理由は二つ。

その時、金がなかったから。

アパートの家賃を滞納していた俺は、その時切羽詰って、何でもいいから5万円欲しかったのだ。

もう一つは、身体に目印をつけたかったから。

もし俺が殺されてバラバラにされても刺青があるパーツは俺だってすぐ分かるだろう。

定職もなく、住所不定でフラフラしながら、良くない交友関係をズルズル引き摺っている俺は、何となく長生きできないような気がしていたのだ。

やってるときは痛かったけど、刺青は俺の予想に反してカッコよかったし、気に入った。

ただ、こんなにでかいとは思わなかった。

コレなら死んだらすぐ分かるけど、公共のお風呂や市民プールには行けないだろう。

今まで行った事もない所だから、行けなくなっても困らないけど。

それから俺は自分の身体を使って稼ぐことを覚えた。

手っ取り早く金になるのはやっぱり売春。

女相手には需要がなくても、男相手なら案外いけた。

もちろん、俺は女が好きなので、要望があった時には、相手が年増だろうが高校生だろうが構わなかった。

後は、病院とかのサンプルを取る為のモニタリング。

毎日薬飲んで1ヶ月ごろごろ何もしないでいるとか、まっとうな社会人ではなかなか出来ない仕事だ。

でも、暇を持て余している俺には都合良かった。

要するに人体実験なんだけど、それを一度引き受けたら、その病院から何度も依頼が来るようになった。

そこで俺はとんでもない事に巻き込まれるハメになったのだ。

経緯 2

その病院は「医療法人 楽園会グループ」に属する総合病院だった。その名も「楽園会病院」。

病院に「楽園」とはシャレにもならない、悪趣味なセンスだ。

初めて聞いた時、俺は思わず吹き出したけど、この病院の成り立ちを聞いてから納得した。

高齢化社会の到来を予見していた貧乏な町医者が、いち早く老人ホームやらグループホームやら、所謂老人産業に手を出して、大きくグループ化したのが始まりらしい。

今では本業の総合病院の他に、老人向け施設やヘルパー派遣、デイサービス、リゾートホテルまで経営してるって言うマルチぶりだ。

その原点となった最初の老人施設の名前が「楽園」だったらしい。余生を静かに過ごす年寄り達が集まる場所としては、これ以上相應しい名前はないだろう。

とにもかくにも、俺はその楽園会病院で、3ヶ月のモニタリングのバイトをする事になった。

もちろん、人体に影響のある薬の人体実験だったら絶対断わる。

俺だって、人生投げてるとは言え、死にたい訳じゃない。

サプリメントを毎日飲んで、ごろごろしてるだけだから、と言われて、やっと応じた。

それは本当に退屈なバイトだった。

何しろ、外気に触れてはいけなかったので、隔離された病棟の中から出して貰えないのだ。

シャバに出て風邪でも引かれたら、サプリメントのモニタリングにならないからと言われ、俺は承諾するしかなかった。

病棟には当然、売店も本屋もなかった。

必要なものがあれば看護婦に言えば調達してきてくれるんだけど、まさかエロ本買ってきてくれなんて言えないだろう。

ゲームの類はモニタリングに影響を与えるという理由で禁止されていた。

俺を毎日測定する看護婦が身の回りのことも相談に乗ってくれるんだけど、そいつが美人なのに堅物で俺はどうも苦手だった。

「これから三ヶ月、あなたの身体検査と生活のケアを担当します^み皆本^{なもと}静香^{しずか}です。宜しくお願いします。」

サラサラの黒髪のボブが細面の白い顔によく似合っているその看護婦は、俺相手に頭をペコッと下げて堅っ苦しい挨拶をした。

生真面目で仕事ができる看護婦なのは、見ただけでよく分かった。でも、こいつに「エロ本買ってきて」なんて言える男がいるだろうか。

真面目な顔で「どんなジャンルが希望ですか？」って聞き返されそう・・・。

しょうがないから、俺は無難に巷で流行りの海賊マンガ全巻を所望した。

60冊くらい出てるこのマンガを全部読み終わる頃には、三ヶ月も終わってる筈だ。

朝、起きて食事をしてから、指定された薬を飲み、入社試験に提出

する程度の身体検査をする。

昼飯の後、軽い運動。

夕食後に再び指定された薬を飲んで、もう一度身体検査。

これだけで俺の一日は終わる。

後は自由時間なんだから、暇でしようがない。

この手のバイトがこんなに苦痛だとは思わなかった。

話し相手はこの生真面目看護婦しずかちゃんと、担当医だけだった。



「君、目が悪いんだね。不便じゃないの？」

医者らしく、開口一番にそいつは人が言いにくい事をズバっと聞いてきた。

普通の人は俺を直視しないように顔を背けるのに、そいつは好奇心丸出しで俺の顔を見つめてくる。

医者として、俺の白濁した左目に興味があるんだろう。

そのダイレクトな態度には、俺はむしろ好感を持った。

「子供の頃からこうなんで、慣れてます。生活には支障ありません。

」

「そりゃ、残念だね。支障があれば障害年金で楽に暮らせたのに。」

そいつはニコニコしながら、医者にあるまじき暴言を吐いた。

目が見えてて残念だって言ったのはこいつが初めてだった。

普通の人間は、「まあ、片目だけでも見えてて良かったわね。気を付けてね。」なんて当たり障りのないことを言うのに。

でも、こいつの言った事こそ正論だった。

なまじ見えると、障害者として認定されないのだ。

認定されれば、いろいろな特典があることは知っていた。

弱者に優しいこの国にいる限り、俺には最低限の生活は保障される筈だった。

「残念ですよ。でも、自分ではどうすることもできない。治してくれますか？」

「無理だね。それ、治らないよ。移植でもすれば別だけど。」

俺の切実な質問に、そいつは顔色も変えずサラっと言ってのけた。

患者の希望の芽を踏みにじりやがって・・・！

長年の希望をあっさり否定されて、俺は思わずムっとして舌打ちした。

「いいですよ、別に期待もしてませんから。治らないって分かってんなら、この目の事はほっとして下さい。」

「・・・君、面白いね。君がもう一つバイトを掛け持ちしてくれるなら、治せないこともないよ。」

俺の担当医、根尾正和ねおまさかずはそう言って、銀縁メガネの奥の瞳をイタズラっぽく細めた。

取引 1

俺の目が治る？

聞き捨てならないその台詞に、俺は思わず身を乗り出した。

担当医の根尾^{ねお}は、医者らしからぬブラックな思想とデリカシーの欠片もない横柄な性格を白衣で隠した、俺に言わせりゃタダの嫌なヤツだった。

細面の白い顔は案外彫りが深くてちょっと白人系のハーフみたいな顔立ちだ。

自分でキアヌ・リーブスに似てるって言ってただけはある。

病棟の診察室でヤツは向かい合って座ってる俺を面白そうに見た後、指で俺の顎をクイっと上げた。

顔を上向きに固定されたまま、ヤツの顔がちょうどキスするような角度で近づいてきて、俺は焦った。

「ちょ、ちょっと、何するんですか？ バイトってもしかして・・・？」

俺に体売れって言いたいのか？？？

慌てる俺を見て、根尾は更に嬉しそうに笑みを見せた。

俺の顔を固定したまま、興味津々な子供みたいな顔で質問する。

「君はそういうバイトもやってんのか？」

「・・・要望があればやりますよ。バイトってそういう事ですか？」

ハッハッハ・・・と根尾はアメリカンコミックみたいな大袈裟なジエスチャーで笑った。

「残念ながら、ちょっと目を診せて貰おうと思ったただだよ。君がバイトしたいって言うなら別だけど？」

根尾は俺の顔を上から覗き込んで、もう片方の手でグイッと左目をこじ開けた。

ヤツのヘラヘラした顔が初めて医者求真剣な表情に変わって、俺は一先ずホッとした。

俺の左目を虫眼鏡で覗いたり、違う角度から覗いたり、本を開いて読んでみたり、しばらく根尾は自分の世界に入って考え込んでいた。やっと俺の顔から手を離れた時、ヤツは医者求真剣な顔をしたまま真面目な口調で言った。

「移植すれば治ると思うよ。」

無意識に大きな期待をしてしまっていた俺は、その言葉にガクッと肩を落とす。

そんな事は子供の頃から知っている。

誰もくれないから、困ってんじゃないか。

ムカついた俺は立ち上がって、部屋を出ようとした。

「治りたくないのか？」

ドアの前まで来た俺の背中にヤツの柔らかい声が追いかけた。

どんだけバカだ、この男は・・・。

お前の角膜くれるのかよ？

俺は苛々しながら髪をガリガリ掻いて、ヤツを振り返る。

キアヌ・リーブスみたいな優雅な仕草で、根尾はデスクに肘をつき足を組んでこっちを見ていた。

喋れば一本切れた変人だってすぐ分かるのに、こうやって見ると根尾はインテリの医者にしか見えない。

そのインテリ面でニヤリと笑って、彼は続けた。

「岸上君、まだ僕はバイトの話してないけど？」

「・・・いい怪訝にからかうの止めて下さい！俺としたいなら先に金くださいよ。」

「バイトっていうのはその事じゃない。今やってる美容サプリメントのモニタリングでもない。君の目が治るかもしれない大きな特典のある報酬制のバイトだ。」

俺は首を傾げて口を閉じた。

言ってる意味が分からなかったからだ。

「・・・何が言いたいのかわかりません。」

「分かりたい？だったら説明するけど？」

「・・・もういいよ！」

ヤツの余裕綽々のまどろっこしい話し方にイライラした俺は、クルリと背中を向けてドアに手をかけた。

「待てよ、岸上君。その件について僕は君と真面目に話がしたいんだ。金は払うから話を聞いてくれないか？」

ドアの前で立ち尽くす俺の背中に根尾は近づいてきた。

白いズボンの後ろポケットから財布を出すと、無造作に札を何枚か引き抜き俺に握らせる。

金をくれれば何でもする主義の俺は、ヤツの顔を睨んだ後、握らされた札を鷲掴みにして自分のポケットに捻じ込んだ。

「了解です。これであなたは俺を拘束する権利がある。つまらないポケでも突っ込んであげますよ。話、聞きましょう。」

「ありがとう。君は分かりやすいな。当然、拘束時間内なら渡した金額相応の事は要求してもいいんだろ？」

根尾は無邪気な顔で笑って、恐ろしい事を言った。眉間に皺寄せながら、俺は苦笑いする。

「・・・要望があればね。こっちも大人ですから、それなりに対応します。」

「じゃ、要望するよ。僕は支払った金に対して正当な見返りがないと納得できない性格なんだ。」

さあ、どうぞ！と云わんばかりに根尾は診察室の白いパイプベッドに手を差し出した。

取引 2

「岸上君は考えた事あるかな？日本中で年間、どの位の人が自殺してるのか。」

根尾は眼鏡を外した柔らかい表情で俺を見下ろして、イヤな話題を振ってきた。

バイトとは言え、寝ながらする話じゃないだろう。返答に困って、俺は苦笑いする。

診察室の中の小さなパイプベッドは大柄な男二人の体重で、動く度にギシギシ耳障りな音を立てる。その音と視界に入る床に散らばった二人分の衣服が、自分の置かれた現状を思い知らせてくれた。

・・・ホントに何でもできるんだな、俺って。

プライドの欠片もない自分に、呆れるのを通り越して感心してしまう。

「そんな事考えた事もないですよ。俺はこれでも死のうと思った事ないですから。それが人の体を買ってまで真剣に話したかった事？」
「まあね。でも、君は死なないだろうなあ。寧ろ殺す側の人間だと思ふよ。」

クツクツと喉の奥で笑って、ヤツは俺の鎖骨を舌でなぞった。悪寒とも快感ともいえないその感触に、俺は無意識に体を仰け反らす。

俺の反応を面白そうに眺めながら、ヤツは世間話でもするように語

り出した。

「毎年、三万人くらいはいるらしいよ。健康な人体が理由もなく三万體も消えていくんだ。1年で三万人、二年で六万人だ。君が何歳からその目でいるのか知らないけど、そのくらいいいれば一人くらい君の角膜ドナーになれる人間はいただろうにね。

どうせ死ぬなら俺にくれたらいいのについて思わないか？

彼らは生きるのをもう諦めたんだ。これからも人生のレースを闘っていく人間に要らない体を空け渡しても、バチは当たらないよな。」

「・・・だから、何です？僕は殺人はしませんよ。」

ヤツの手が俺の胸をすべり、肩の刺青をなぞっていく。

荒くなる呼吸を感じられまいと、俺は唇を噛み締めた。

そこにヤツの唇が重なり、生暖かい舌が口内に侵入してくる。

無理矢理こじ開けられた口の中でヤツの舌は縦横無尽に動き始めて、俺は抵抗するのを諦めた。

「殺してくれとは言わないよ。死にたい人間を探して欲しいんだ。

僕らもちろんフオローする。年間三万人もいるんだからすぐに見つかると思わないか？」

キスの合間に根尾は低い声で俺の耳元で囁いた。

俺はギョツとして、思わず体を起こした。

「・・・何ですって？死にたい人間を探す？」

「そう。自分から死に場所を探してやって来る人間を探して欲しいんだ。彼らの望む死を与えてから、僕らはその体のパーツを頂く。君に適合する人間がいたら優先的に角膜は譲るよ。でも、心臓は僕に譲ってくれ。」

角膜だの心臓だの、人間の体の一部をまるでローズとかレバーみたいなノリで根尾は語る。

どこまで本気なの把握しかねて、俺はヤツの顔を見つめた。

その俺の顔を手繰り寄せ再び濃厚なキスをした後、根尾は少し恥ずかしそうに笑った。

「実は僕は既婚者なんだ。妻は名古屋の病院に生まれた時から入院している。僕は彼女の担当医だった。彼女は生まれた時から心臓に疾患があって、臓器移植する以外に治らない。健康体が年間三万本も消えていくなら、たった一つ心臓をくれてから逝ってもらっても悪くないだろう？ かわいそうな彼女は病院から出た事もないんだよ？」

俺は返答に困って黙っていた。

根尾の白い顔に少し赤みが差して、穏やかだった声に語気が荒くなったのを感じた。

俺の反応をよそにヤツは話し続ける。

「彼女の余命が僅かだって分かった時、僕は結婚を申し込んだんだ。好きだったからと言うより、同情からだ。彼女が子供だった頃から診てて、夢は根尾先生のお嫁さんになることなんて言われ続けてね。

新婚生活を送る間もなく、彼女は逝ってしまうって分かってたから思い出を作ってあげたかったんだ。

僕は最初から結婚できるような男じゃないから、一度だけ彼女の為に、誰かの妻という肩書きをあげようと思ったんだよ。ロマンストだろう？」

「・・・つまり、あんたバイなの？」

俺の質問にヤツはニヤリと笑った。

起き上がった俺の上半身を再びベッドに押し倒し、俺の胸に唇を押し当てる。

「多分、僕は不完全なモノに惹かれるんだ。君や僕の妻みたいに不完全な体で懸命に生きてる姿に引き寄せられるんだよ。自分が生への執着がない為にね。生きる為に何でもできる君のバイタリティは素晴らしいし、君の左目は綺麗だよ。」

「・・・そりゃ、どうも。」

人をつかまえて不完全とは失礼極まりない。

褒められてんのか貶されてんのか、よく分からない理屈だったけど、ヤツの言ってることは納得できたし、変人だと思ってたこの男にも一本通った筋がある事が分かって、俺の警戒心は少し緩和された。

「どう？僕らと組まないか？君だけに危険な事はさせない。僕らは一蓮托生だ。」

根尾の手が足を割ってくるのを感じながらも、俺はもう抵抗しなかった。

一本切れたこの男に、俺は賭けてみたくなったのだ。

同志 1

いつの間にか眠っていたらしい。

パイプベッドに仰向けになったままの姿勢で俺は目を覚ました。

一瞬、薄暗い白い部屋が何処なのか分からなくて、俺はぼんやりと天井を見つめて考え込んだ。

素っ裸のままの体の上には薄い布団がかけられていた。

・・・契約成立でいいね、岸上君。

俺の意識がなくなる最後の瞬間に、柔らかな根尾の声が確かに聞こえた。

夢だったんだろうか？

だけど下半身に残るイヤな痛みと、体についた菌型みたいなキスの痕が、すぐに夢でないことを思い出させてくれた。

「目が覚めましたか？」

突然、仰向けになってる俺の目の前に、担当看護婦のしずかちゃん
の顔が又つと出てきた。

びっくりした俺は、ヒィっと変な声を上げて慌てて布団で体を隠した。

「い、いつから見てたんですか？てか、何でここにいるんだよ、あんた。」

真っ赤になって抗議する俺をしずかちゃんはフンと鼻で笑って横目

で見た。

生真面目な看護婦だった彼女が初めて俺に見せる挑戦的な表情。あれ？

この人ってこんなに綺麗だったわけ？

昔から強気な女性に弱い俺は、年上しずかちゃんにドキドキしてしまう。

「気にしないでいいですよ。こっちも患者の裸なんか気にしてたら仕事になりません。私はあなたを起こしに来ただけです。根尾先生はもうすぐいらっしゃいます。シャワーでも浴びますか？」

表情を崩さず、しずかちゃんは俺に業務的に伝えた。

ここ又何があったか分かってるのは間違いない。

俺は舌打ちして頭を掻いた。

そっちが気にしなくても、患者は気になるんだよ！

って、言っても離れてくれなさそうなので、俺は布団を体に巻きつけ黙ってベッドから降りた。

「シャワー浴びてきます。」

「分かりました。20分以内でお願いします。」

しずかちゃんはきちんと畳まれた俺の衣服を目の前に差し出した。その服の一番上に小さく折り畳まれた俺のトランク스가載っていて、俺は噛み付きそうな顔でしずかちゃんの手から奪い取った。

病棟の中のいつも使用しているシャワールームで、取り合えず俺は頭から湯を浴びた。

スポーツジムのシャワールームみたいな飾り気はないけど清潔感のあるシャワールームだ。

まだボンヤリしている頭が水圧で少しづつ活性化されていくのが分かる。

湯に打たれながら、根尾の話を俺は少ない脳味噌をフルに活用してまとめてみた。

つまり、アイツは心臓移植しないと治らない自分の患者で妻の女の為に、自殺志願者を集めて殺してから心臓を取り出すつもりなんだ。角膜移植しないと治らない俺の目を見て、同じ志を持つ者だと勝手に思い込んで声を掛けてきたに違いない。

俺はアイツが言ってた「僕ら」という言葉に引っ掛かっていた。

他にも臓器が必要な協力者がいるってことだろうか。

俺の頭にさっき会ったしずかちゃんの顔が浮かんで、ゾっとした。

彼女も何かが足りない人なんだろうか。

着替えてシャワールームを出ると朝日が薄暗い病棟の廊下に差し込んできた。

あいつに呼ばれて診察室に行ったときは、夜の9時くらいだったから一夜が明けてしまったことになる。

俺はこれからあいつらと組んで、自殺志願者を探すのか・・・？

根尾の言った「一蓮托生」という言葉が俺に重く押し掛かっていた。

金の為とは言え、とんでもないことに巻き込まれたんじゃないかな、俺って。

やっぱり断わるって言ったら殺されるかな・・・？

俺の刺青が役立つ日がこんなに早く来そうだとは想定外だった。

診察室のドアを開けると、昨夜と同じ姿勢、同じ白衣の根尾がデスクに向っていた。

俺は入ってきたのに気が付くと、ヤツは顔を上げて爽やかな笑顔を見せた。

さっぱりした顔しやがって。

その清々しい顔を睨んで、俺は苦笑いを浮かべる。

「おはよう、岸上君。よく眠れたかい？」

「・・・まあ、寝ましたよ。体調は問題ないです。」

「それは良かった。美容サプリメントのモニタリングが後1ヶ月で終了だったのに、僕のせいで体調崩されたら発売停止に成りかねないからな。」

ハハハと愉快そうに笑って、根尾は自分の前の椅子を勧める。

まだ実験経過中だったのに、医者が実験体にあんなことよくできたもんだ。

やっぱり、こいつは一本切れてる。

向かい合って座った俺の左目を、根尾は銀縁メガネの奥の目を細めて見つめた。

不完全なものに惹かれると言った、昨日の根尾の言葉を俺は思い出した。

このビー玉みたいな左目がコイツにはツボなんだと思うと、痘痕も笑窪とはよく言ったものだと思う。

「昨日言った事、覚えてるだろう？ 僕らはもう仲間だ。もう気が付いてるかもしれないけど、看護師の皆本さん。彼女も仲間だ。君のタイプの女性ではないかもしれないけど。」

「・・・仲間って、彼女も臓器が必要なんですか？」

そう言った俺の後ろから、しずかちゃんの声がした。

「移植が必要なのは私の娘です。私のをあげたいのですが、残念ながら適合しませんでしたので。私は未亡人で、あの娘に兄弟もいないので、他人を探すしかありません。」

静かな、でも腹を括ったその声が何だか俺は怖くって、後ろにいる彼女を振り返る事ができなかった。

同志 2

しずかちゃんから支給された流行の海賊マンがを粗方読み終わった頃、俺のメインのバイトが終了した。

三ヶ月拘束の美容サプリメントのモニタリングの方だ。

美容サプリメントだって言ったくせに、三ヶ月飲み続けた俺に変化は全く見られなかった。

少しはイケメンになったかと思ったのに、鏡を見てがっかりした。この三ヶ月で、サプリメントに全く美容効果がない事が立証されたようなもんだ。

それにも関わらず、このサプリメントは商品化されることが決定した。売れば何でもいいらしい。

恐ろしい競争社会だ。

「俺、全く変わってないと思うけど？」

俺は最後の検診の時、しずかちゃんにそう言って笑った。

俺の言葉にしずかちゃんも苦笑する。

「それでいいんです。三ヶ月飲み続けて綺麗になるかどうかは問題ではありません。あなたに副作用や急激な体調の変化がないことが立証されることが目的なんですよ。変化がなければ、実験は成功です。」

なるほどね・・・。

これは、サプリメントによって俺が綺麗になるかどうかの実験ではなくて、これによって副作用が起きて健康を害さないかどうかの実験だったんだ。

三ヶ月飲み続けた俺に害がないことが立証されたので、商品化に踏み切ったんだろう。

副作用があったらどうしてくれたんだ、とは恐ろしくて聞けなかった。

何しろ、担当はあの根尾だ。

何かあった場合は、俺がヤツの妻の心臓ドナーにされてた可能性は高い。

「どうしました？」

黙りこんだ俺をしずかちゃんが覗き込む。

その場合、俺の肺はこの人の娘に移植されたかも……。

考え出したら、キリがなくなつて俺は苦笑いした。

「何でもない。皆本さんにはお世話になりました。皆本さんの持つてきてくれたマンガのお陰でかなり救われましたよ。」

俺の言葉にしずかちゃんは恥ずかしそうに笑った。

最初見た時の能面みたいなクールビューティーは、この三ヶ月で随分打ち解けてくれた。

この人は笑うと本当に華がある。

正当派美人の迫力だ。

そして、俺は年上の美人が決して嫌いではなかった。

「気に入って貰えて良かったです。あれ、娘のなんですよ。娘も長

期入院してるからマンガは欠かせないの。あのマンガ、流行ってるみたいですね。」

長期入院している娘さんのマンガ・・・。

その言葉が俺の胸に刺さった。

三ヶ月という決まった期間でさえも俺には入院生活は辛かったのに、遊び盛りの子供がマンガを読みながら、先の見えない入院生活をしている。

しずかちゃんが他人の肺でも欲しがる気持ちは痛いほど分かった。

クスクス笑いながらしずかちゃんは続ける。

「あのマンガ、全然終わらないんですよ。娘が新巻出るのをすごく楽しみにしてて、終わるまで死ねないって頑張ってるの。終わっちゃったら娘も逝っちゃう気がしてたんだけど、まだまだ大丈夫みたい。」

血圧計を外そうと伸びてきた彼女の細い手を俺は掴んだ。

俺に手を掴まれた彼女はビクッと瞬間、体を震わせた。

俯いたまま、俺に視線を合わせてくれないしずかちゃんの顔を、俺はもう一方の手でそっと持ち上げる。

その目が潤んで赤くなってるのを俺は見逃さなかった。

「大丈夫ですよ。あのマンガは当分終わりません。今の主人公の子供の代まで連載するのが少年漫画の慣わしですから。娘さんも大丈夫ですよ。」

慰めにもならない俺の言葉に、しずかちゃんの目から大粒の涙が零れ落ちた。

「・・・ありがとう。岸上君。」

長い睫毛に涙の粒が光っている。

俺はその白い顔を引き寄せて、唇を重ねた。

抵抗するかと思いきや、彼女は唇が触れた瞬間だけ体を硬くしたものの、黙って目を閉じて俺を受け入れてくれた。

冷たい彼女の唇をゆっくり濡らしながら、俺はキスを続ける。

こういうのって反則かな？

病気の子供の事で弱気になってる女性の心に付け込んだみたいだ。そう思われても、もう構わなかった。

俺は、プライドの欠片もなく手段も選ばない人間だって自覚していた。

手段を選ぶ余裕がないほど、俺はこの人に惹かれ始めていた。

「皆本さん、今日で終わりじゃないですよね？俺達はこれから一蓮托生なんでしょう？」

彼女の細い首筋をそっと噛みながら俺は彼女の耳元で低く囁いた。

「・・・そうね。運命共同体って言えば聞こえはいいけど、共犯者ね。」

彼女の返事には艶っぽい吐息が混じり始めて、俺は更に欲情する。

「・・・俺とじゃ嫌ですか？まだ役不足？」

「岸上さんは、根尾先生と・・・じゃなかったの？」

痛い所を突かれて、俺はギクっとした。

そう言えば、しずかちゃんにはヤツとの行為の後を見られてる。

正直言えば、この最後の一ヶ月で俺は根尾のバイトを何度かしていたのだ。

ミエミエの嘘をつくより、俺は正直に話す事に決めた。

「・・・軽蔑してくれてもいいですけど、根尾先生とは金の関係だけです。皆本さんが嫌ならもうしませんよ。こういうのダメですか？」

そう言った俺の顔を、彼女の白い冷たい両手がふわっと抱え込んだ。

「良かったわ。お金の関係だけで。愛があったら口惜しいもの。」

そう言った彼女の笑顔はまるで慈悲深いマリアみたいで、俺は彼女の細い体を引き寄せ、思いつき抱き締めた。

同志 3

モニタリングに関する全ての検診が終わったその日の午後、俺はしずかちゃんに付き添われて退院した。

隔離されていた病棟は、楽園会総合病院の入院施設のワンフロアで、エレベーターを一階降りたら普通の患者が入院しているタダの病院だった。

下降して行くエレベーターの中で、俺はしずかちゃんの横に黙って立っていた。

並んで立つと、しずかちゃんの頭は背の高い俺の胸くらいまでしかなかった。

どうしてこんなに小さくてか弱い女の人が、他人の臓器を狙ってまで娘を助けようと思えるのか。

きっと、母親ってすごいパワーを持っているんだろう。

「俺、あなたが好きです。」

あの時、キスは許して貰えたものの、まさか根尾みたいにそのまま診察室のベッドに押し倒す訳にもいかず、

俺は彼女を抱き締めたまま中学生みたいに告白した。

プライドはない男だけど、俺は野獣ではない。

経験値の低い俺は、いつでもどこでもできるほど慣れている訳では

なかった。

しずかちゃんは、俺の左目の上に覆い被さっている前髪を優しく掻き上げ、瞼の上にそっとキスした。

そして柔らかな、お母さんみたいな笑顔で俺に言った。

「また、会えますよ。私達は運命共同体ですから。」

意味深な返事だったけど、彼女はそう言う俺の腕からスルリと抜けて立ち上がった。

俺が期待してたのは、退院してから名古屋で会いましょうとか、続きはあなたの部屋でねとか、そんな返事だったんだけど。

彼女があっさり立ち上がったので、俺も一旦引くしかなかった。

病院の一階はホテルみたいに豪華なロビー、そして人山ができているレセプションがあった。

規模の大きい総合病院なので、自分の行き先の分からない年寄り達が、右往左往と彷徨っている。

その人の波を抜けてロビーに出ると、並んだソファに優雅に足を組んで腰掛けている根尾がいた。

俺のバイトが終わったという事は、ヤツも束の間の休みなんだろう。いつもの白衣ではなくて、サラリーマンみたいなグレーのスーツにネクタイといういでたちだ。

映画マトリックスでIT企業のサラリーマンの時のキアヌ・リーブスに益々似ている。

並んで歩み寄ってきた俺達に気が付いて、根尾は軽く手を振った。自分と向かい合わせのソファを勧めて、ヤツは爽やかな笑顔を見せ

た。

「まずはお疲れ様だね、岸上君。三ヶ月間、ご苦労様。君のお陰であのサプリメントは商品化に漕ぎ着けたよ。これは報酬。日給2万円だから、掛ける90日。三ヶ月くらいは暮らせるかな？少なくとも悪いけど。」

根尾はそう言って分厚い茶封筒を俺に手渡した。
マジでありがたかった。

三ヶ月どころか半年は食い繋げる。
俺は会釈して、恭しくそれを頂戴する。

「ところで、僕らとの契約のことなんだけどね。もちろん、覚えていると思うけど？」

笑顔を崩さず、根尾は続ける。
来ると思っていたので、俺は既に身構えていた。

「本気ですか？ヘタすりゃ殺人罪で逮捕ですよ。実刑どころか死刑だって……。」

「君一人にリスクは背負わせないといった筈だ。君が捕まるなら、僕らも一蓮托生だよ。僕はその覚悟をしてでも心臓が欲しい。皆本さんもね。君は角膜が欲しいだろう？この先も、ハンデを背負って生きていくのか？」

今は問題ない右目も必ず悪くなる。失明したら元も子もないだろう。
「

俺は言葉に詰まった。

生活に支障がある程度に悪くなればいいけど、一気に失明する可能性だってない訳じゃない。

それは俺が一番恐れていた事だった。

しずかちゃんに借りた海賊マンガの中で片目になった剣士がいたけど、片目になったら結構不便なんだ。

俺は子供の頃から慣れてるけど、急に片目になったら、普通の人はまず真っ直ぐ歩けないと思う。

俺は自分が人の顔を見る時、無意識に首を傾げるクセがあることに気が付いていた。

左目が見えない分、右目を無理して使っている証拠だ。

黙っている俺に代わってしずかちゃんの声がした。

「嫌なら辞めた方がいいですよ。後には引けなくなります。でも、私はやります。やるしかないから。ドナーなんて身内でもない限り絶対現われません。もう何年も待ちました。そしてもう待てないくらい娘の病状は悪化してます。待ってる時間もうないんです。提供者がいらないなら、私はこの手で探してきます。そうするしかないんです。」

隣にちよこんと座ったしずかちゃんの声は、静かな、でもはつきりした口調だった。

彼女の目は真剣だった。

怖いくらいに。

バカな俺は、自分の目より彼女のために手伝いたいなんて思ってしまったんだ。

そして、根尾。

あれから実は何度か、こいつとは体の関係を持った。

もちろん貰うものは貰ったけど、嫌だったら断われたのに。

軟弱そうなインテリ面の裏に隠したこの男のドス黒い正義観に、俺は惹き付けられるものを確かに感じていた。

臓器獲得（強奪？）を目的とする一蓮托生の運命共同体。」

俺は案外あっさり覚悟を決めた。

「いいですよ。乗ります。具体的にはどうするんですか？」

俺の言葉に根尾はニヤリと笑い、しずかちゃんはパッと顔を綻ばせた。

「君ならそう言ってくれと思った。ここでは話せないから、日を追って連絡する。携帯だけは変えるなよ。」

根尾はそう言って俺に右手を差し出し、俺もその手を握り返した。

儀式 1

3か月分のバイト代を手にして、俺は久し振りの自宅アパートに戻った。

バイトしていた病院からそれほど遠くない所にある賃貸ワンルームマンションだ。

俺の実家は名古屋なんだけど、フリーター生活を始めてから俺は家を出た。

昔から両親と折り合いが悪い上、夜働いて朝寝る俺の生活リズムが、年老いた両親には苦痛だったからだ。

男ばかり三人兄弟の長男だった俺が障害を持って、しかも何をやってもイマイチぱっとしなかったので、両親は大いに落胆した。

その代わりに末っ子の弟は、有名私立大学卒業後、大手商社に就職して東京に行ってしまったもんだから、尚更俺には風当たりがキツイ。

地元志向のこの地方では、東京で働いているというだけで自慢の息子だ。

その兄貴が自宅でウロウロとフリーター生活しているのは岸上家にとって赤っ恥だった。

全国チェーンの不動産会社のワンルームマンションは、敷金礼金0円で、しかも生活に必要な最低限のモノは備え付けてある。住所不定の俺にピッタリの物件だ。

僅かばかりの衣服しか置いてない俺の部屋は、ガランとしていて生活感がない。

殆んどいないんだから当然か。

こんな調子だから、将来に不安は常に持っていた。

一生、俺はこんな風に仕事を探しながら流れて生きていくのだった。彼女でもいればこの生活もまた楽しいんだろうけど、そんな奇特な女は今まで現われなかった。

俺の顔が怖いのは、仕方がない。

でも、最近の女はまず安定を求めらしいから、俺が共済年金なんかに参加してて社会保険に入っていればまた別だっただろう。

俺は国民年金も払ってなくて、保険なんて長い事加入してなかった。固定収入もなく生活は不安定、顔もこれじゃモテる訳がない。

俺は絶望的な気分になってベッドに倒れ込んだ。

さっき別れたばかりのあの二人の顔が、急に懐かしくなる。理由は分かっていた。

俺は生まれて初めて、誰かに必要とされて嬉しかったんだ。



根尾から連絡が来たのは、それから一ヶ月後だった。

季節は初夏になっていた。

梅雨に入る頃の、肌寒いけど蒸し暑い、そんな気候だった。

半年くらいは食い繋げる金を貰った俺は、求人誌を眺めながらダラダラと過ごしていた。

求人誌に載ってるアルバイトって接客業が多くて、俺の顔ではとても採用して貰えそうになかった。

この際、お化け屋敷とかサーカスとか見世物系でもいいんだけど・・
・なんて自虐的なことまで考えてた矢先、携帯の着信音が響いた。

悪友からのパチンコの誘いかと思って、俺はベッドにゴロ寝の姿勢

のまま、携帯を耳に当てる。

「はい？」

「岸上君？久し振りだね。根尾です。」

落ち着いた社会人の男性の声に俺は飛び起きた。
確かに懐かしの根尾の声だ。

「あ、俺です。お久し振りです。」

「待たせてしまつてすまない。こちらの準備に手間取っていた。だが、そろそろ例の計画を実行する。君にはこちらに住居を移して貰いたいんだ。長い計画になりそうだからな。」

「・・・住居を移す？」

「そう、これからまた長期のバイトをして貰うんだ。家賃勿体無いから、アパート返してしまえよ。いつ帰れるか分からないし。」

軽いノリで根尾に言われて俺は焦った。

「ちょっと待つて下さいよ。で、俺、どこに住むんですか？」

「僕のマンション。あ、広いから大丈夫だよ。金貰わずに変なことしないから。」

なんだ、そりゃ？

俺をヒモとして雇いたいのか？

だとしたら、間違いなくこの男は本物の変態だ。

「岸上君？聞ってる？こっちはもう計画に沿って動き始めている。詳細は会ってからするから、不審に思つかもしれないけど、まずは僕の指示に従って欲しい。いいか？おーい・・・」

俺が黙ったので、ヤツは焦った声で早口にまくし立てた。

俺がここに一人でいてもすることもなし、ただ時間と金が浪費されるだけだ。

根尾の所に居候すれば、家賃は浮くし、ヤツも医者なら食べるモンには困ってないだろう。

時々変な事をされるかもしれないけど、それを差し引いてもオイシイ話だ。

頭の中でチーンと音を立てて、俺の浅はかな計算が終了した。

「分かりました。アパートは返します。その後は？」

「今、僕は転勤になってね。これから君を迎えに行く。夕方5時に君がバイトしたあの病院の駐車場に来てくれ。当座の着替えくらいは持って来いよ。」

それだけ言うと、根尾は一方的に携帯を切った。

この部屋を返す……。

まあ、大したことじゃない。

月単位で更新しているこのワンルームが無くなったって、俺に困ることは何もないさそうだ。



ヤツの指示通り、俺はその日の内に不動産会社に行って、賃貸契約を解消してきた。

締め日の関係で……とか何とか言われて、結局来月分の家賃まで

請求されたけど、これはキッチリ根尾に請求してやる。

スポーツバッグに入る限りの着替えを詰め込み、俺は5時に指定された病院の駐車場にやってきた。

午後の診療がまだ終わってないので、駐車場はまだ込み合っていた。

広い駐車場をウロウロ歩き回っていたら、後ろからパツパーとクラクションが鳴らされ、振り返ったら見知らぬシルバーのプリウスがゆっくり徐行してくる。

俺の横でピタッと止まると、助手席のドアが開いて、中から根尾が爽やかな笑顔で笑いかけているのが見えた。

久し振りに見る根尾の笑顔に、俺は何故か安堵した。

「岸上君、ここ止まらないから乗ってくれ。」

後続の車が並んでいるのを見て、俺は慌てて助手席に乗り込んだ。

儀式 2

俺を乗せた車は、混み合う病院の駐車場を抜け、大通りに出た。さすがハイブリッド低燃費。

軽自動車みたいなやかましいエンジン音や、ブレる感じがしない。滑る様に車は街を縫って行く。

車内はマリン系芳香剤の香りで清涼感があり、低い音で俺の聞いたこともないような英語の音楽が鳴っている。

どこまでも厭味なヤツだ。

根尾は、今日は休みなのか黒のポロシャツにスラックスというラフなスタイルで、リラックスした感じだった。

相変わらず白い顔で、ニコニコ笑って俺の肩をポンと叩く。

色が白いのは俺も負けてはいなかった。

夜型生活に加えて、三ヶ月監禁生活のお陰で俺の日照時間の少なさはハンパでない。

「元気だった？待たせた上に突然の話で悪かった。実は、僕は転勤になって楽園会グループの別の病院で勤務しているんだ。敷地内にグループが所有するリゾートホテルがあるんだけど、そこを仮の住まいにしている。」

まあ、住居手当てみたいなもんだ。君もしばらくそこに一緒にいて、バイトをして欲しい。また拘束される事になるけどね。」

「あの・・・それって、俺のこと・・・。」

口にするのが憚られて俺は途中で黙った。

俺の不安を先読みしていたらしい根尾は、ハハハと高らかに笑った。

「そう言うと思った。残念ながらそれが目的じゃないんだ。全ては計画に向けての準備なんだよ。ま、君がバイトしたいっていうなら僕は構わないけど?」

「・・・いや、いいです。」

その計画の詳細を早く聞きたかったんだけど。あれこれ詮索するのは気疲れするだけだ。

俺は、成り行きに任せてこいつについて行くことに決めた。

車は東名高速道路に乗って、静岡方面に向って走って行く。

低燃費の上に抜群の安定感のこの車でドライブするのは気分が良かったけど、一時間もしない内に車は高速を降りた。

そのまま道成りに南下して行くと、街並みはだんだん寂れた田舎の風景に変わっていく。

6月の午後6時はまだ夕焼けが綺麗で、俺は何だか旅行に来たみたいにワクワクした。

隣に乗ってるのが、せめてしずかちゃんだったらもっとテンションが上がってた筈だ。

俺はそこでハタと気が付いて、根尾に聞いてみる。

「あの、皆本さんはどうしてるんですか?」

「ああ、彼女は最初からその病院で働いているんだ。優秀な看護師だから、僕が美容サプリメントの担当になった時に出向して貰う様に要請してたんだよ。彼女の娘さんはそこで入院してるからね。」

つまり、今、しずかちゃんが働いてて、その娘が入院している病院で、根尾も働く事になって、同じ敷地内のリゾートホテルに俺達は

仮住まいするってことか。

関係者を一所に集めたい根尾の計画が、だんだん輪郭を持ってきた。

とにかく、しずかちゃんに会える日は近い。

俺は少し安心した。



リゾートホテル　パシフィックと書かれた看板に沿って車は広い敷地内に入った。

日はすっかり暮れて、車を出た途端、初夏の重苦しい湿気が体をムっと包んでくる。

その空気に潮の香りがして、俺は真っ暗な敷地内を見回した。

「気が付いた？この駐車場の向こうは海なんだよ。海水浴もできるで、向こうに見える建物があるだろう？アレが、僕ら今勤務している病院だ。もうすぐ僕の妻も転院してくる予定になっている。予定通り自殺志願者を集める事ができたら、速やかにあそこで手術を行うことができる。おまけに海に面しているからな。」

「・・・だから、何です？」

「適合しなかった遺体の処理は簡単だ。リゾートホテルにクルーザーがあるし。」

覚悟はしていたけど・・・。

リアルな根尾の説明に俺は寒気がして、ヤツの白い顔を見つめた。俺の視線に気が付いた根尾は、ハハハと笑って俺の肩をポンと叩く。

「まあ、具体的な事は中に入ってからだ。スイートを貸切にしてる

からリッチだよ。岸上君は飲めるんだっけ？」

「はあ、人並みには。」

「じゃ、海を見ながら一杯やろう！僕はカクテルしか飲めないんだけど。」

自宅に初めて友達を呼ぶ小学生みたいな無邪気さで、根尾は俺の腕をぐいぐい引っ張ってホテルの中に入って行った。

顔馴染みっぽいホテルのフロント嬢からキーを受け取り、俺達はホテルの最上階までエレベーターで昇った。

根尾が言った通り、確かにここはスイートルームで、長期滞在もできるようにキッチンまでついている。

だっ広い部屋の窓辺にはキングサイズのベッドが置いてあり、他にベッドらしきものはソファのみだ。

先に口を開いてヤブヘビになるのを恐れた俺は、とりあえずコメントは控えた。

それを除いては申し分ない部屋だ。

四方の窓から太平洋が一望できるし、大人が2、3人滞在しても余りある広さだ。

俺が窓に顔をくっ付けて海を眺めていると、根尾がガラガラ音を立てて、缶ビールやら缶カクテルやら安っぽいコンビニで買ったような酒をビニール袋にそのまま入れて持ってきた。

お金持ちじゃないのか、お前は？

高級ワインでも出てくるかと期待した俺は、心の中で突っ込んで舌打ちした。

ニコニコ機嫌よく笑って、根尾はビニール袋から梅酎ハイを取り出し俺に渡す。

自分はピーチフィズの缶を持って、俺に向って掲げた。

「まずは、再会に乾杯！」

「・・・乾杯。」

女子大生かよ・・・。

俺は苦笑して、酎ハイを根尾の缶にコツンを当てた。

この男が下戸なのは間違いない。

きっと俺に付き合う為に、少しでも自分が飲めそうなものを用意しておいたんだろう。

どっか絶対イカれているこの医者をも、俺は何故か憎めなかった。

しばらく俺達は無言のまま、窓辺にもたれて眼下に広がる真っ黒い海を眺めていた。

もう、引き返せない。

それだけは俺の頭にズシリと圧し掛かっていた。

「岸上君は、僕が嫌いだろう。」

突然、根尾がポツリと言った。

真っ白だったヤツの顔がジュースみたいなピーチフィズの1缶だけで、既に真っ赤になっている。

本物の下戸だ。

俺は呆れて、ヤツの手から缶を奪い取った。

「無理しなくていいですよ。飲めないんですよ？これでこんなに酔えるって信じられないな。」

「まだ酔ってないよ。これは体質だ。それより質問に答えてないよ、

君は。僕のことを嫌いか？」

俺は根尾の真意を量りかねて、黙って首を傾げた。

「・・・あなたは俺の目が珍しいだけでしょう？」

「否定はしない。君の左目が好きだ。それでは理由として不足か？」

自嘲的な薄笑いを浮かべて、根尾は俺の顔を見つめている。

その時ヤツの言いたい事は分かってたし、俺も拒否する理由はなかった。

目でも何でもいい。

俺を求めてくれる人間を、俺はずっと渴望していた。

「・・・バイト代は貰いますけど。」

「了解。まずは明瞭会計でいこうか。」

根尾は子供みたいにニッコリ笑って俺の体を窓に押し付けると、そっと唇を重ねた。

儀式 2（後書き）

次回、18禁です。（＊＾＾＊）

儀式 3

「・・・目」

「・・・はい？」

「左目、見せてくれる？」

さっきのキングサイズのベッドに俺を仰向けに押し倒してから、根尾は耳元で囁いた。

ヤツのアルコールを含んだ熱い吐息が首筋にかかって、ゾクッと鳥肌が立つ。

俺の返事を待たずに、根尾は自分の手で俺の髪を掻き上げると、白濁している左目をじっと見つめる。

その表情があまりに真剣で、俺は思わず笑ってしまった。

「何か可笑しいかい？」

「・・・別に。変態だなと思っただけ。」

俺の言葉に、ヤツは恥ずかしそうに笑った。

一応、自覚はあるらしい。

「そう言われれば、そうなんだけど。僕は、子供の頃から欠けてるものに異常に興味を持ってしまうんだ。

片足の犬とか、片耳の猫とか。完璧なものより、不完全なモノが綺麗だと感じてしまうんだろうね。」

それはあんたが完璧だからだろうな。

根尾のいう事は納得できた。

人は常に自分にはないモノを求めるものだ。

俺のＴシャツの下から根尾は手を這わせて、体の線をなぞっていく。熱を持った掌の感触が思いの他、気持ちが良いくて、俺は声が出そう。な口を慌てて塞ぐ。

その手は少しづつ下半身に降りてゆき、ベルトをゆっくりと外していく。

こいつとするのは初めてじゃないから、俺はもうされるがままになっっていた。

これはバイトだと頭で割り切ったって、イヤなヤツとは二度目は絶対にできない。

何度も許してるのは、俺もまんざらでもなかったからだ。

認めたくないけど。

「君は男が好きなのかなのか？」

頭わになった人の下半身をまさぐりながら、根尾は無邪気に聞いてくる。

その刺激に時々意識が飛びそうになって、俺は顔をしかめた。

「・・・男が好きかって？・・・嫌いですよ。ただ、女性にはウケが悪いんで。需要がなかったら仕方ないでしょう。」

「並の女に君の良さは分からないんだよ。僕は君が綺麗だと思う。」

本人を目の前に恥ずかしげもなく、よくそんな事言えるもんだ。

俺は苦笑して同じ質問を返してやる。

「あなたは？男が好きなんですか？」

「僕は、性別はどっちでもいいんだ。どこか欠けてればね。完璧な人間には魅力を感じない。初めて君を見た時、金縛りにあったみたいに動けなくなった。子供の頃好きだったキャプテンハーロックみたいで。」

宇宙海賊という職業があるから、ハーロックはかっこいいんだ。

ヤツだって、日本で眼帯してたら、俺と同じように絶対就職浪人だと思うけど。

俺は笑おうとしたけど、だんだん激しくなってくる刺激に耐えられず、思わず呻き声を上げて体を仰け反らした。

繰り返される絶妙なヤツの手の運動に、俺の理性が少しずつ薄れていく。

動物みたいな体の奥から出る呻き声を、俺はもう止める事ができなくなっていた。

恐ろしい事に気が付いたのはその時だった。

反転した俺の視界にとんでもないものが映って、俺は目を疑った。

黒いノースリーブのロングワンピースを着た女性がバスルームのドア付近に立っている。

肩に掛かるサラサラのボブヘアと細いシルエット。

それは紛れもなくしずかちゃんだった。

俺は根尾に押さえ込まれて、仰け反ったまま硬直した。

まさか、コレを見られるなんて。

てか、根尾もしずかちゃんがいるのに俺を誘ったのか？

俺がしずかちゃんを好きなのを知っててやったんなら、悪趣味極まらない。

しずかちゃんは、最後に病院で会った時の穏やかな表情のまま、俺達が絡み合ってるベッドにゆっくりと近づいて来た。

平手打ちは覚悟した。

俺はしずかちゃんに告白しておきながら、再びこんなことをしてるんだから。

浮気の現場を抑えられたようなもんだ。

しずかちゃんは、優雅な仕草でベッドの縁に腰掛けると、仰向けで押さえ込まれている俺の顔をそっとなでた。

俺を見下ろす彼女の顔は、女神のような美しさだ。

真っ白な肌に黒のドレスがよく似合っている。

「・・・あ、あの、しずかちゃん・・・。」

「久しぶり、岸上さん。私の事、しずかちゃんって呼んでくれたたんですね。」

彼女は微笑んでくれたけど、俺は勝手につけてたニックネームを思わず口にしてしまって、慌てて手で口元を押さえた。

彼女は、俺達がナニをしているか分かっているにも拘らず、優しい笑みを浮かべたまま、俺の髪を弄ぶ。

その白い手は、俺の頬を伝い、長い指が俺の唇に触れた。やがて彼女の指は俺の口内に侵入し、俺の舌に絡みつく。

俺の唇から溢れてくる唾液をすくい取って、彼女はその濡れた指を俺の胸の先端に押し付けた。

敏感になっている部分に濡れた指の感触は、もはや凶器だった。

俺は思わず両手で顔を覆って、嬌声を上げた。

妖艶な微笑みを湛えたまま、しずかちゃんは俺の両手をぐっと掴んで、頭の上で抑え付ける。

そして自由を奪われた俺の顔にゆっくり顔を寄せると、左目の瞼の上キスをした。

「岸上さん、私達ね、あなたのことが本当に好きなんですよ。あなたもきつとそうでしょう？」

そう言いながら、しずかちゃんはノースリーブのドレスの肩紐をスルリと下ろした。

細い鎖骨が顕わになってから、真っ白い彼女の胸がゆっくり現われる。

その間にも、根尾の手の反復運動は絶え間なく続いている。

ぶっ飛びそうな理性の手綱を俺は必死に握ろうとしたけど、もう無理だった。

抗えない快感に身を委ねて、俺は半泣きで喘ぎながら彼女の手を握り締める。

「言ったでしょう？ 私達は運命共同体だって……。」

飛びそうな意識の中で、しずかちゃんの声が甘く響いた。

楽園 1

薄暗いスイートルームが、太陽が昇る前の薄紫色に染まった頃、俺は目を覚ました。

四方に張り巡らされたガラスの外は、ネイビーブルーの穏やかな海が広がっている。

まず視界に入ったのは、俺を胸に抱き締めて眠っているしずかちゃんのアップだった。

大柄な俺の体をしずかちゃんは細い腕に抱き締めたまま、穏やかな寝息を立てている。

まるで、俺を守ってくれてみたいに。

その細くて白い体は一糸纏わぬ素っ裸で、俺は目のやり場に困って、見えない方の目を彼女の方に向ける。

見える方の目の視界に、しずかちゃんに抱き締められている俺の背中に寄り添うような姿勢で根尾が眠っているのが見えた。

つまり俺は、左側にしずかちゃん、右側に根尾に挟まれて川の字になって眠っていたことになる。

自称キアヌ・リーブス激似の根尾は、こうやって動かないとまるで白い石膏の彫刻みたいだ。

俺を含めて三体の全裸の人体が並んでいるのは、不思議な光景だった。

なのに、いやらしい感じがしなかったのは、俺を除いた二人が彫刻みたいに綺麗だったからだろうか。

薄紫色の明け方の光に照らされた二人は、楽園のアダムとイブみたいだ。

この美しい二人に一晚中されたことを、突然、俺は思い出して赤面する。

その時、眠っていたと思ってたしずかちゃんの腕が俺の顔に巻き付いた。

しなやかな細い腕は、俺の顔を彼女の顔の前まで誘導する。

薄目を開けたしずかちゃんは、柔らかな笑みを浮かべて俺の唇に軽いキスをした。

「岸上さん、起きてたんですか？」

「いや、今、目が覚めたところ。」

彼女のキスを受け止めながら、俺は昨夜の事を思い出した。

「・・・運命共同体ってこういうこと？」

「誓いの儀式と思えばいいんじゃないでしょうか？ 私達はあなたの事が好きなんですよ。」

「達」っていうのが引っ掛かったけど、しずかちゃんも俺の事が好きなんだと分かって、ちょっと安心した。

彼氏が男に抱かれてるところ見ちゃったら、普通の女はドン引きだろうに。

そこに参戦してきたしずかちゃんは、やはりタダ者ではない。

俺は彼女の上に被さり、キスを仕返した。

「俺、昨日泣いてた？」

「・・・いいえ、と言えば嘘になりますね。良かった？」

俺は、照れ隠しに苦笑いした。

「嬉しかった。俺、人に好かれるのに慣れてないんだよ。」

俺達がヒソヒソ話をしてる声が聞こえたのか、根尾が薄目を開けた。しずかちゃんは、俺の腕の中からスルリと抜け出て、根尾にも差別しないようにモーニングキスをする。

完全に禁断の一線を越えてしまった俺には、嫉妬とか羞恥心とか低俗な感情は残されてなくて、裸の二人が抱き合ってキスしてるのを見ても何とも思わなかった。

いや、人として大事なものを失くしてしまったと言うべきか。

しずかちゃんは蝶のようにヒラリと音を立てずにベッドから降りると、バスルームに向った。

ベッドに取り残された俺の体に根尾の腕が巻きつく。

「起きるの早いな。今日は僕も皆本さんも休み取ってるんだ。今後の計画について会議をしよう。」

寝起きの良さそうな根尾は、爽やかな笑顔で俺を見下ろす。

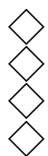
このテンションの高さは俺と対極にいる朝型人間だ。

根尾のモーニングキスを受けながら、俺は何で嫌じゃなかったのか考えていた。

か弱い女の体に鋼鉄の母性を持つしずかちゃん。

軟弱なインテリに見えて、反骨精神旺盛で残酷な根尾。

自分の目が治る事より、俺はこの二人と繋がっていられることに今回の目的を見出していた。



窓の外の海が朝日で銀色に輝きだす頃、しずかちゃんの淹れたコーヒーの香りで部屋は満たされた。

文字通りホテル仕様のトーストが、小さなダイニングテーブルに並べられる。

この地方の名物のメロンまで並んで、一般階級より若干下の岸上家では見たことのない光景に俺は感動した。

「じゃ、運命共同体のメンバーが揃った所で乾杯！」

飲めないクセに音頭を取るのが好きな根尾が、水の入ったグラスを掲げる。

俺としずかちゃんは子供を見守る親のように、作り笑いをしてそれに付き合った。

外は穏やかな海が広がり、開けた窓から初夏の爽やかな潮風が吹き込んでくる。

その平和な初夏の日差しの中、根尾は笑顔で恐ろしい話を始めた。

「僕なりにどうやったら効率よく遺体を収集できるか考えてみた。岸上君も角膜移植を考えた事があるなら知ってると思うが、人間は誰でもいい訳じゃない。拒否反応が起きて、移植成功後に死に至るケースは多い。

だから、なるべく多くのサンプルを手に入れなければならない。多ければ多いほど、適合する確立は上がる。富士の樹海で自殺者が一人一人やって来るのを待つのは効率が悪過ぎる。」

「じゃ、どうするの？」

俺の質問に根尾は先生に指された子供のように自慢げに笑った。

「最近、集団自殺が流行ってるだろう？アレがいいよ。集団で死んでくれれば、こっちも適合する臓器の確立がグッと上がる。しかも、練炭で死んでくれるなんて角膜も心臓も無事に奪取できる。」

「肺は汚れますよ。」

娘さんに肺をあげたいしずかちゃんは、眉間に皺を寄せた。
根尾は、まずは聞けと言わんばかりに彼女に目配せをして話し続ける。

「死にはまた考えるとして、集めるのはその方向がいいと思う。
つまり、集団自殺参加者をネットで募集するんだ。希望してきた人間を集めて、ツアー旅行みたいに迎えに行くんだよ。で、ここで自殺して頂いてから、隣の病院に搬送して僕が執刀する。」

いい考えなんだけど……。
俺は首を傾げた。

「……ネットって日本中の人が見るんでしょ？九州とか沖縄の人だったらどうやって迎えに行くんですか？」

「輸送手段は車しかないから、遺体の保存リミットを考えると、ここから5時間以内に搬送できる範囲の人しか迎えに行けない。仮死状態ならともかく、死んでから移植するには死後なるべく時間が経ってないモノがいい。」

でも、大丈夫！九州より南の人は自殺なんてしないよ。だからそっちからの応募はない！」

「どうして？」

「あっちの人は皆、ノリが良くて明るいんだ。自殺なんて考えるネガティブな人はいないよ。」

「へえ……。根尾さんて九州出身だっけ？」

「いや、名古屋だけど？」

あまりの思い込みの激しさに俺は呆れて口を開けた。

しずかちゃんも必死で笑いを堪えている。

「・・・名古屋人のあんたに九州の人の何が分かるってんだよ？」

「学会があった時、福岡でラピスラズリっていうゲイバーに入ったことがある。皆明るくてかわいいんだ。そこで会ったケイさんて人と話をして、九州の人ってポジティブで元気だなって思った。死ぬ訳ないよ。」

「・・・誰だよ、それ？」

「お店の人。」

俺は手で顔を覆って、唸った。

ゲイバーの店員ならテンション高くて当たり前だろ！
何たる単細胞。

人の心臓を切り取れるほどの頭脳がある筈のこの男には、代わりに何かが無知している。

「あの、じゃあ、北海道の人はどうするんですか？」

しずかちゃんの鋭い突っ込みが入り、根尾はグっと言葉に詰まる。

「そうだよ。雪国はどうなんだ？北海道の飲み屋には行った事ないのか？県民性は？四国は？佐渡島は？」

ヤツの反応が面白くて、俺はニヤニヤしながら突っ込みを入れる。

「遺体の搬送に飛行機は使えないんだ！どうしても死にたい北海道の人は自力で飛行機で羽田まで・・・いや、どうせなら中部国際空港まで来て頂く！

四国も同様だ。以上！」

逆ギレした根尾を眺めて、俺としずかちゃんは存分に笑った。

楽園 2

「最初から私達の仕事の休みも組み込んで、運行スケジュールを作成しておいたらどうでしょう？ 私達が迎えに行ける場所と時間を提示して、応募者にそれに合わせて来て貰うんです。」

しずかちゃんの提案に俺は拍手した。

さすが、女は考える事が具体的で、現実的だ。

「ネットで応募があっても岸上君が言うように、現実的に送迎するのが難しい地域が殆んどです。だから、応募があったらまず、運行スケジュールを送って、それに合わせて来て貰うんです。向こうも来れなかったらそこで諦めるでしょう。」

「うん、僕もそれを言おうと思ってたんだ。なのに、岸上君が揚足取るから……。」

俺のせいだよ……？

もう、話するのがめんどくさくて、俺は苦笑いしてヤツの顔を睨む。

「ネットで募集するのは危険もあります。失敗した時にすぐに足がつく。だから、何時間かおきに非公開モードにしたり、複数のサイトを時間差で公開したりした方がいいですね。私達は仕事があるから、WEB管理は岸上君にやって貰うしかありません。岸上君はブログ書いたりしたことあります？」

しずかちゃんの質問に、俺は首をすくめた。

いくら暇な俺でも、そこまで暇じゃない。

しずかちゃんは、業務的に続けた。

「分かりました。私が簡単な募集サイトをブログ形式で作ります。やり方は教えるから、岸上君はその管理と、応募者が来たらフォローをお願いします。根尾先生は車の手配ですね。万が一の場合、全身麻酔で眠ってもらうように薬品の準備も……。」

「……了解。」

理路整然と説明するしずかちゃんを、俺達は尊敬の眼差しで見つめた。

根尾が彼女を引き抜いてまで、アシスタントさせてたのが理解できる。

常識が欠如したこの医者には、現実的な女性のフォローは不可欠に違いない。

「最初に約束しておきたいことがあるんだ。」

根尾が、口を挟んだ。

さっきまでの爽やかな笑顔が消えて、少し真面目な顔をしている。

「僕らは一蓮托生、共同体だ。この計画はここにいる三人が全て夢を叶えるまで継続する。一人だけ先に求める物が手に入っても、中途退退は認めない。そういう意味じゃ、この計画は何年越しの長期戦になるかもしれない。それでいいかな？」

つまり、俺が両目になっても最後まで付き合わなきゃいけないってことか。

元から少ない人数なんだから、一人欠けたら計画はご破算だ。尤も、失敗して刑事事件になったら三人とも実刑は免れない。

下手すりゃ三人一緒に死刑判決かもしれない。

実感がまだ湧いてなかったせいか、俺は全然怖くなかった。

むしろ、最期の瞬間まで一緒にいられる仲間ができて嬉しかった。

しずかちゃんと顔を見合わせてから、俺達は同時に頷いた。



根尾は朝食を済ませると、名古屋の病院に入院している妻の転院の準備があると言って、出かけてしまった。

病気とは言え、一応、妻がいるのによくあんなことできるもんだ。それとも浮気はダメだけど、複数プレーはカウントしないんだろうか。

「根尾さんは、奥さんを愛してるの？」

俺は朝食の後片付けをしているしずかちゃんの背中に問い掛けた。

「愛しています。でも、男女の愛ではありません。岸上さんも彼の奥さんを見れば意味が分かると思います。」

少し悲しげな顔で、しずかちゃんは答えてくれた。

「私もこれから向こうの病棟に入院している娘に面会に行くんですけど、良かったら、会ってやってくれませんか？娘も喜びます。」

いきなり、家族に紹介・・・？

俺は焦ったけど、まあ、他意はないだろう。

「娘さんて、マンガ貸してくれた娘さんだよね？」

「そうです。あなたの事話したら、すぐく会いたがってるんですよ。」

是非、来て欲しいの。」

しずかちゃんは少女のように顔を高潮させて、俺の腕をクイクイ引っ張る。

俺の事を話してくれたのか……。

娘に話すって、やっぱり俺の事を最初っから……。

勝手に妄想を膨らませて、俺は照れながら頭を掻いた。
これは行くしかない。

娘さんとも上手く付き合っておかなければ。

「行きましょう。俺の事、何て話してたんですか？」

「マンガの剣士みたいに片目がなくて、すごい刺青した海賊みたいな男の人が入院してるって。」

ホホホ……としずかちゃんは口元を押さえて笑った。

……この人も根尾に負けず劣らずブラックだな。

この際、海賊でも何でもいい。

そんなしずかちゃんも、俺は好きだった。

楽園 3

「岸上さん、眼帯持ってます?」

しずかちゃんは意味深な笑みを浮かべて、俺に近づいてきた。
手を後ろに組んで、何かを隠している。

イヤな予感がした。

「いつも持ってるけど?普通の眼科で貰う白いヤツ。どうして?」

「もし、嫌じゃなかったら、これ付けて貰えないかしら?」

彼女が持ってきたものは、まさに、海賊ご用達の真っ赤な大きめの
バンダナと、黒い眼帯だった。

本気で俺を海賊として紹介する気らしい。

そんな夢のあるしずかちゃんも嫌いじゃなかったけど、これをつけ
て外を歩くのはさすがに気が引けた。

「いいけど、病院の中に入ってからトイレでつけてもいいだろう?こ
れはさすがに恥ずかしいよ。」

「申し訳ないんですけど、外からつけて欲しいんです。皆、楽し
みにしてて、窓から見てるはずだから。」

みんな?

娘だけじゃないのか?

不審に思ったけど、プライドは少なめの俺がしずかちゃんをお願い
を断わる筈がなかった。

刺青がよく見える様に黒いタンクトップのシャツを着せられ、頭に

真っ赤なバンダナを巻いて、黒い眼帯をした俺は、海賊というよりチンピラだった。

肌の白さが何とも情けない。

これで褐色だったら少しはジョニー・デップに見えたかもしれないのに。

昨日会ったレセプションのフロント嬢が、エレベーターから出てきた俺達を見てクスクス笑っている。

しずかちゃんは、フロント嬢にキーを預けて愛想良く会釈した。

しずかちゃんも、このフロント嬢とは顔馴染みみたいな雰囲気だった。

と、いうことは、俺より先にここに来てたんだな。

多分、根尾と一緒に。

ホテルから出て、駐車場を横切って、俺達は500mくらい離れた白い要塞の様な建物に向った。

昨日、来た時は既に日が暮れてたから気が付かなかったけど、ここから見る太平洋は絶景だ。

同じ愛知県でも、内陸で外海に面してない名古屋育ちの俺には、海には特別な思いがあった。

海賊になれるもんなら、なりたいくらいだ。

こんなに広い海に出たら、誰も俺の顔のことなんて気にしないだろう。

病院の中は案外人が少なかった。

こんな海辺の町では患者なんて年寄りばかりだ。

コスプレした俺が病院の窓口を通ると、中にいる看護婦達が、一同ギョっとして目を見張った。

しずかちゃんが慌てて窓口に駆け寄って、彼女達に耳打ちする。すると一同納得したように、笑みを浮かべて頷くと、何もなかったかのように業務に戻った。

しずかちゃんの娘は5階の子供病棟に入院していた。

目は悪かったけど健康体だった俺は、眼科以外の病院には殆んど行った事がなくて、その病棟に足を踏み入れてショックを受けた。

小さな子供が体に似合わないサイボーグみたいな器具を手足につけて歩き回っている。

部屋の中には、点滴のチューブが体中に張り巡らされた子供がベッドに横になっている。

昔、ばあちゃんが死んだ時もこんな状態だったけど、小さな子供がこんな生活をしているなんて衝撃だった。

しずかちゃんは、その中の一室に入って、手招きして俺を呼んだ。

小さな一人部屋。

海が見える窓際のベッドに俺より白い顔をした小さな女の子が、ちよこんと座ってこっちを見ている。

言われなくても、その顔立ちですぐにしずかちゃんの娘だって分かった。

「詩織、ママがこの前お話した海賊さんが来てくれたわよ。岸上君、娘の詩織です。」

「あ、初めまして。……海賊の岸上です。」

詩織ちゃんは、驚愕のあまりに目を大きく見開いたまま硬直してしまった。

しまった。

ゾロですって言えば笑ってくれただろうか？

いや、ここは一つ、ジャック・スパロウですって言うべきだったかな。

ジョン・シルバーって言うっても分かんないだろうし。

そうしている内に、病室の入り口には野次馬の子供達がわらわら集まってきた。

皆、最初は怖いもの見たさで押し合いへし合いしてたのが、だんだんと遠慮がなくなって、しまいには部屋の中までなだれ込んできた。

「しずかちゃん、この人がお友達の子供達だよね？海からしずかちゃんがこの人連れてきたの見たよ！」

「すごい！本当に腕に絵が描いてある。」

「ねえ、剣は？」

病気でも、子供は子供だ。

遠慮がない。

子供達に腕や足に絡みつかれて、どうしていいか分からず、立ち尽くしていた。

「みんな！海賊さん、困ってるでしょ？順番、順番！質問がある子は手を上げて！」

しずかちゃんが保育士さながらの大声を上げると、子供達はハイイと言って一瞬沈黙した。

ここで働くしずかちゃんには、こいつら全員、自分の子供みたいなもんなんだろう。

子供達に囲まれたマリア様のようなしずかちゃんに惚れ直した俺は、もう何でもやってあげることに決めた。

「海賊さんの名前は何ですか？」

「・・・岸上ゾロです。」

子供達はオオオーと感嘆の声を上げた。

よし、つかみはバッチリだ。

「どうして腕に絵を描いたの？」

「・・・仲間の印さ。海賊は皆やってるんだ。」

死体になった時に俺だって分かるようになっていうのも、海賊的にはアリだったかもしれないけど、ガキには刺激が強すぎるので、マンガチックな応答をする。

「どうやったら海賊さんみたいに大きくなれますか？」

「・・・牛乳飲めよ。」

それは海賊、関係ないだろう・・・。

俺はベッドで座っている詩織ちゃんをチラリと見た。

大人びた表情の少女は、俺が子供達と話をしているのをクスクス笑って見つめている。

見かけより、年は上なのかもしれない。

おやつの時間になって、野次馬の子供達が部屋から出て行った後、

俺はやっと詩織ちゃんと話をする事ができた。

もしかしたら、お父さんになるかもしれないんだから、好印象を与えたいところだ。

「今日は来てくれてありがとう。海賊さん。」

子供らしからぬ丁寧な言葉で、詩織ちゃんは俺に礼を言った。

「あ、いや、こちらこそマンガ貸して貰ってありがとう。」

「面白かったでしょう？あれ、あたしが死んだら全部、海賊さんにあげるよ。まだまだ終わらなさそうだけど。その代わりをお願いがあるの。」

ニッコリ笑って詩織ちゃんは俺の手を取った。

冷たい小さな手が、俺の指をギュっと握る。

「あたしが死んだらマンガあげるから。その代わりにママを守ってあげてね。海賊でしょ？」

俺は返事もできなかった。

この子を死なす訳にはいかない。

今までぼんやりとしていた覚悟がこの時初めて、形を持って俺の中に現われた気がした。

楽園 4

その翌日から、本格的に俺達の計画は稼動した。と言っても、当座、動いてるのは俺だけだ。

根尾にもしずかちゃんにも仕事があるので、俺はその間、このスイートルームに引き籠って時間差で4つ作った自殺サイトを公開したり、引っ込めたりしていた。

思いの他、反応がない。

ナンとかチャンネルみたいのに、スレッドがダーっと立つかと思いきや、まずアクセスがない。

「それでいいんです。アクセスが集中する自殺サイトなんて危険です。」

しずかちゃんは笑って言ったけど、人が見てなかったら話にならないだろう。

このサイトを立ち上げたのはしずかちゃんだったが、パーフェクトウーマンだと思ってた彼女にも欠点があったのが露見した。

センスがないのだ。

最初に作ったのは、開くと雷が落ちてきて、蝙蝠がバタバタ飛んでいくという悪趣味なもので、吸血鬼の館のような家のドアが開いて、血が滴る文字で「ようこそ」なんて出てきたもんだから俺と根尾は失笑した。

次に作ったのは、和風ホラーテイストで、ゲゲゲの鬼太郎のオープニングみたいな墓場から火の玉が飛び出してきた。

「皆本さん、もっとシンプルで、普通がいいと思うよ。僕的には好みだけどね。」

悪趣味な根尾にまでそういわれて、彼女は大いに気を悪くした。
俺たち二人にダメ出しされて、しずかちゃんは渋々、文字のみのシ
ンプルなものを作り直した。

「連絡先のハンドルネームはなんて名前にします？まさか岸上って
本名は書けないでしょう？」

「じゃ、死神。」

そう言われて、俺は迷わず答えた。

俺の即答に今度は根尾としずかちゃんが吹き出す。

「岸上とかけて死神か。上手いね、岸上君！自殺サイトの管理人に
ピツタリじゃないか。」

アツハツハと手を叩いて根尾は大笑いしている。

笑いすぎだろ。

俺は見える方の片目で、ヤツを睨んだ。

「俺のあだ名だよ。子供の頃からそう呼ばれてる。苛められてたか
らな。」

しずかちゃんが黙って俺の首に巻きついて、見えない方の瞼にキス
をしてくれた。

俺の苦しみを受け止めてくれたかのように。

その間にもデリカシーのないこのバカは、腹を抱えてゲタゲタ笑っ
てたけど、それはもうほっておいた。

何日か続けて、昼間はアクセスが少ないことが分かってきた。

少し考えたら分かった筈だ。

明るい所で、人は薄暗い事はあまり考えない。

それが分かったので、俺は根尾が仕事に出掛けてからベッドに入り、夕方まで寝て、夜は一晚中起きてサイトの管理をする生活を始めた。長年の夜勤生活がこんな風に役に立つとは。

人生何でもやっとくもんだ。

体内時計が完全に狂っている俺には、徹夜なんて朝飯前だった。

しずかちゃんは基本的にはここには来ない。

病院の近くに自分のマンションがあるらしい。

だから、平日の夜は、根尾が帰ってきてから一緒に弁当食って、テレビ見て、ヤツが先に寝た後、俺は再びノートパソコンの前に向った。

二人で生活してみると、根尾は確かに変態なんだけど、天才であることも分かってきた。

暇潰しにとヤツはポータブルの将棋やオセロ、トランプなんかを持ってきたんだけど、何をやっても全く敵わないのだ。

時々出てくる専門の医療の話なんかは、俺の理解の限界を超えている。

そして、次の日が休みの土曜の夜は、大抵しずかちゃんがやって来た。

そんな時、彼女はスーパーで買った食材をホテルに持ち込み、手料理を振舞ってくれる。

三人で夕食を終えた後は、暗い海を眺めながら、俺達はベッドに寝そべって色々な話を話し合った。

不思議な事に、そんな時はこの臓器強奪計画についての話題は誰も出さなかった。

俺達は穏やかな気分で、学生時代の話や、初恋の話なんかをまるで修学旅行にきた学生みたいに語り合った。

話題の尽きる頃、根尾が俺の体に手を伸ばす。

必ず、ヤツは人の髪を掻き上げ、左目を愛しそうに見つめる。

人と少し色合いが違う俺の右目には、興味がないらしい。

どちらかと言うと、腫れ物に触るように視線を逸らされてきた左目を遠慮なく見つめられるのは、悪い気はしなくて、俺はヤツを受け入れる。

しずかちゃんは、最初こそ参戦したものの、いつもは絡み合う俺達をただ優しく見守っていた。

どんな醜態痴態を晒しても、この愛のヴィーナスの前では許される。そんな安堵感があって、俺は彼女の前でも平気で乱れるようになった。

不思議な時間だった。

彼女が言ったとおり、俺はこの二人が好きなんだろう。

こんな時間が永遠に続けばいいのに、なんて都合のいいことを俺は考えてしまう。

この二人には臓器を待つて愛する人がいるのに。

そして、これから俺達は、その目的故に集まった殺人集団になるんだ。

それでもいい。

今だけでいいから、美しいアダムとイブが続べるこの楽園にいたい・
・。

根尾の腕に抱かれながら、しずかちゃんの優しい愛撫を受け、俺は狂っていく。

「なあ、ちょっとひらめいたんだけど。」

俺はキスの合間に根尾に囁いた。

彼は穏やかな表情で、小首を傾げて俺を見つめる。

「何？」

「この自殺ツアー、行き先はエデンにしよう。天国というより、楽^エ園^デ」

俺の提案に根尾は笑った。

「ホントに上手いな、君は。ここ楽園会病院だしね。確かに僕らは今、エデンにいるよ。」

覚悟 1

一ヶ月が経った。

アクセスは夜にアップするようになってから若干上がったものの、まだ応募者がいない。

このネット作戦はもしかして失敗なんじゃないかと俺は思い始めていた。

集団自殺は確かにある。

だけど、どうしてそれに必要があるのか、俺は理解に苦しんだ。

知らない人間と一緒に死ぬなんて怖いじゃないか、って思うんだけど。

人見知りで、友達少なめの俺は、死ぬ時まで他人に気を遣うのは死んでも嫌だった。

会社の面接だって面倒臭いの、死の際に立って、初対面の人と自己紹介とかウザ過ぎる。

毎日、パソコンと睨めっこにしているのも辛いので、しずかちゃんが便利な機能を作ってくれた。

応募者からメールが来ると、パソコンが携帯みたいな電子音が鳴るのだ。

これで、夜中に付きっ切りでいる必要はなくなる。

パソコンが知らせてくれるんだから、少し気が休まった。

根尾の妻が、二人の勤務するホテルの隣の病院に転院してきたのは、そんな頃だった。

「岸上君はまだ、僕の妻に会った事はないよね。是非紹介させてくれ。今日、僕は勤務してるから、好きなきに病院に来て、窓口で呼び出してくれていい。彼女の他に会って欲しい人もいるんだ。」
「会って欲しい人？」

俺は首を傾げる。

まさか複数プレーのメンバー増やすつもりじゃないだろうな。
俺は無意識に眉間に皺寄せる。

かわいい女の子ならいいけど、男はこれ以上いらない。
まさかとは思うけど、モラルが低い根尾は何を言い出すか分かったもんじゃない。

「会って欲しい人はもう一人の運命共同体員だ。彼の協力なしにはこの計画は成立しなかった。ま、楽しみに来てくれ。」

そう言って根尾は颯爽と出て行った。



いつも通り、昼間寝てから、夕方4時ごろ、やっと俺はノコノコ起き出して病院に向った。

ここに初めて来た時はまだ初夏だったけど、今は既に真夏の様相だ。

焼けた駐車場のアスファルトからの熱気がムンムンしている。

視界に入る海にはサーファアの姿が波間を点々と見え隠れしていた。考えたら、せっかく海に面したリゾートホテルにいるのに、一度も昼間の海に行ったことがなかった。

少し日光浴でもすればもう少し肌が焼けるんだけど、計画が優先なので仕方ない。

先日、海賊のコスプレで不審がられたあの病院の窓口で、俺は根尾を呼ぶように事務の女性に頼んだ。

すると、中から看護婦姿のしずかちゃんがヒョコッと現われて、事務の女性に何か話すとそのまま俺の方にやってきた。

「待ってました。もう伝えてあるので根尾先生のところには私が連れて行きます。」

久し振りに見るしずかちゃんの看護婦姿に俺はドキドキして、スタ歩き出す彼女の後ろを追っかけた。

エレベーターの中で二人きりになった時、彼女は俺に体を寄せて、小さな声で話し出した。

人に聞かれると、まずいらしい。

エレベーターには他に人がいないのに、俺も一応、周りをキョロキョロ見回し、彼女に合わせて体を屈める。

「今日、根尾先生の奥様が転院されたことは、中でも一部の人しか知りません。もっと言えば、根尾先生がこの計画の為に、わざわざこの病院に転勤してきたことも知られてはいけないのです。だから、今日、奥様に会った事は誰にも言わないで下さい。」

「言わないよ。他に知り合いなんていないしね。でもあいつ、計画が決まってからよく簡単に転勤できたね。」

根尾から初めて「バイト」の話をされたのは俺がまだ美容サプリのモニタリングで入院していた時だった。

それから僅か、1ヵ月後にヤツはここに転勤、スイートルームはズット貸切になっている。

考えたら都合の良過ぎる話だ。

しずかちゃんは益々俺にくつつき、更に小さな声で話す。

「それには理由があります。根尾先生の奥様は、実はこの楽園会グループの会長で院長である方の娘さんなんです。だから、今回の計画には楽園会グループの全面バックアップがあります。会長も娘さんに臓器が移植される事を望んでらっしゃるのです。」

「・・・てことは、根尾さんはこの病院の会長の義理の息子？」

「そうです。将来はこの病院を継ぐ事になるでしょう。娘さんが生きていればの話ですが。」

・・・驚いた。

逆タマじゃないか。

将来の地位目当てに、余命いくばくもないその娘と形だけの結婚をしたのか？

殺人してまで臓器を移植したいのは、娘が死んだら、養子縁組を解かれるから？

そうすれば、楽園会グループの未来の会長の地位は自然となくなるだろう。

だからこの臓器強奪計画を立てたのか？

天才だけど、変態で世情に疎い根尾が、そんなことまで考えるとは思えなかった。

でも、結婚してくせに他の人間と平気で肉体関係を持てる根尾の神経は、そう考えれば説明がつく。

要するに金目当てか。

俺が黙り込んで考えたので、しずかちゃんは慌てて言った。

「岸上さんが何を考えてるか分かります。でも、根尾先生はそんな人ではありません。奥様のことは本当に愛してらっしゃいます。でも、それは男女の愛ではないんです。」

「何、それ？」

「・・・それは奥様に会えば分かります。」

俺達は病棟の最上階でエレベーターを降りた。

見晴らしのいいガラス張りのフロアには、他の階のような病室はなくて、大手企業の建物みたいだ。

その一番奥の社長室みたいな部屋から、白衣を着た根尾が出てきた。

「岸上君、よくきたね。さ、入って。もうお待ちになってるよ。」

根尾に背中を押されて、社長室のような部屋に一步入った俺はそこで立ち竦んだ。

覚悟 2

この前入った、詩織ちゃんの病室とは格段に大きさの違う部屋だった。

その部屋の中央に設置されたベッドに体中にチューブを張り巡らされた少女が眠っていた。

先日見たしずかちゃんの娘が8歳だった。

今ここで眠っている根尾の妻は、鼻肩目に見ても小学校高学年だ。ロリコンにもほどがあるんじゃないか。

俺は固まったまま、ベッドの少女と背後にいる根尾を振り返って見比べた。

根尾の本当の年齢は聞いてないけど、どう見ても30代後半か、ヘタすりゃ40代だ。

本当にこの子と結婚してるんだろうか。

「若い奥さんで羨ましいだろ？岸上君。紹介するよ、妻の根尾ねおみずき瑞希。若く見えるけど、心臓の病気で成長してないんだ。長いこと寝たきりだしね。これでも16歳だよ。もう結婚できる年齢だから犯罪じゃないって。」

俺はポカンと口を開けた。

まだ16、だろ？

確かに16歳なら法律上は結婚できるだろうけど、そういう問題ではない。

俺の表情から何を言わんとしているのか分かったようで、根尾は笑った。

「彼女が10歳の時、僕は名古屋の楽園会グループの病院で入院していた彼女の担当医になったんだよ。

その頃は、まだ起きてる時間も長かった。

けなげに一生懸命、機能しない心臓で生きてきたんだよ。

僕にとっては娘みたいだったけど、不完全な彼女があんまり綺麗だったからね。

彼女にお嫁さんになりたいって言われた時、いいよって言って籍入れたんだよ。

僕は女性とは結婚できないって最初は断わったんだけど、だったら尚更、籍くらいはこの子にあげようって思ってたね。

見て分かるだろうけど、籍を入れたところで何が変わる訳じゃない。彼女はここから出れないし、一緒に暮らす時間もない。移植できなければ、もう長くないんだ。」

根尾はベッドに近づき、彼女の髪を撫でた。

人形のように硬いその顔は青白くて、申し訳ないけど、俺には生きてるかどうかの区別もつかなかった。

その頬を根尾は愛しげに触る。

頬に触れ、唇に触れながら、彼の表情が急に引き締まった。

「この子を初めて診た時から、僕は絶対に治してやるって約束したんだ。必ず治すよ。でも、タイムリミットは近いんだ。だから、僕はどうしてもドナーが欲しい・・・一日も早く・・・!」

根尾の本気の顔を、その時初めて見た。

生死を彷徨うこの少女と全身で向き合ってきた根尾には、男女の愛なんて甘いモンじゃない、ずっと確固で切実な愛情があるに違いない。

なんだか、俺は自分が恥ずかしくなってきた。

この計画に対して俺だけ何となく他人事みたいで覚悟がないのは、

俺が欲しいのは自分自身のパーツだからに違いない。

根尾もしずかちゃんも、覚悟は自分の為ではなく、愛する人の為なんだ。

しかも二人には時間制限がある。

早くしなければ、大事な人を失ってしまう。

俺にも時間制限はないわけじゃないけど、失明するのは俺だけだ。誰かの為じゃない。

きっと人間って、誰かを守ろうと思う時のみ最大の力を発揮できるんだろう。

残念ながら、今までの人生で俺は守ってやるべき人間には巡り会えなかった。

寂しいけど。

「根尾君、入るよ。」

ドアの方から低い渋めの声が聞こえて、俺はギクっとして振り向いた。

そこには根尾と同じように医者白衣を纏った、還暦くらいの恰幅のいい男性が現われた。

角ばった顔に刻まれた皺が人生経験の豊富さを示しているかのような、硬い表情。

明らかに俺とは別の人種で、俺も一瞬身構えた。

根尾はベッドから離れて、ゆっくり突っ立っている俺の横にきた。

「院長先生、彼が、話をしました協力者です。三ヶ月のモニタリングのアルバイトで、信頼できる人物なのは立証済みです。岸上君、

この方はこの楽園会グループの創立者で小笠原院長先生だ。そして、彼女の実のお父さんで、つまり僕の義理のお父さん。ベテラン外科医でもあるんだ。」

「あ、初めまして。岸上といいます。」

根尾に肘で突っつかれ、俺はしどろもどろに名乗った。

ダンディな根尾の舅は、恰幅のいい、堂々としたその姿からは百戦錬磨の創立者のオーラが出まくっている。

この人には敵わないと、俺は野生の勘で察知した。

「ああ、君が岸上君か。初めまして、だな。私はここの院長で、彼女の父親だ。私達は何をしようとしてるかは、分かってるだろうな？娘の為に君はリスクを犯してくれるのか？」

低いドスの利いた声で、小笠原院長は俺のことを眉間に更に深い皺を寄せて睨んだ。

その横柄な口の利き方に、俺も無意識に眉間に皺を寄せる。嫌な圧迫感だ。

間違いなく、俺は信用されてない。

ボサボサの長髪に真っ黒いTシャツにジーンズの今の俺は、多分、ニートにしか見えないだろうから無理もないけど。

「悪いけど、あなたの娘さんの為じゃないです。俺は目を治してくれるって言われて乗ったんですよ。」

ゴタゴタ言い訳しても逆効果だろうから、俺は本音を言って髪を掻きあげる。

ビー玉みたいな左目が顕わになったのに、さすがは外科医だ。

小笠原は顔色一つ変えずに、俺に近づいてきた。

俺より身長が低い為、小笠原は俺を見上げて左目を観察する。
そして、ああ・・・、と納得したように呟いて、俺に右手を差し出した。

「君の目は角膜さえあれば治るかもしれない。私が執刀してもいい。そういう事ならお互い同じ目的を持った同志と言うわけだ。私もこの計画には協力を惜しまない。だから君も娘の分まで協力してくれ。頼む。」

俺の右手を握った手は力強く、娘を助けようとする父親の涙が目に溢れた。

ああ、この人も・・・。

大事な人のために、何でもする覚悟だ。

そんな相手がいない俺は少し羨ましく、少し自分が寂しくなったけど、この人たちの為に俺は何でもやろうと思った。
彼らに比べたら、ちっぽけな覚悟だったけど。

ともかくにも、この日、役者は揃った。

娘の詩織ちゃんの為に肺が欲しいしずかちゃん。

妻の瑞希さんの為に心臓が欲しい根尾に、その父親で院長の小笠原。
そして、角膜が必要な俺。

この時を待っていたかのように、事態はこの日の夜から急展開していった。

獲物 1

根尾の妻とその父親に会ったその夜、俺はいつも通り根尾の帰りを待ちながら、ぼんやり自殺サイトを眺めていた。

季節はすっかり夏になっていたけど、スイートルームは完全空調管理されてて、俺は常に快適空間の中で引き籠り生活を続けている。

バイトと言っても、まだ現金支給はされてなかった。

でも、家賃はかからないし、食いモンは根尾やしずちゃんが調達してくるし、快適なホテルのスイートルームに引き籠ってパソコン見てりゃいいんだから、もう金なんて要らなかった。

あいつらさえ良ければ、このまま俺を囲って欲しいくらいだ。

プライドのない俺は食い繋げれば、ヒモだろうが、奴隷だろうが何でもやってやるのに。

今までそうやってしか生きてこれなかった。

俺みたいな人種は選んでたら、食っていけないのだ。

登録していた派遣会社から、工場の清掃とか、正月休みの正社員の穴埋めみたいな仕事でも、オフアールがあれば何でもやった。

次にいつ来るか分からないし、断わったら後がないかもしれない。提供されたものは、ありがたく享受するのが俺のポリシーだった。

でも、最近になって少しだけ思う。

もしかして、目が治れば俺の生き方も変えることができるんだろうか。

あいつらみたいに自立して、大事な人を守る為のプライドを持つことができる？

流されるんじゃないかって、自分の意思で人生を決める事ができるようになる？

パソコンの前で呆けてたら、突然ドアが開いて根尾が帰ってきた。少し疲れた様子で、白い顔が更に青白くなっている。オールバックにした栗色っぽい髪が額に垂れてて、いつも見慣れている外人顔が妙に色っぽい。

根尾は俺に気が付くと、力なく笑みを見せた。

「岸上君、ご苦労様。また弁当で悪いんだけど、買ってきたから一緒に食べないか？」

そういつて根尾はフラフラとダイニングテーブルにもたれるように、席についた。

いつもは能天気な根尾が、元気がないのは気持ちが悪い。

さすがに俺も少し心配になって、根尾に向かい合って席についた。

お馴染みの海苔弁当を二つと、桃のチューハイを2缶、コンビニのビニール袋から出すと俺の前に並べる。

飲めないクセにアルコールを買ってくるとは珍しい。

根尾は食に対する興味がなくて、毎日弁当でも全く気にならないみたいだ。

金はあるクセに今までも弁当生活をしてきたんだろう。

正直言えば、俺はかなり飽きていたけど、金を出してないので文句を言う権利はない。

缶をまず手にとって、プルトップを開けながら、根尾は溜息交じりに笑った。

「君も付き合えよ。今日は少し飲みたい気分なんだ。」

そこで買ってきたのが桃チューハイか……。物憂げな顔でそう言った根尾は、カッコ良かったんだけど、俺は桃チューハイ1缶では酔えない。

でも、桃チューハイ片手に悲劇の主人公を気取っている根尾が少しかわいくなって、俺は苦笑いしながら、同じように缶を開けて根尾の前に掲げた。

乾杯の音頭を取るのが好きな根尾は、少し表情を柔らかくして、缶の縁をコツンと当てる。

グビグビッと一気に飲んで、根尾はハーッと深い溜息をつく。何か言いたい雰囲気は分かったので、俺は黙ってヤツを観察していた。

物憂げな表情のまま額に手を当てて、やがて、根尾は呻くような低い声で話し出した。

「瑞希を見ただろ？ 岸上君。」

「……見たよ。かわいいじゃん。あんたには若すぎるけど。」

「……確実に悪くなってる。」

もう間に合わないかもしれない。移植手術に耐えられる体力がない。手術するなら一刻も早く……。

でもできないければ、どの道死ぬしかない。」

「……そう。」

「僕は時々、分からなくなるんだ。このまま死なせてあげたほうが楽なんじゃないかってね。」

必ず治すって約束したけど、治したいのはただの僕の医者としてのプライドで、本当に彼女の事を思ってるのかってさ。」

銀縁眼鏡の奥の目が赤くなって潤んでいる。

相当、弱気になってるのは良く分かった。

陳腐な慰めは言いたくなかったけど、俺は少し考えた後、素直に自分の見解を語った。

「・・・あんたは本当に彼女の事、思ってるよ。俺が彼女だったら、あの状態で生き長らえるより一か八かの勝負をしたいと思う。あんたは間違ってる。彼女はあんたの決めた事に同意する筈だ。」

そうだ。

そこは間違ってる。

間違っているとすれば、他人の臓器を強奪しようという常識外れなハングリー精神ぐらいだ。

俺の言葉を聞いて、根尾は照れたように少し笑った。

桃チューハイのお陰で、白い顔が既に赤くなっている。

これだけで酔えるんだから、安上がりな男だ。

「珍しいな、岸上君が優しい事いうなんて。僕は嫌われてるか思ってた。」

「俺は優しいよ。根尾さん、無理して飲まない方がいいよ。今日は寝たら？おい、寝るなよ、ここで・・・。」

俺は立ち上がって、既にダイニングテーブルでダラリと溶けかけている根尾の腕をグイッと引き上げた。

促されるまま、根尾は俺に引き摺られてベッドに倒れ込む。

寝転がった根尾の腕が俺を放さないの、仕方なく俺もベッドに横になった。

「岸上君は変わってるよな。よく、こんな狂った計画に乗ったと思うよ。僕らは人殺そうって言ってんだよ？」

根尾は自嘲的に言った。

コイツに言われたくなくて、俺も笑って言い返す。

「あんたも変ってるよ。よく俺みたいなどこの馬の骨とも分かんないヤツを誘ったもんだ。しかもさ……。」

「しかも、何だよ？」

「……セックスの趣味も変ってんじゃない？」

根尾は、ああ……と言ってクスクス笑う。

「君なら受け入れてくれるって確信があったんだよ。誰でも誘う訳じゃない。」

「……でも、しずかちゃんとは、前からだったんだろ？」

俺は以前から気になっていた事を初めて口にした。

根尾は上を向いて考えた後、そのまま俺の顔は見ないで、返事をする。

「静香とは長い付き合いなんだ。彼女が結婚する前、僕らは付き合いってた。彼女の旦那が亡くなってからは、お互い傷を舐めあう関係だよ。もう、愛とかじゃない。」

「……俺に気を遣わなくてもいいよ。あんたらお似合いだもん。」

根尾は体を起こして、俺に覆い被さってきた。

唇が触れ、アルコール混じりの桃の香りがする。

「岸上君、僕らは君が好きなんだ。この関係は嫌か？」

「……だから、それが変だって。」

俺達は低く笑って、お互いを弄り合う。

アルコールのせいで、根尾の緑がかった瞳は透き通ってすごく綺麗だ。

細いけど、骨格のしっかりした体型、長い手足。

これで、常識があればどこに行ってもモテただろうに。

人のシャツの下から、手を差し込みながら、根尾は耳元で囁く。

「正直に言うと、僕は怖い。何もできないまま、瑞希を死なせてしまうのが。僕はあの子を守りたいんだよ。どんな手を使っても……」

その声が少し涙声になって、熱い息が俺の首筋にかかる。

俺は根尾の首を両腕でギュッと抱き締めた。

「守ってやれよ。あんたのことは俺が守ってやるからさ。」

そのまま俺はくるりと体勢を変えて、根尾の上に被さった。

いつもはされっぱなしだった俺に初めて組み敷かれて、根尾は驚いたように大きな目を更に見開いた。

余裕のある顔がびっくりした子供みたいに固まるのを見て、俺は笑って言った。

「根尾さん、前に俺があんたのこと嫌いかって聞いたよね？」

「……ああ。」

「俺、嫌いじゃないよ、あんたのこと。俺が守ってやるから弱気になるなよ。あんたは堂々と嫌なヤツでいてくれ。」

「……僕が嫌なヤツだって何で知ってるんだよ？」

返事の代わりに俺は根尾にそっと唇を重ねた。

その時だった。

パソコンから、携帯のメールの着信音みたいなポロロロン・・・という音が部屋に響いた。

俺達は、ギョっとして顔を見合わせたまま硬直した。

それはまぎれもなく、自殺ツアー応募者第一号からのメールを受信した音だった。

獲物 2

「名古屋在住、HNうさぎだって。早速、会員登録してきた。興味あるから連絡くれてさ。」

「・・・さしずめ、本名は宇佐美さんだろうな。」

俺と根尾はパソコンの前に張り付いて、初メールを見つめた。

まさか、本当に来るとは。

何てバカなヤツだ。

殺されるとも知らずに・・・。

でも、死にたいんだから、それが本望なんだろうか？

俺は嬉しいような悲しいような複雑な気持ちで唇を噛んだ。

これは俺達が望んでいた第一ステップになる筈なのに。

つくづく俺は覚悟ができない。

生温い自分の性格を恨んだ。

「岸上君、スケジュール表添付ファイルで返信して。絶対、逃がさないように。」

対照的に、さっきまで弱気になってた根尾は、いつもの残酷スイッチが入ったみたいだ。

ギラギラと肉食獣みたいに目を光らせ、俺に指示する。

情けないけど、俺はテンパって慣れないメールを打つのにおタオタしていた。

「根尾さん・・・。」

「何だ？」

「俺、敬語で書くの苦手なんだけど。冒頭に前略とか、拝啓とか書

くのか？」

「バカ、要る訳ないだろ。業務的に必要事項さえ書けばいいんだ。」
「ダメだよ、俺、事務職やったことないもん。あんた書いてよ。医者だろ？」

「そういうのは医療事務っていう仕事をする人が別にいるんだ。大体、敬語が書けないって、君は大学くらい行ってないのか？」

「行ったけど、俺、経済学部。あんたは？」

「僕は医学部だ！決まってるだろう！もういい、どきなさい！」

根尾は俺を突き飛ばし、パソコンの前に陣取ると、ものすごい速さでキーボードに指を走らせ、さっさと返信してしまった。

「なんだ、打つの早いじゃん。」

感心して口笛を吹いた俺を根尾はキレた視線で睨み付けた。

いつもの飄々とした根尾にしては珍しい狂気を孕んだ表情に、俺は少し怖気づく。

「岸上君、これはチャンスだ。この人は絶対に自殺してもらおう。もし適合すれば、明日にでも心臓移植をする。瑞希にはもう時間がない。最期のチャンスになるかもしれないんだ。」

「・・・落ち着けよ、根尾さん。スケジュール通りにするなら、名古屋に迎えに行くのは来週になるよ。しかもまだ一人しかないじゃないじゃん？」

「構わん。初回だからリハールサル代わりに今回は一人だけの参加でいい。せめて事前に、血液型が分かれば・・・。」

俺は大事な事に気が付いて、ハタと顔を上げた。

「瑞希ちゃんは何型なの？」

「彼女はB、しずかの娘もB、ちなみに僕もしずかもA。だから、

今メールくれたうさぎさんはB型であることが望ましい。」

「もし、違ったら？」

「遺体は病院から直接、クルーザーで沖まで持って行って水葬とさせて頂く。」

それを聞きながら、少し考えた。

俺の目はどうなってんだ？

「俺はB型だよ？」

根尾は驚いた顔で俺を見返した。

「じゃ、B型の場合は、君にも角膜が移植されることになる。ま、血液型だけじゃないんだけど。適合したらの話さ。」

俺の事はすっかり忘れてた根尾のすました顔を見て、俺は苦笑いする。

この左目が大好きな根尾には、治らない方がいいくらいなのかもしれない。

運行スケジュールを送った後、再びウサギなる希望者からの返信が来た。

名古屋駅のパスターミナルで朝6時に迎えに行く旨を、根尾は素早く書いて返信した。

これで、後は実行するだけだ。

だけど、どうやって？

具体的な殺人方法なんかはまだ考えた事もなかった俺は、今更なが

ら根尾に聞いてみる。

「なあ、自殺ツアーに一人しかいなかったらヘンに思わないか？」

「サクラ部隊として、我々全員、参加者として同行する。君は主催者を名乗って運転してくれればいい。全員で同行すれば逃亡も防げる。」

「運転はいいけど、誰の車だよ？ あんたのプリウスじゃ定員オーバーだろ？」

「自分の愛車を使うわけないだろ。病院名義の接待用アルファードを拝借する。もちろん、院長の承認済みだ。」

「名古屋からこっちまで連れてくるのか？」

「そうだ。まず、院長の力で、このホテルを一日貸切にする。死んでもらうのはこのホテルになる。文字通り、楽園に来て頂くんだ。できれば仮死状態の内に病院に搬送して、そのまま移植手術をしたい。」

血液型等、適合しなかったら、そのまま水葬だ。」

理路整然と話す根尾を俺は感心して見つめた。

きっと何度もシュミレーションして考えたんだろう。だけど、一つ聞いてないことがある。

「死因は何にするの？」

根尾はニヤリと笑った。

その冷酷残忍な表情に、俺は寒気がした。

多分、これがこの男の本性だ。

「岸上君、勘違いしないでくれ。僕らは殺さない。うさぎさんが、自殺するんだ。」

自殺を図った女性の健康保険証にドナー希望が書いてあったので、

搬送先の病院で移植手術が行われた、というのが今回のシナリオだ。彼女は死ぬ為にやってきて、自らの意思でドナー登録していた。だから、医療機関としては当然、摘出したという訳だ。」

俺は黙って、根尾の理論武装を聞いていた。

根尾は手を下さないんだ。

何故なら、仮死状態にして生きたまま臓器を摘出するのが、この男の目的なんだから。

俺は、既に狂気を孕んだ根尾の端正な顔を見つめていた。

獲物 2（後書き）

ここまで読んで頂きまして、ありがとうございます。

ここで第2章終了、次なる展開にご期待下さいませ。

ウサギ 1

朝、6時前の名古屋駅は日曜日ということもあって閑散としていた。名古屋育ちの俺には懐かしい風景だ。

高級アルファードの運転席で、俺は周りを見回す。

半年振りくらいの風景になるんだろうか。

高校の時はよく、この辺りをツレと歩き回ったもんだ。

ハンドルにもたれて、俺は場違いな感傷に浸ってしまう。

バックミラーを覗いて見ると、俺の仲間、いや、運命共同体の加盟メンバーがうたた寝をしていた。

2列目には根尾、後部座席にはしずかちゃんと、小笠原院長。

皆、前日は普通に勤務していたので、昼間寝ていた俺が運転して名古屋に到着した。

朝5時に出発した時は、根尾なんか遠慮なくシートに座り込むなり寝息を立て始めた。

これからしようとしている事を考えたら、やっぱり図太いやツだ。俺は最初から運転手兼、主催者の役を請け負っていたが、ここに来るまでの道中、誰も助手席に座ってくれなかったことに若干、ショックを受けた。

しずかちゃんと朝焼けのドライブを楽しみたかったなんて考えてた俺も、やっぱり図太いんだろうか。

6時には、まだ少し時間があつた。

俺は駅前のロータリーをぐるりと一周しながら、ウサギらしき人物がいないか視線を走らせる。

すると指定したバス停に向って駅の方からトコトコ歩いていく女の

姿が見えた。

30歳くらいだろうか。

カットソーに細身のジーンズ、茶色の巻き髪。

よくいる名古屋の女の子スタイルだ。

顔立ちは悪くはないものの、何となく垢抜けない。

覇気がないと言えいいのか、印象が薄い顔だ。

それは俺も人のこと言えないけど。

俺達はこの女を殺して、臓器を奪おうとしている。

鼓動が速くなったのを感じて、汗で湿ってきた手でハンドルを握り締めた。

俺は振り返って、座席で思い思いの格好で寝息を立てているメンバーに怒鳴った。

「おい！名古屋着いたぞ。根尾さん、どうする？ターゲットはもうバス停に向ってる。」

眼鏡を慌てて掛け直した根尾が、目をパチパチさせながら起き上がった。

運転席の背もたれに隠れるようにしがみつくと、フロントガラスから見えるターゲットを凝視する。

後部席で飛び起きたしずかちゃんと小笠原院長の顔にも緊張が走る。

「あれが応募者のウサギさんか？」

「俺はアレだと思うよ。どうする？声でも掛けるか？」

「主催者は君だ。迎えに行くなら君じゃないと話がこじれる。岸上君、行ってくれるか。」

「・・・了解。」

俺は左目に被さった髪を掻き上げ、眼科で貰った白い眼帯をかけた。最初はモノムライとか、結膜炎とかすぐに治る病名を言わなければ、この目で怪しまれるかもしれない。

あからさまに死神みたいな顔で行ったら、ビビッて帰ってしまうかもしれない。

そう思ってたかけた眼帯だったが、バックミラーで己の顔を見直すと、白い顔が更に白くなって自分でも緊張しているのが分かった。

赤みの強い右目だけがギラギラして、ターミネーターみたいだ。

さあ、何て言って声かけよう・・・。

もっとイケメンだったら、きっと軽い感じでナンパして連れて来れるだろうに。

自分の経験値の低さを呪いつつ、俺は車から降りた。

バス停で待ってるかと思いきや、女は吞気に自販機まで歩いて缶コーヒーを買って飲み始めた。

殺す側の俺でもこんなに緊張してんのに、こいつは死ぬ覚悟があるんだろうか。

その女の背後から俺は自販機の前に出てくると、缶コーヒーを一本買った。

女はその間、じっと俺から視線を外さない。

俺は確信した。

こいつが自殺志望のウサギだ。

「もしかして、ツアー参加者のウサギさん？」

振り向きざまに俺は女に向って話しかけた。

ビクッと体を震わせて、女は俺を見上げる。

真面目そうな、普通の女だった。

何の理由で死にたいのかは分かんないけど、大きな悩みがありそうには見えなかった。

その時、俺は怖気づいた。

こいつを殺したくない・・・！

できれば、このまま帰ってくれ・・・！

「そ、そうです。」

「あ、初めまして。俺は死神。ツアー主催者です。時間は少し早いけど、まあ、ここで会っちゃったし、行きましようか？他の参加者はもう乗って待ってる。後はあなただけだ。」

俺はなるべく感じ悪く、無表情で言った。

もしかしたら、俺がイヤになって帰るって言い出すかもしれないって期待したからだ。

「あ、あの、エデンって書いてありましたが、具体的にはどこに行くんですか？」

案の定、女は不安げな表情になって俺に質問を投げかける。

そうだ、俺は悪いヤツだ。

早く気付いて、さっさと帰りやがれ・・・！

死ぬ覚悟も実はなさそうなこの女を、俺はバカにした顔で見下ろした。

「最終的な行き先はエデン、つまりあの世ですよ。それだけじゃダメですか？それとも、ここにまだ未練がある？」

俺の意地悪な言い草に、女は黙って俯いた。

そうだ、諦めて帰れ。

女は返事もしなかったけど、帰ろうとしなかった。

分かりやすい単純な性格が、決心が付かずブレているのがバレバレだ。

「悩んでるなら辞めた方がいい。他の参加者の迷惑になります。刑事事件になることは避けたいのでね。じゃ、俺はこれで・・・」

女が固まったのを見て、俺は捨て台詞を吐くと、くるりと背中を向けて歩き出した。

もう来ないだろう。

でも、根尾には何て言おう。

俺の勧誘悪くて帰ったって言ったら、怒るだろうか。

まあ、縁がなかったってことで・・・。

なんて、考えながら車に向って歩き出した俺の背中に、女の声が響いた。

バタバタと走ってくる足音が響く。

俺はギョっとして、立ち止まった。

「ま、待って下さい！私、行きます！」

多分、その時、俺はすごく感じ悪い顔してたと思う。

このバカ女の襟首をウサギみたいに掴んで、蹴飛ばしてやりたかった。

た。

ウサギ 2

「・・・無理しなくてもいいですよ。途中で帰るって言われても困りますから。」

「言いません！私、考えたら帰る所もないんだから。連れてって下さい。」

帰るところがない、だ？

俺は、いつものクセで首を傾げて女の顔を見た。

それなりに必死な表情だ。

冷たく突き放そうとする俺に、この女は寧ろ縋り付いてくる。

仮にも、死のうと思っでここまで来たヤツだ。

それなりに事情はあるんだろう。

「途中下車は認めませんよ。本気なら止めません。」

俺は投げやりに言っで、車に向っで再び歩き出した。

彼女は置いていかれないように、早足で必死に付いて来る。

アヒルの子供みたいに付いて来るこの女は、文字通りカモだ。

俺は自分の背が高いことに感謝した。

同じ目線だったら、コイツに今の俺の苦虫を潰したような顔が見えてしまっただろう。

車が見えるところまで来た時、俺はやっと振り向いて彼女に最終宣告した。

できるなら、ここで帰ってくれと願いながら。

「今から、この車で出発する。あんたは同行者と一緒に後部座席に乗って。行き先は太平洋側とだけ言っておくよ。」

そう言っで車のキーを出すと、女はビックリした顔で俺を見上げた。

「あ、あの、あなたが運転して大丈夫？」

「何で？」

「だって、その目じゃ危ないでしょ？」

ああ、と言っで、俺は髪を掻きあげた。

やっぱり、これが一般の人間の感覚だろうな。

目が悪い運転手の車には乗りたくないらしい。

これから死にたい人間でも思うんだから、会社の人事の人間が俺を気に入る筈がない。

これは子供の頃からだから慣れてんだって、よっぽど言っでやろうかと思っただけど、ここは意地悪く切り返すことにした。

「朝、起きたら結膜炎になっでた。でも、あんた変った人だな。どうせ死ぬのに事故ること心配してんの？」

これは功を奏した。

女は顔を赤らめて、か弱い反撃をする。

「心配しただけよ。運転が疲れるかと思っで。大丈夫ならいいよ。」

・・・俺の心配してくれただのか。

帰らせたいとは言え、女の子を苛めてるみたいで、俺は軽く自己嫌悪になった。

自分の生温い性格が、恨めしい。

女を二列目シートに乗せてから、俺は自分の定位置の運転席に座った。

バックミラーで後ろを観察してみると、外面のいい根尾が彼女に笑いかけてるのが見えた。

後部席のしずちゃんと院長は、完全に緊張して固まっている。

被害者が乗り込んできたんだから、それは自然な反応だろう。

「では、人数も揃いましたので出発します。到着予定地はエデン。ですが、まず東名高速乗ります。最初の休憩は上郷サービスエリア。よろしく願います。」

茶番とは分かっていたけど、一応ツアーらしくアナウンスしてみる。もちろん、誰も返事もしない。

遠足じゃないんだから、「イエーイ」とは言わないだろうけど、このメンバーで長旅は気が滅入る。

溜息を付いて、俺はエンジンをかけた。



名古屋の街を抜け、高速のインターにさしかかった。

その間、誰も話もしない。

密室の中の、緊張感に俺は耐えられなくなり、ラジオをつけた。

くだらないFMの早口DJの声が、これほどありがたかったことはない。

しばらくすると、根尾が彼女に話しかけてるのが聞こえた。

聞きたくもなかったけど、俺の真後ろに座っているヤツの声は丸聞こえだった。

「どちらからですか？」

「あ、名古屋です。あなたは？」

「僕も名古屋です。ハンドルネームはネオ。マトリックス見ました？」

思わず吹き出しそうになって、俺は慌てて口を押さえる。

自称キアヌ・リーブス激似の根尾が、ネオとは言いえて妙だ。

きっと、何日も前から用意していたんだろう。

ヤツは一発ギャグを真剣にネタ帳に書くタイプだ。

「初めまして。私はウサギです。あの、こんなところ来たの私初めてで、ちょっと緊張してます・・・。」

「自殺ツアーのリピーターは有り得ないでしょ、普通。もちろん僕も初体験です。あなたはどうしてこんなツアーに参加したんですか？」

そこは俺も聞きたい。

思わず耳を欹てたが、彼女の返事はなかった。

「言いたくないならいいですよ。これから死ぬメンバーに何も話す必要はないですから。悩みなんて人には理解されないものです。」

黙りこくった彼女に、根尾が優しく言ったのが聞こえて、俺は再度、吹き出しそうになる。

よく言うよ、根尾のヤツ。

善人ヅラしやがって。

バックミラーで観察しながら、俺は二人の掛け合いを見て苦笑いした。

その時、彼女がバックミラーの俺の顔を見た。

ミラー越しに視線が合って、俺は慌てて目を反らす。

・・・やべえ。

俺達がグルなのは絶対に知られちゃいけないのに。

まだミラーを覗いている彼女の視線を、俺は気付かないフリしてハンドルを握り締めた。

ウサギ 3

しばらく、車は高速道路をひた走っていた。

カーラジオのお陰で少しリラックスしてきたのか、ウサギは根尾とコソコソ話を続けている。

その声は殆んど丸聞こえだったけど、俺は無視していた。くだらんツツコミをして、根尾と顔馴染みなのがバレたら元も子もない。

「おい、死神クン、ツアーの日程表くらいないのか？」

突然、根尾が大声で俺に話しかけた。

俺は、嫌な顔をしてバックミラー越しにヤツを見る。

そんなものがないことは知ってるくせに、リップサービスにも程がある。

「そんなに気になるなら、次のパーキングで教えますよ。最終的に行く所はエデンですけどね。」

俺はウンザリしながら、ミラーに写る女を片目で睨んでやった。

ムチャクチャ不安そうな顔でこっちを見ている女は、もう根尾だけが頼りと言わんばかりだ。

バーカ。

本当の悪党はそっちだよ・・・。

でも、ビジュアル的には俺の方が凶悪に見えるだろうから、俺は死神に徹することにした。

人には適材適所があるものだ。

納得したのかどうかは分からないが、ウサギは何とかそこで口を閉じた。

黙っててくれるのは助かる。

何か聞かれたら、思わず言っではいけないことまで喋ってしまいそうだった。

やがて、最初の東名高速のパーキングエリア「上郷」に到着した。この緊迫した車内の空気が少しでも緩和されるのを願って、俺は前を向いたままアナウンスする。

「ではここで10分休憩入れます。外に出ても構いません。」

その言葉に、後部座席に座っていたしずかちゃんと、院長はガバッと立ち上がった。

既にいたたまれなくなっていたんだろう。

二人が同時に立ち上がったので、ウサギも慌ててドアを開けて、座席を空けた。

後列の二人が出てから、根尾も外に出てウサギに話しかける。

「ウサギさん、ちょっと店の中見てきますよ。死神さんと話でもしたらどうですか？」

「あ、はあ……。」

そう言った根尾の声が聞こえて、俺はギョっとした。

あの野郎……！
ムチャブリすんなってのに……。

不安そうに佇むウサギを俺に押し付けて、三人は連れ立って、パークینگエリア内の売店に向って歩いていった。
取り残されたウサギは、不安そうな顔でキョロキョロ見回しながら、まだ車から離れない。

少し可哀相になった俺は、彼女に近づいた。

横に並ぶと割りと小柄な女だった。

しずかちゃんほど小さい印象はないものの、中肉中背、顔も人並み、ただ年は俺よりは上な感じがした。

俺が隣に立ってても何の反応もないこの女の扱いに困って、俺はタバコをポケットから取り出す。

美容サプリメントのバイトの為に中断してたタバコだけど、この一週間全く落ち着かなかった俺は、また手を出した。

元から止める気はサラサラなかったけど、これだけ値上がりすると非課税世帯の俺には手が届かない代物になってしまっただろう。

吸うなら今のうちだと思うと、中毒は更に加速していた。

「・・・タバコ、吸ってもいい？」

ダメ、と言われても、吸いたいのので聞く意味はないんだけど、一応エチケットとして聞いてみる。

女はイヤな顔をしたけど、何も言わなかった。

期待を裏切らない女の反応が、俺は何となく面白くなって、タバコを一本勧めてみる。

案の定、女は突っ返してきた。

「要りません。私、吸わないから。」

「だったら尚更、どう？最初で最後じゃん。」

思った通りの反応が返ってきて、俺はニヤニヤしながらからかって

やる。

すると、女はタバコを一本掴み取り、口に咥えると挑戦的に俺に顔を突き出してきた。

「火！火つけてよ。」

「はいはい。」

ライターで火を当てても、咥えてるだけなので点火しない。

タバコ初体験の中学生みたいだな・・・。

俺は可笑しくなって、アドバイスしてやった。

「あの、吸わないと付かないよ。」

俺の言葉に女は思いっきり息を吸い込み、お約束通りゲホゲホとむせ返った。

やっぱり面白い女だ。

「吸った事、ないの？」

「な、ないよ。体に悪いじゃない。」

「じゃあ、死ぬ前に吸つというて良かったね。好きになるかも知れないよ。結構、クセになるし。」

「なりません！てか、クセじゃなくて中毒って言うのよ、それ！」

俺は笑って煙を吐き出した。

この半年くらいの間、俺の周りには運命共同体のあいつらしかいなかったから、普通の感覚の女の子と話するのは新鮮だった。学生時代に戻ったみたいだ。

でも、ここで心を許してはいけない。

俺達は被害者と加害者になる関係だ。

俺は自分の気を引き締める為にも、ダイナマイトな一言を言い放った。

「日程、聞きたいんだろ？そんなに長くはないよ。死亡推定時刻は夜10時になってるからな。」

お約束通り、可哀相なウサギは一気に蒼白になった。

ウサギ 4

「ビビった？」

「そ、そりゃ、まあ……。」

完全に我に返ったウサギに向って、俺は追い討ちをかけるようにイヤな事を説明した。

日程を聞きたいって言ったのは、こいつの方なんだからまあ、仕方がないだろう。

「これから南下して、太平洋に面した、とあるホテルに行く。夜まで自由時間。大浴場で最期の風呂に入ってもいいし、浜辺を散歩してもいい。

それから、このメンバーで最期の晩餐をしてツアー終了。最期にプチ贅沢してから楽園に行こうっていう画期的なプランだろ？」

「ツアー終了っていうのは、つまりそこで死ぬってこと？」

「そうだね。」

当たり前だ。

その後、名古屋まで送り届けるくらいなら、旅行会社やった方がマシだ。

女はオズオズと核心に迫ってくる。

「死因は、何？」

「そこは客のあんたが考える必要はない。主催者側に任せてくれればいい。希望があれば聞いとくけど」

来ると思ったこの質問に、俺はシュミレーションした通りの返事をした。

この質問は何度も根尾にしたんだけど、ヤツは薄笑いを浮かべるだけでどうとう教えてくれなかったのだ。

あいつのことだから、苦しまずに大量殺人でできる方法くらい知ってる筈だ。

「つまり、私はあなたに殺されるってこと？」

「俺は手は下さないよ。どうせ殺されるなら、イケメンじゃなきゃ嫌だろ？」

ふざけながら、半分本気で俺は言ってやった。

手を下すとしたら、根尾なのは間違いない。

年は食ってても、俺よりは見てくれのいい根尾にやられる方が、女としても本望だろう。

その時、売店の方からゆっくり歩いて戻って来る三人の姿が俺の視界に入った。

お喋りはここまでだ。

少なくなったタバコを俺はアスファルトに捨てると、靴で踏み消した。

最悪の喫煙マナーだけど、携帯灰皿を持ち歩くほど、俺はオシャレな男じゃない。

安心させるように、俺は極めつけの台詞をウサギに言った。

「苦しまないようになってるから、安心していいよ。気が付いたら、あんたはエデンにいる筈だ。」



全員乗車したのを確認して、俺は再び運転席に座る。

事故でもなけりや、後30分くらいで高速を降りることになる。
あのホテルに戻るのも時間の問題だ。

実行するのは夜になってからだから、昼から連れてくればいいのに。
俺は散々根尾に言っただけで、名古屋駅で人目につくのを恐れた
根尾は何としても早朝に連れてきたがった。

ホテルは貸切状態になってるし、交通手段も車しかないので、連れ
てきてしまえばこっちのものだと単純に考えたらしい。

綿密なのか、大雑把なのかよく分からない今回の計画に、俺は少し
不安を感じていた。

俺が一番心配していたのは、早まった根尾が彼女が自ら死ぬ事に待
ちきれず、殺害してしまうことだった。

この一週間で妻の容態は更に悪化しているらしい。

一刻も早く手術をしないと、体力が持たないそうだ。

ヤツにとっては、死ぬ前のフレッシュな心臓を手に入れたところ
だろう。

どの道、死んで貰うんだから、とヤツは言うけど、ドナー自殺後に
手術するのと、ドナーが生きたまま手術するのでは雲泥の差があ
る。

常人の俺はそう思うんだけど、常識の欠けている根尾にはその区別
がつかないらしい。

ぼんやり考えながら運転していると、今度は後部座席に座ったウサ
ギがしずかちゃんに話しかけてるのがミラー越しに見えた。

完全にビビッているしずかちゃんは、なるべく目を合わせないよう
に必死で無視しようとしている。

娘の為に参加しているとは言え、しずかちゃんは仮にも看護師で、
優しいマリア様みたいな人だ。

これから被害者になるウサギの顔なんて見てられないんだろう。
テンパってるのがバレバレで、俺は苦笑した。

「あの、初めまして・・・。」

「あ、はあ。初めまして。」

せっかくウサギが話しかけたのに、しずかちゃんは気のない返事を
して再び、外を眺めた。

肩透かしを食らったウサギは、身の置き場に困ってブスっとしてシ
ートにもたれる。

何で、こんな人たちと一緒に旅してんのかしら？

ウサギの呟きが聞こえてくるようだった。

ホラ見ろ。

知らない人間と一緒に死ぬなんて気疲れするだけだ。

俺の長年の疑問が、ここで立証された。

高速を降りてから1時間ほど走った後、俺達は朝までいたホテルに
戻ってきた。

今日の朝までここで寝てて、明け方車で出てきて、もう戻ってきた
んだから、あっという間だった筈なのに、何だかすごく懐かしかつ
た。

ここで根尾としずかちゃんと一緒に過ごした濃密な時間は、もしか
すると今日で終わりになるかもしれない。

そう思うと、尚更、今回のウサギ捕獲作戦に俺は後ろ向きになっ
ていった。

車をホテルの敷地内の駐車場に止めて、俺はミラー越しに最後のア
ナウンスをする。

「お疲れ様です。到着しました。一先ずロビーに集合願います。」

その声を待ってましたとばかりに、根尾がドアを開けると、中にい
たメンバーは先を争って飛び出してきて、ホテルに向かってズンズン
進んで行ってしまった。

二人のその反応に俺は焦った。

逸る気持ちは分かるんだけど、俺以外は今日初めてのツアー参加な
んだから、勝手知ったる感じでホテルの中に入って行くのはおかし
いだろ。

いくら俺達が今朝までここにいたとしても、それはウサギに決して
知られてはいけない。

俺が冷や汗をかいていると、根尾が彼女が下車するのを手伝いなが
ら、フォローしてくれた。

「やっと着きましたね。自分で運転してればなんて事ない距離なん
ですが、人の運転は疲れますね。」

根尾の言葉に女はホッとして笑みを見せたが、運転がヘタだと言わ
れた俺はムカっときて、思わず言い返してしまった。

「ヘタな運転で申し訳ございませんね。さっさと中、入って下さい
よ。」

「君の運転はヘタじゃないよ。ハンデがあるにしてはね。さ、行き
ましょうか。」

根尾は肩をすくめてキザなウィンクを投げかけると、彼女の背中を押し、ホテルのエントランスに向っていった。
取り残された俺は、一気に疲れが出て、車にもたれかかった。

いよいよだ・・・。

無意識に啜えていたタバコの煙を吐きながら、車にもたれて俺は空を仰いだ。

白い雲が浮く真夏の空に潮風の匂いがした。

躊躇 1

口に咥えたタバコが灰になるまで、車にもたれたまま俺はボンヤリしていた。

体が動かないのは、先に進みたくないからだって分かっている。

・・・何で、あんなバカ女が来ちまったんだろう。

俺は舌打ちして、タバコをアスファルトに投げ捨てた。

でも、本当のバカは俺だ。

今更、何を躊躇ってる？

あの女はまだ志願者第一号で、仮にアイツが逃げたとしても俺達の計画はまだまだ続く。

最初のステップでこんなにブレてたら、俺はこの先どうするんだ・・・。

俺の目はともかく、後のメンバーには臓器が必要だ。

何に変えても。

あいつらには愛する人間がいて、死なせる訳にはいかないんだから。

でも、俺は？

俺は自分が殺した女の目を移植したらどうする？

さっきの女の黒目がちな瞳が俺の左目に入った絵を想像して、俺は軽い吐き気を覚えて頭をブルンと振った。

考えるな・・・。

今は計画通りに動くしかない。

ふらつく体に鞭打ちように、俺は両手で顔をパン！と叩いてからホテルに向って歩き出した。



ホテルのロビーに入ると、すでにソファに腰掛けてくつろいでいるヤツラの姿が見えた。

何を話してるのか聞こえないが、何やら神妙な面持ちで話し合ってる。

大方、自己紹介でもしてんだろ。

調子のいい根尾が、ヤブヘビになることを言わないか心配だったけど、取り合えず俺は計画通りフロントの女性のところに行って部屋の鍵を受け取った。

このフロントの女性とは既に顔馴染みだったけど、彼女は意味深な笑みを見せただけで、何も言わずに鍵を渡してくれた。

スイートルームに長期滞在してる医者の方に居候してる俺のことを、そういう関係だと思ってるに違いない。

否定はしないけど。

「これから夕食まで自由時間です。夕食は地下の宴会会場で、7時集合。時間厳守でお願いします。

部屋も自由に使っていていいですから、くつろいでいても構いません。

温泉は一階にありますので、ご自由に。」

話も煮詰まってきた頃、俺は皆が神妙な顔を突き合わせてるソファ

に乱入して、マニュアル通りの説明をすると、鍵を手渡した。
最初に院長が渋い顔をして鍵を掴み取る。

俺の顔を睨むように見たけど、何も言わずにエレベーターの方に向
っていった。

この院長は俺はどうも苦手だった。

イカれた俺達に比べて、社会人としての常識を持っている唯一の人
間に思えた。

院長の後に続いてしずかちゃんが、俺の手から鍵を受け取る。

心細そうな白い顔はもう泣きそうだった。

すぎる様に俺を見上げて、何か言いたそうに口を開いたが、すぐに
唇を噛み締め、俺の横を通り過ぎて行った。

次に根尾が俺にウィンクして鍵を受け取った。

嬉々としているその顔は、生涯に一片の悔いもなさそうだ。

こいつだけはブレない。

自分が求めるモノを得る為に手段は選ばず、後悔もしないだろう。
人に嫌われるとか、どう思われるとか、こいつには関係ない。

臨機応変に流されてきた俺とは対照的に、根尾は自分が欲しい物の
為に逆らっていくことができる男だ。

俺はそんな根尾が好きだった。

三人がエレベーターに乗ったのを見送ってから、俺は改めてウサギ
が座っているソファに腰掛けた。

お約束どおり、イヤな顔をしてウサギは俺を睨む。

俺は面白くなってこいつの顔をニヤニヤして見てやった。

「何か、用ですか？」

攻撃的な口調でウサギは言った。

本当に単純な女だ。

期待を裏切らない。

「別に。これから何するの？お風呂？」

「あんたに関係ないでしょ？入りたかったら、入ればいいじゃないですか。」

「俺は公共のお風呂は入れないんだ。」

ちよつとからかってやろうと思った俺は、Tシャツの袖を捲くって自慢の腕を見せてやる。

正直言えば、この刺青は試供品の失敗作なんだけど、世間知らずな女の子をビビらせるには充分だった。

「刺青してる人は、入浴禁止って書いてあるだろ？隠すにしても、デカ過ぎるからな。」

「あの・・・、そういう業界の人ですか？」

期待通り青くなったウサギは、突然、態度を改めて低姿勢でオズオズと聞いてくる。

・・・いい感じだ。

このまま逃げてくれりゃいいのに。

でも、ウサギは硬直したまま俺を凝視している。

怖がらせ過ぎたかな？

「まさか。単なる若気の至りだよ。こうすれば風呂に入らない言い訳になると思ってね。」

適当な言い訳をしたけど、これは嘘じゃない。

少なからず自分の外観にコンプレックスを持っていた俺は、学校行

事なんかで皆で風呂に入られるのが死ぬほど嫌いだった。

俺の話が理解できない様子で、ウサギはヘンな顔をして俺をバカみたいに見つめている。

・・・くだらないこと言ったな。

被害者に対してプライベートな事は話さない方がいいのに、何だか今日の俺は口が軽い。

浮き足立ってるんだろうか。

「まあ、俺のことはいいからさ。暇なら付き合ってよ。」

俺はウサギに手を差し出した。

躊躇 2

差し出した俺の手をウサギは煩そうに払いのけた。

その仕草は男に慣れてない思春期の女の子みたいで、俺は更にかにかいたくなる。

いや、ホントに慣れてないんだろう。

何と言うか、余裕がない。

頑張り過ぎちゃって、男が引くタイプの女だ。

「どうせ暇だから付き合いますよ。どっか案内してくれるんですか？」

「光荣です。じゃ、海でも見にいきますか？名古屋からじゃ、あんまり来た事ないでしょう？」

俺の言葉に、他にいく当てもないウサギはぶーたれながらも、ノコノコついて来た。

ホテルを出て、駐車場を横切って、俺はガードレールを跨いで浜に出た。

小さいウサギは、跨ごうとした股の間にガードレールが挟まって、必死に足を抜こうとしている。

罨に掛かった兎みたいだ。

彼女の腕を引っ張りながら、俺は悪態をついてやった。

「足、短いなあ。」

「あんたがデカいんでしょ？人の足なんてほっというてよ！」

活きのいい啖呵に俺は少し嬉しくなった。

こいつは生きる元気がありそうだ。

自分の体を支えてる俺の腕に気が付いて、ウサギは慌てて手を振り解いた。

顔を真っ赤にして、ワザと乱暴な態度を取るウサギが、俺は面白くて仕方ない。

こいつに絡んでると、未来の事なんて何にも考えてなかった中学生に戻ったみたいに新鮮だった。

しばらく俺達は打ち寄せる波を黙って眺めていた。

真夏の日差しに照らされた波がキラキラ光って綺麗だ。

こんな綺麗な景色がすぐ傍にあったって、根尾やしずかちゃんは知ってたんだろうか。

きつと、大事な人の事ばかり考えてて、身近な美しいものにも気が付かなくなってたんじゃないかな。

知ってたらこんな薄暗い計画立てようと思わないだろうに。

ボンヤリ波の彼方を見つめるウサギに、俺はまだ聞いてなかった事を質問した。

「なあ、あんたさ、何で死にたいの？」

俺の問いかけに、ウサギは考えながらも案外素直に口を開いた。

本当は誰かに聞いて欲しかった。

そんな口振りにも思えた。

「・・・会社が潰れちゃって、今まで、失業保険でやってたの。それも終わるし、無職の弟夫婦もいるから家にもいられないし。後は、婚活で知り合ったつままないチビのメタボ男に二股かけられて、フラれたの。就職も決まらないし、今までの努力とか、時間とか全部

無駄だった気がしてさ。

失った時間が多すぎて、やり直すには歳取りすぎてて、もう全部リセットしたくなったんだ……。バカでしょ？」

自嘲的に話すウサギの気持ちはよく分かった。

何となく、俺と境遇が似ている。

仕事がなくて、親に認められた兄弟がいるせいで、自宅にも居辛く、やり直そうとしても人生にはリミットがある。

大した事じゃないって思うヤツは多分、人生で挫折した事がない人間だ。

根尾なら、くっだらねえって大笑いするに違いない。

でも、俺は笑わなかった。

「俺、定職就いたことないんだ。今まで工場で短期雇用の仕事しかしたことがない。だから、景気が悪くなってからは速攻クビになって、それから何にもしてないよ。失業保険なんて掛けて貰ってなかったし、厚生年金も入ってなかった。もちろん、彼女なんて最初からないしね。どう？俺の方が酷くない？」

慰めるつもりもなかったけど、この話を始めたら箍が外れて、今まで抑制していた不満が噴出した。

語気が荒くなってきた俺をウサギは同情的に見上げる。

「……どうして定職に就いてないの？」

「就けないんだ。この顔じゃ……。」

「……結膜炎だから？」

「それ、信じてたの？有り得ないバカだな、あんた。……見ろよ。」

俺は眼帯を外して、彼女に左目を見せた。

今後の計画を考えたら、絶対しちゃいけない行為だった。
この時、きっと俺の中で決心がついていたのかもしれない。

「死神みたいだろ？だからいつもあだ名は死神。本名が岸上^{キシガミ}だからな。」

俺の顔を見て、彼女の顔が恐怖で引きつった。

俺にとっては見慣れた反応だ。

・・・こいつを殺したくない！
もちろん、根尾にも、しずかちゃんにも、院長にも、殺させたくない。

本名までカミングアウトした俺の心は、この時、既にその方向に向いていた。

躊躇 3

「・・・それ、もちろん、見えてないんだよね？」

さっきまでの威勢はどこへやら、身体障害者に向けた優しさと同情を持って、ウサギは恐々俺の顔を見上げる。

これも見慣れた反応だ。

嫌な事聞いてごめんなさい・・・って人は言うけど、腫れ物に触るような言い方が、時に煩わしい。

無理だね、治らないよって開口一番に言ったヤツは根尾だけだ。

思えばヤツは、皆が触れないでおいた所を、いきなり切り裂いて俺の深層心理までえぐってきた。

アイツの無邪気で残酷な顔を思い出しながら、俺は言った。

「見えないよ。でも、右目は今の所、すごく良いんだ。片目だけでも1・0以上あるんだから。でも、それが逆に問題でさ。障害認定って知ってる？」

「・・・障害者手帳貰うヤツ？」

「そう、生活に支障が出る位の障害を持ったら認定されるんだ。そうしたら医療費は全額タダになるし、障害年金も貰えて、国から支援金も出る。でも、俺は見えないのに認定されない。生活に支障がないからだって。」

話しているうちに、俺の口調は再び熱くなっていくのが分かった。少なからず、俺がこの国の制度に不満を持ってる証拠だ。

自分のことを話すと、つい反社会的な事を言ってしまう。

それがダメ人間の言い訳だって思われたくなくて、いつもは言わないようにしてるのが、年も近い感じのこの女の前では、何となく素の自分が出てしまう。

学生時代の同級生と話してるような錯覚を覚えてるんだろう。

・・・俺らしくないな。

真面目に話したのが何となく気恥ずかしくなって、俺は照れ笑いでごまかした。

「ごめん。つまんないこと言っちゃったな。つまり、何が言いたいかって言うと、人の悩みとか、辛さとかは他人が定規で測れるものじゃない。だから、俺はあんたがどんな理由で死を選んでも、それはリスpektする。あんたの辛さはあんたにしか分からないからな。」

自殺推奨的な発言だったにも関わらず、ウサギは涙を溜めてグスグス言い出した。

女の涙には無条件に弱い俺は、大いに焦って慌てて両手をバタバタ振り回す。

男三兄弟で育った所以だ。

「な、泣くなよ！同情して欲しくて見せた訳じゃない。ただ、あなたの気持ちは分かるよって言いたかったんだ。」

「・・・うん。ありがとう。でも、死神さんに比べたら、私の動機なんて軽いもんだわ。バカみたい・・・。」

涙を溜めたウサギは、急に女の子っぽくなって、こいつがむしろかわい部類だった事に今更ながら気が付いた。

それはマズイ。

あんたはそんなキャラじゃない筈だ。

テンパった俺は、軽口を言って笑わそうと試みた。

「ああ、でも正直言って、どうしてチビでメタボな男にフラれたのかは理解に苦しむよ。オヤジと寝るのが好きなの？ あんたまだ若いのに。よっぽど男に飢えてた訳？」

「はあっ？」

元気にしてやろうと思ってつい口から出た冗談だったが、品がなさ過ぎて彼女の顔色が変わった。

ヤバイ。

本当に俺は女の扱いに馴れてない・・・。

「ええ、そうですよ！ 彼氏なんて何年もないくって飢えてましたよ！ あわよくば、結婚して楽な人生歩んでやろうと思ってましたよ！ 悪い？」

「悪くないよ。でも、結局、メタボにもフラれたんだろ？ ちょ、ちょっと、濡れるとまずいって！ おい！」

「何よ！ 自分だって彼女いなかったんでしょ？」

「俺は飢えてないよ。店行くし。」

「やだ、サイテー！ 下品なこと言わないで！」

真っ赤になって掴みかかってくるウサギ攻撃を俺は必死でかわしながら、なだめようと口にする事が全部墓穴を掘っていく。ついには彼女の手によって、俺は海の中に沈められた。

「あーあ、これ、どうしてくれるの？」

「いいじゃん、もう泳げば？」

あっかんべーをしてみせるウサギの顔を見て俺は安心した。そうだ、あんたはそんなのが似合ってるよ。

まだ、死ぬには早いだろ・・・。

冷たい海水は気持ち良かったが、ジーンズの下の下着の中までたっぷり入った海水がタプタプ音を立て、俺は慌てて立ち上がって上着を脱いだ。

今度は、俺の裸体に描かれた刺青を見て、ウサギは息を呑む。全く、想像通りの反応だ。

その顔が面白くて、俺は笑いながら、からかってやる。

「興味ある？ どうせ死ぬなら何でもやってみたら？ 公共のお風呂には入れなくなっちゃうけど。」

「け、結構です！ 私は温泉好きなの！ もう時間もないでしょ？」

「そうだね。本物は時間ないし、俺がマジックで描いてあげようか？」

「何が悲しくて、あんたにマジックで落書きされて死ななきゃなんないのよ？」

・・・全くだ。

俺がマジックで描いたドラえもんの落書きがしてある遺体が発見されたら、死んでも死に切れないだろう。

「あんた、面白いな。もっと笑えること言ってやろうか？」

「何よ？」

「これ、やって貰うのに、金払ってないんだよ。」

「・・・どうして？」

「これ彫ったヤツが、初めてだって言うんで、俺が実験台になってやったんだ。逆に金貰ってやったんだよ。だから自分でデザイン選べなかった。できたの見たら、デカ過ぎてビックリだよ。仕事ないから、身体で稼ぐことしかできなくてさ。最後の仕事は3ヶ月病院に閉じ込められて、新製薬のモニタリング。顔がマシだったら売春もやってるね。今んとこ需要はないけど。」

・・・女にはね。

心の中で補足しつつ、俺はかなり踏み込んだ事まで喋ってしまった。根尾が聞いたら完璧にアウトの領域だ。

「死神・・・岸上さんだっけ？あなた、変ってるね。」

ウサギの口から本名が呼ばれて、初めて俺は我に返った。まずい。

喋り過ぎだ。

こいつに俺が本名まで話したって根尾たちにバレたら、俺が反逆しようと思われてしまう。

実際、そう思われても仕方ないほど、俺はターゲットに接近し過ぎている。

緊張で顔を引きつらせて、俺はウサギに詰め寄った。

「うさぎさん、その名前は言わないで。死神って呼んでくれ。」

「?どうして?」

このやろう・・・!

弱みを握られて、俺は舌打ちする。

それに気付いたウサギは、勝ち誇った顔でニヤリと笑った。

「いいわよ。別に誰にも言わないから。下の名前は何?」

「・・・口が滑った。これ以上聞くなよ。」

「じゃ、私の名前、教えようか?」

「いいよ、大方、宇佐美さんと言うんだろ?クラスにウサギって呼ばれてるヤツいた。分かり易いよ。」

聞き分けのないウサギの言い回しに俺は苛ついて、思わず彼女の肩

に手をかけた。

男に免疫のなさそうなウサギは、予想以上にテンパッて顔を真っ赤にしている。

何か勘違いしてるみたいだが、こっちはそれどころじゃない。

「な、何？」

「約束しろ。岸上って絶対、他のヤツラの前で呼ぶな。」

「・・・分かった。死神さんて呼ぶ。」

「頼むよ。死亡推定時刻まで後10時間くらいだ。それまでそれを通してくれ。」

その言葉は今のウサギには禁句だった。

渋々、了解した彼女のぶーたれた顔が、俺の最後の一言で一気に蒼白になった。

こっちも弱みに付け込んだ卑怯なやり方だったけど、ここは馴れ合いになる訳にはいかない。

俺は氣を引き締める為、彼女に背を向けて海水で濡れたTシャツを雑巾みたいに絞った。

背中に、彼女の視線が痛いほど突き刺さる。

少し可哀相になった俺は、氣を取り直して彼女の方を振り返った。

そこには俺の背中をバカみたいに見つめている、執行猶予を告げられた憐れなウサギがいた。

「ねえ、あんたの部屋貸してくれないかな？俺は主催者だから部屋取ってないんだ。コインランドリーくらいあるだろうから、服乾くまで部屋で浴衣貸してくれよ。」

冗談で提案してみた俺に、ウサギは真っ赤になって、お約束通りの反応を返してくれる。

「や、やだよ！何で死の際にあんたと同じ部屋で一緒に過ごさなきゃなんないのよ！」

「だって、水かけたのはあんただろ？俺に濡れたままでもいいのか？」

「他の人に言えはいじゃない！あ、あのネオさんとか・・・」

「あいつは苦手だ。それに俺も男だし、トウが立ってても女の部屋の方がいい。」

眉間に皺寄せ、真剣に考えているウサギを見て、俺はまた可笑しくなる。

まさか、本気でバージンあげちゃおうかなんて考えてるんじゃないだろうな・・・。

それはそれで、拒まないけど。

やがて彼女は仕方ない口振りで、でも、相当の決心をしたように俺を見上げた。

「いいわよ。責任は取るわよ。でも、服が乾くまでだからね。」

「了解！お礼に相手しようか？」

「・・・何の？」

「男に飢えてるんでしょ？」

刹那、飛んできた強烈なウサギパンチに俺はノックアウトされて、飛沫を上げて海の中にダウンする。

それでいいよ。

あんたはこの方が似合ってる。

彼女に見られないように俺は苦笑した。

反逆 1

グッシヨリ濡れたTシャツを再び被って、俺はウサギと一緒にホテルのロビーに入った。

フロントのいつもの女が濡れ鼠になった俺を露骨に嫌な顔で睨んでいる。

気が付いたら、俺の歩いた後には点々と水溜りができていて、誰か掃除するのか考えたらちよつと気の毒な状況だ。

男と一緒にホテルに入るのを見られるのが恥ずかしいのか、ウサギはノロノロついていく俺を振り返りもせず、エレベーターに向かって突進していく。

フロントの女がこちらをじっと見ているのが、気になって仕方ないんだろう。

ラブホじゃないんだから、気にしなくてもいいのに。

でも、これがこのウサギの生真面目さなんだろうと思うと、俺はまた可笑しくなった。

エレベーターが三階に来た所で、俺達は降りた。

ウサギはキョロキョロ辺りを見回しながら、部屋に向かって歩いていく。

俺もその後を、濡れた靴でベタベタ足音を立てながらついて行った。

半ば、強引に部屋まで押しかける事になったものの、何をするという訳でもない。

強いて言えば、このウサギの意志を確かめたかったのだ。

もし、こいつがはっきりと「死にたくない」って言ったら、俺は行動に移すつもりだった。

それは、根尾にとっては「反逆」になる行為になるのは勿論、自覚していた。

ウサギが部屋のドアを開けるや否や、俺は中に飛び込み、クローゼットを勝手に開けると、浴衣を引っ張り出してバスルームに直行した。

このホテルに滞在期間の長い俺は、内部の構造をあらかじめ理解していた。

尤も、宿泊しているのはスイートで、一般の部屋とは違ったけど、基本構造は似たようなものだ。

シャワーを浴びて、勝手に拝借した浴衣で部屋に出てみると、ウサギはソファにもたれてボンヤリと海を眺めていた。

昔のことを考えて、たそがれてる顔だ。

濡れた頭をガシガシ拭いていると、俺に気が付いた彼女が振り返った。

目が合った途端に慌てて視線を逸らしたのを見て、俺は先に言うてやる。

「怖いモノ見たさだろ？ 見たけりゃ見れば？」

意地悪のつもりで言ったセリフだったのに、ウサギは本当にまじまじと俺を見つめた。

その真剣な表情に、言った俺の方が恥ずかしくなる。

黒目勝ちな瞳で真っ直ぐに見つめるウサギは、案外かわいくて、俺は少し動揺した。

照れ隠しに、彼女の座ってる反対側のソファに腰を下ろすと、俺はこれからの予定を聞いてみた。
何にもしなさそうなのは、分かっていたけどリップサービスだ。

「・・・何もしないよ。ここで海見てる。他の人たちも自分の部屋に籠っちゃったんでしょ？なんか、集団で来た意味がなかったわ。」

案の定、つまらなさそうにウサギは溜息交じりに言った。

・・・なるほど。

集団自殺に団結力を求めているのか。

次回があったら、これは参考にするべきだ。

皆が引き籠ったら、志願者がつまらなくて帰ってしまう可能性は高いつてことだ。

今後の参考に、俺はもう一つ、個人的に疑問を持っていることを聞いてみる。

「・・・そうだね。どうして一人で死ななかったの？」

俺の問いかけに、彼女は少し黙って考え込んだ。

しばしの沈黙の後、ゆっくり口を開いた。

まるで、自分でも今、気付いたかのように。

「死んだ事ないから自殺するのが怖かった、と思う。きっと、私と同じ思いの人が一緒にいれば、心強いと思って・・・。でも、ちょっと後悔してる。これから死ぬ人たちと今更仲良くなったって、意味がないことに気が付いた。」

「・・・そう。でも、ちょっと遅かったね。」

「・・・遅いよね。」

「そうだね。生きたくなった？」

俺は最後の質問をしてから、ウサギの答えを待った。

こいつの口から、直接聞きたかった。

一言だけ、『生きたい』って。

俺が根尾の信頼を裏切る価値があるのかどうか、彼女の口からその言葉を聞きたかった。

ウサギは黙ったまま、返事をしない。

生きたいけど、彼女には生きて帰る場所がないんだろう。

だからと言って死ぬのはあまりにも短絡的だ。

でも、俺の口からそこまでは、この時点では言う訳にはいかなかった。

「・・・夕食は7時から地下のレストランで。時間厳守でお願いしますね、うさぎさん。」

黙ったまま俯いてるウサギに、俺はそれだけ言うソファから立ち上がった。

どうして一言、生きたいって言えねえんだよ・・・！

苛立ちを隠せなかった俺は、その時、冷たい言い方をしていたに違いない。

濡れた自分の服をかき集めて、俺はドアに手をかける。

ウサギはさすがな目で、部屋を出て行く俺を見つめていた。



ウサギの部屋から拝借した浴衣姿のまま、俺はバタバタと最上階へ向った。

そこには根尾が待機している筈だ。

新しい部屋の鍵を渡したのは、ウサギと院長としずちゃんだけで、根尾にはいつものスイートルームの鍵を

渡していたのだ。

万が一、ウサギが長期滞在しているスイートの存在に気が付いたらマズイって俺は反対したけど、根尾は準備するものがあると言って、どうしても自宅兼のスイートに戻りたがったのだ。

今となっては、着替えを取りに帰れるという特典があったので、認めざるを得ないけど。

今朝、根尾と連れ立って出てきたスイートルームの前で、俺はインターホンを押した。

「開いてるよ」

中から根尾の声がしたのを確認して、俺はドアをそっと開ける。

海が見える窓際のテラスに設置してあるソファとテーブル。

いつもはしずちゃんの特等席のその場所で、根尾は銀色のケースに入った医療器具を出したり仕舞ったり

している所だった。

ビンに入った怪しげな液体は、俺には毒薬としか思えない。

もう後戻りするつもりはないんだ・・・。

いつもと同じ飄々とした顔で注射針なんかをチェックしている根尾

に、俺は背筋が寒くなった。

俺がこれからしようとしている事に対しての疾しさが、寒気に拍車をかけていることは自覚していた。

俺が浴衣姿で、バカみたいにドアの前で突っ立てるのを見て、根尾は眼鏡の奥の目を細めた。

いつもと同じ、呑気な根尾に見えた。

ヤツはニヤッと笑って、俺の全身を嘗め回すように見つめる。

何を勘違いしたのかは、俺にもすぐに分かった。

「最後の思い出を作ってあげたのか、死神クン？」

「・・・言うと思った。でも、違うよ。海で服濡らしたから、浴衣借りただけだ。」

「・・・ふーん。でも、結構、親密になってるじゃないか。まんざらでもないんだろう？」

「・・・よせよ、バカバカしい。」

一応、反論はしたけど、根尾はニヤニヤしながら俺を眺めている。

俺が何か言いたげなのを、察知しているに違いない。

いや、根尾が何かを言いたいのか・・・。

常識外れのクセに妙に察しがいい男だ。

こいつに隠し立てはできない事が分かっていた俺は、観念して両手を上げた。

根尾も、俺に応えるかのように手に持っていた器具をケースに戻すと、腕を組んで俺を見据えた。

彫りの深い顔立ちに緑がかった瞳が、今、まっすぐ俺を見つめている。

スラリとした立ち姿の根尾が正面から俺を見ると、ちょうど視線が

同じ位置でぶつかる。

気迫負けしそうで、俺の心臓がバクバク音を立て始めた。
こいつをこんなに怖いと思ったのは、初めてだ。

しばらく睨みあった後、俺は意を決して口を開いた。

「根尾さん、あの子はダメだ。俺はあの子を殺したくない・・・！」

反逆 2

意を決して放った俺の言葉に、根尾は驚きもせず薄笑いを浮かべた。まるで俺がそう言い出すのを知っていたかのように。その落ち着いた表情が逆に俺には恐ろしかった。

「そう言い出すと思ってたよ。計画の途中で怖気づくのはよくある話だ。特に君みたいな優しい男はね。でも、一言訂正させてもらうと、君が殺すんじゃない。彼女が勝手に死ぬんだ。僕らは手を下さないからな。そこは勘違いしないでくれ。」

根尾は子供に言い聞かせるような抑揚をつけた話し振りで言うと、俺を見据えてニヤリと笑う。

もう既に狂ってるんじゃないかっていう根尾の落ち着きぶりに、俺は完全にビビりながらも必死で言い返そうと試みる。

「彼女・・・ウサギさんは本当は死にたくないんだ。今、話してみて分かった。ちょっとヤケになって興味半分で応募してしまっただけなんだ。あの子が死んだら、俺は後悔する・・・。」

「落ち着けよ、岸上君。」

少しボリュームを上げた根尾の声に遮られて、俺は黙って唇を噛んだ。

あーあ、と溜息を付きながら根尾はウンザリした表情で宙を仰ぐ。こんな時までカッコつけるのを忘れないのが、コイツらしいところだ。

「そんな事を見れば分かるさ。あれは死ぬようなタイプじゃない。さっきも話してたけど、今までの人生で経験しなかった挫折に遭遇

して自暴自棄になってるだけだ。だけど、それが何だ？僕らが集まったのは自殺志願者の人生相談じゃない。立ち直らせたいならNPの団体を立ち上げた方がマシだ。僕らが欲しいのは生きてる彼女じゃなく、死体なんだよ。」

言い返す術もない。

根尾の言う事は正論だ。

この期に及んで、覚悟のない俺が甘ちゃんなんだ。

「・・・分かってる。でも、まだ次回もあるだろ？あの子じゃなくてもいいじゃないか。次に本物の志願者が来たら俺はもう何も言わない。適合するかどうかも検査してみないと分からないだろ？今回は見逃してくれないか・・・。」

「断わる！」

俺の懇願を根尾は一刀両断に拒否した。

その表情はもう笑ってはいない。

彼はゆっくりと俺の方に向かって歩いてくると、完全に俺の間合いに入った位置でピタリと止まる。

ビリっとしたその緊張感に俺も思わず身構えた。

「君の言う通り、あの子である必要はないし今回はまだ初回だ。だからこそ、僕は今回だけは決行する。これからこの計画は続いていくんだ。初回で君の決意を見せて貰わないと、今後、信頼関係を持つことが困難になるからな。」

「・・・あの子を踏み絵にしろっていうことか？俺はキリシタンかよ？」

「そう思って貰ってもいいさ。決意表明の儀式だ。」

「もし、死んだ後、適合しなかったらどうする？」

「構わないよ。遺体は太平洋で水葬だと言っただろう？」

「・・・ざけんな。こんな計画、すぐに足がつくぞ。刑事事件になつたら芋蔓式に逮捕だ。」

「そんな事は最初から計画済みだ。岸上君、君は本当に分かってないな・・・。」

根尾は更に近づくと、俺の浴衣の襟をグッと握って自分の顔の前に引き寄せた。

綺麗な顔立ちのヤツが本気で狂気に駆られると、どれだけ凄みを持つものなのか思い知らされる。

白い顔が紅潮して、緑がかった黒い瞳が怒りで潤んでキラキラしている。

身の危険も忘れて、俺は一瞬、その美しさに見とれてしまった。

「言った事があつただろう？僕は自分が生きる事には執着していないんだ。ぼくが死んで、彼女に心臓を提供できれば、とくにそうしている。だが、残念ながら僕では駄目なんだよ。彼女が生きる為に人が死んでも僕は気にしないし、その為に自分がどうなるうが、僕は構わないんだ。」

「じゃ、言わせて貰うけど、彼女の気持ちはどうなんだよ。自分の旦那と父親が殺した女の心臓を移植されたら彼女は嬉しいか？あんたは移植する側だからそう思うんだ。俺みたいにされる側になって考えてみるよ。」

「する側の気持ちは分かったように言って貰いたくないね！」

その瞬間、ものすごいパンチが俺の左頬を直撃した。

襟を掴まれて身動きのできなかった俺は、不意打ちの一発をモロに喰らい、一瞬、意識が飛んだ。

思わず、その場にへたり込んだ俺を、根尾はまだ放そうとしない。再び、ヤツに引き摺られるように立たされた時、やっと殴られたと気が付いた。

「君には分からないよ。自分を提供してまで生きて欲しい人間に会ったことがないだろう？君が甘えてるのは、自分の事だからだよ。人を守りたいなんて思った事がない君には、僕らの気持ちなんて分からないんだ！」

激しい口調で、根尾は俺を引き摺り上げながら吐き出す。

こんなに感情的な根尾は初めて見た。

でも、いつもは事なかれ主義の俺も、この時ばかりは今だかつてないほど熱くなっていた。

彼女を助けたかった？

いや、それ以上に俺は根尾を止めたかったのだ。

「そんなのは、あんたの自己満足だ。そんな身勝手な犠牲精神で彼女が喜ぶと思ってるのか？分かってないのはあんただよ！」

根尾の綺麗な顔に、俺は反撃の一撃を食らわせた。

反逆 3

俺の渾身の一撃を食らったかに見えた根尾は、間一髪、顔を逸らして直撃を免れた。

ヤツの眼鏡だけが、吹っ飛ばされて部屋の隅に転がっていく。

ノックアウトを想定していた俺は、根尾の意外な身のこなしに目を見張った。

完全に俺のパンチを見切った動作だ。

当然、ヤツの反撃はそれだけでは終わらなかった。

顔を掠って飛んできた俺の右の拳を、根尾は空いてる手でグイッと掴むと己の体を反転させながら床に片膝を付く。

その間、僅か1秒。

俺は何をされてるのか把握する間もなく、根尾の動きに合わせて後方に反転しながら吹っ飛ばされた。

飛ばされるその瞬間、根尾が掴んでる俺の右手の間接がバキバキッと嫌な音を立てた。

ドー・・・ンという地響きと共に、俺の体は仰向けの体勢で根尾の真後ろの床に叩きつけられた。

後頭部をしこたま打ったその瞬間、目の前に火花が散る。

見えない方の目にも火花が散るんだから、不思議なものだ。

「僕はこれでも体育会系でね。どうしても僕を止めたければ、叩きのめしてくれても構わないよ。君の命の保障もしないけど。」

仰向けでひっくり返っている俺の上から、根尾は冷たい視線を落とす。

・・・っ、強ええ・・・。

歯が立たない事はすぐに分かった。

もはや、訓練された戦闘能力だ。

顔に手をやると、最初のパンチで切れた口から血が出ている。

歯が折れてないだけマシだろう。

「あんた、なんか・・・やってたのか？」

切れ切れに問いかける俺に、ヤツはニヤリと笑った。

「合気道部の主将を高校大学と努めていただけだ。子供の頃は少年空手。人は見かけによらないだろ？」

「・・・似合わねえの。インテリはテニスサークルでもやっつけよ。」

「それは当然やってたさ。君は何かやってたのか？」

「・・・俺は柔道部だよ！」

そう怒鳴ったと同時に俺は立ち上がりざま、目の前で仁王立ちになっているヤツの長い足にタックルした。

慌てて逃げようと後ずさるヤツの足に俺は更なる足払いを掛け、ヤツを床に押し倒す。

このまま、寝技だ！

と、思った瞬間、俺の腹に根尾の片足が突き刺さった。

俺の体はその足にぶっ飛ばされ、根尾の体を飛び越えると、さっきまで俺が立ち竦んでいた入り口のドアに激突した。

巴投げかよ・・・。

それは俺の十八番だったのに。

完全に格の違いを見せ付けられた。

ドアにズルズルともたれながら、俺はせめてもの抵抗をしようと、

ヤツの顔を睨みつける。

ゆっくりと根尾は近づいてくると、はだけてボロ布みたいになっている浴衣の両襟を合わせて掴むと、俺を持ち上げてドアにダン！と叩き付けた。

眩暈でクラクラして、切れた口の中は血の味が広がる。

だが、気力で負けた俺は、ヤツのされるがままになっているしかなかった。

「柔道は接近戦なら有効だけど、その前に僕の間合いに入らなければならぬからね。残念だな。」

汗一つかかず、根尾は涼しい顔でサラリと言った。

「・・・うるせえ。裏切り者を殺すのか？だったら、俺の肺はしずかちゃんにくれてやる。けど、心臓はてめえにはやらねえからな！」

精一杯、威勢を張った俺を見て、根尾はニヤリと笑った。

「殺さないよ。僕らは運命共同体だろう？だけど、君がバックレないように細工をさせて貰う。」

「・・・細工？」

俺が首を傾げたその瞬間、腹にもものすごい痛みというか熱さというか、とにかく立ってられないほどのショックがきた。

突然のその衝撃に一瞬、呼吸ができなくなり、俺は思わず膝をついて床に崩れ落ちる。

跪いた低い視線の先に、黒いバリカンのようなものを握っている根尾の左手があった。

「・・・おい、これ・・・。」

「ただの防犯用スタンガンだよ。攻撃仕様に少々改造してあるけど、死ぬ事はない。」

「は、反則だろ、お、おい、なに・・・」

根尾は全く悪びれる事なく、呂律も回らなくなった俺の体をズルズルとベッドに引き摺っていった。

完全に脱力している俺を、モノを扱うようにベッドの上に転がすとかろうじて体に纏わり付いていた浴衣を引っ剥がした。

完全無防備な裸体でベッドに転がされたまま、それでも今の衝撃でまともに動くこともできない。

まな板の鯉とはこの事だ。

根尾は俺を転がしたままテラスに戻ると、さっきまで弄っていた銀色のケースの中から大きめの注射器を取り出した。

そして、クローゼットに引っ掛かっているハンガーにぶら下っているネクタイを一本、スルリと引っ張り手にする。

俺は、見える方の右目で注射器とネクタイを手にしたヤツがゆっくりと近寄って来るのを呆然と見ていた。

咄嗟に頭に浮かんだのが覚せい剤だ。

俺をシャブ漬けにして、監禁するつもりか。

目を閉じて観念していた俺は、根尾の手によって乱暴にひっくり返された。

うつ伏せに寝かされた俺の両手を根尾はネクタイで縛り上げる。

想像するのもおぞましいことをされるのを、俺は覚悟した。

「・・・あ、悪趣味だな。シャブ漬けにしてからSMかよ。ヤクなんて使わなくても、リクエストしてくれたら、いつでも応じたのに。」

必死に悪態をつく俺に、根尾は優しく笑みを見せた。
さっきまでの鬼のような冷気が嘘のような暖かい眼差しに、些か拍
子抜ける。

「そうか。じゃ、次回はリクエストするよ。残念ながら、これは君
が想像しているモノではないんだ。」

「・・・？」

「飼い犬や飼い猫が迷子になっても発見しやすいように、体内に埋
め込むマイクロチップって聞いたことがあるか？」

「・・・は？」

「海外では保護観察期間の罪人には使用しているらしいね。国内生
産はされてないから、これは直輸入した人体仕様だ。これが体内に
埋め込まれれば、僕のパソコンから君がどこにいるのか常に把握で
きるという訳さ。」

根尾は優しく説明しながら、俺の後頭部にそっと手を置きマットに
押し付ける。

冗談じゃない！

俺はネコじゃない！

痺れて動かない体で、俺はジタバタと無駄な抵抗を続けた。

左手で俺の頭を抑えたまま、根尾は空いてる方の手で注射針を俺の
肩甲骨の間に挿し込んだ。

幸か不幸か、完全に痺れの回った背中では既に神経が麻痺していて、
痛みも異物感も全く感じずにコトは済んだ。

根尾が申し訳なさそうに呟いてるのを、俺はマグロのように横たわ
ったまま聞いていた。

「君を放したくないんだ。今回は君は休んでいい。マイクロチップと一緒に睡眠効果のある麻酔も打ったから、ウサギさんのツアアが終了するまでここで眠っててくれ。ただし、逃げても無駄なことは分かってるだろう？」

「バ、バカヤロ・・・そ、そんなこと、しなくても・・・、オレ・・・」

・・・俺はあんたの傍にいたよ。

最後の一言を言う前に、俺の意識は急激に薄れていった。

奪回 1



夢を見ていた。

俺は名古屋の実家にいた。

夕方目覚めて、暗くなってからノロノロと出勤する俺を母親がチラリと横目で睨んで溜息をつく。

親父は新聞で顔を隠して、こっちを振り向きもしない。

入れ違いに里帰りしていた弟が、明るい顔で玄関から入ってくる。

ただいまうなんて、デカイ声出しやがって。

呼ばれても返事もしない長男と、対照的すぎるだろ。

一緒についてきた彼女が俺を見て、恐々会釈する。

出て行く俺の背中に、弟と彼女を囲んで母親の笑い声が響いてくる。

何に不自由してた訳でもなく、虐待されてきた訳でもない。

それなりに親としての勤めは果たしてくれた。

でも、いつも俺はとてつもなく孤独だった。

家を出た俺の前に一本の道があった。

道の反対側の家から、俺と同じように出てきた女がいる。

冴えない顔で溜息をつきながら、背中を丸めてノロノロ歩いてくる。

ああ、こいつも居場所がないんだな。

何故か俺はその女を知っている。

ナンだっけ。

この女の名前……。

俺はすごく大事なことをしなければならぬ筈だったのに……。

不思議な事に俺はそこで目覚めた。

薄目を開いて、しばらくぼんやり天井を眺めていたが、思考回路が働かない。

真っ暗になった部屋のベッドで、俺は素っ裸のまま眠っていたようだ。

体が異常に重くて、起き上がろうにも手足がまず動かなかった。

手が動かないのは両腕を縛り上げているネクタイのせいだったことはすぐに気が付いた。

落ち着け……。

思い出せ、俺。

俺にはするべき事があつた筈だ。

靄^{もや}のかかった頭から必死で記憶の断片をかき集めようと、俺は試みていた。

両手を拘束しているネクタイの結び目を歯を使って緩めると、意外にもあっさり解けた。

体を起こそうと、自由になった右手をマットについた時、すごい激痛が走って、俺は再びベッドに崩れ落ちる。

力が入らないところを見ると、肘が脱臼しているらしい。

左手で支えながら、肘から下を何度か上下させて、やっと定位置に戻した。

靱帯が伸びてるかもしれないが、取り合えず、これで動くことはできる。

幸か不幸か、この激痛のお陰で、俺の頭は急激に働き始めた。

それと同時に襲ってくる酷い頭痛と吐き気に、俺は我慢できなくなり、よろめきながらベッドを下りて洗面所に向った。
とにかく頭が痛い。

動く度に吐き気を伴う強烈な痛みに、俺は何度も洗面所のシンクに向って嘔吐を続けた。

胃の中の物が殆んど外に出て、胃液が出始めた頃、俺の頭の中を覆っていた靄もやが少しづつ晴れていった。

水道の水で顔と口を洗い、手ですくいながらその水を飲むと、空っぽになった胃の中に冷たい水がどんどん流れ込んでくる。
体の中から、やっと薬が抜けたのを感じた。

・・・俺は根尾に殴られて、マイクロチップと一緒に薬を打たれて、ここに放置されて・・・。

そうだ、ヤツを止めなければ・・・！

やっと、大事な事を思い出して、俺は時計を見た。

8時になっている。

確か、レストランに集合は7時だった筈だ。

下手すりゃ、処刑は執行されてるかもしれない。

俺は真っ青になって、洗面所をよろめきながら後にした。

いくらなんでも裸で出て行く訳にはいかなくて、まず、部屋の隅に纏めて放置したあった俺のスポーツバッグのもとに行く。

少ない俺の手荷物の中から、下着とTシャツとジーンズを引っ張り出して、脱臼した腕を庇いながら、できる限り慌てて着込んだ。

部屋を出る前に、俺はキッチンに入って木製の鞆のついた果物ナイフを拝借した。

根尾と直接対決になった時、素手では敵わない事は思い知らされた

し、第一、あのスタンガンを携帯したら俺に勝ち目はない。

このくらいのハンデは認めてもらってもいいだろう。

そして、まだ床に散らばっている俺の海で濡れた服。

ポケットの中をさばくってみると、濡れたタバコの箱と一緒に、朝、
運転してきたアルファードのキーがそのまま入っている。

これは必ず必要になる。

思いがけない幸運に、俺は少し自信を持った。

神様がウサギを助ける為に応援してくれているに違いない。

何としても根尾を止める。

気合を入れるため、俺は深呼吸してから部屋を出た。



エレベーターで地下一階まで一気に下降して、ドアが開くと同時に
外に飛び出した。

自分では飛び出したつもりだったけど、まだ薬の副作用が残る体は
コントロールできなくて、実際にはよろめきながら転がるようにエ
レベーターから降りた。

俺も集合する予定だった純和風のレストランに辿り着いた時、中か
ら根尾の声が聞こえた。

かなりボリュームの上がった声の調子で、アイツがアルコールに手
を出したんだとすぐ分かる。

「いいじゃない？ 最期に若いもの同士、いい思い出作ってから逝く
のも。彼は来るもの拒まずな感じに見えるけど？ 役不足かな？」

・・・何だと？

来るものは拒まないけど、役不足とはなんだ。

俺がいないと思って言いたい放題言ってる根尾に、カチンときた。
そこにテンションの上がったウサギの声が響いてくる。

「な、何の話ですか！私はそんなに軽い女じゃありません！」

「ハハハ・・・かわいいな、ウサギさん。あなたに誘われたら、死神クン大喜びですよ。彼、案外イケメンなんだよ。目が怖いけどね。」

・・・案外って言ったな、あのやろう・・・。

誘われたら大喜びって、飢えた非モテ男扱いしやがって。

何気に悪口を言われているのはともかく、ウサギがまだ絶好調で飲み会を楽しんでるのが聞き取れて、俺はほっとした。

きっと、これから車で練炭自殺に誘導するに違いない。

先回りして、駐車場で待ち伏せした方がチャンスがある。

そう思った俺がくると方向転換した時、再び根尾の声がした。

「ウサギさん・・・ウサギさん・・・？」

問いかける根尾の声にウサギの返答はなかった。

事態が急変したのを察知して、俺はレストランの中に飛び込んだ。

そこには真っ赤な顔で、薄目をゆっくり閉じていくウサギが横たわっていた。

奪回 2

ウサギがゴロンとこつちを向いて倒れているのを、俺は半分空いた襖から見ていた。

閉じかけてた目がこつちを確かに見てて、視線が合ったような気がした。

幸い、他のメンバーからは俺の位置は死角になっていて、まだ気付かれていない。

俺は襖に身を隠しながら、中の様子を伺った。

ひっくり返っているウサギが真っ赤な顔をしている所を見ると、アルコールの中にクスリを混ぜたに違いない。

人道的モラルの全くない根尾らしい手段だ。
攻撃仕様の改造スタンガンやら、罪人用マイクロチップやら、医者とは思えないコレクションの数々を身をもって体験した俺には何の不思議もなかった。

根尾ってそういうヤツだ。

そこが俺は結構好きだったんだけど。

やがて、根尾の声が襖の向こうから聞こえてきて、俺は慌てて耳をそばだてる。

「院長、これで彼女は明日まで昏睡状態です。このまま病棟に搬入して適合検査をします。いい結果であつたら、そのまま瑞穂の手術に入りますので・・・。」

「分かった。だが、このまま運ぶ訳にはいかないだろう。病棟まで運ぶのに担架を持ってこないと……。」

「確か、非常用担架が非常口付近に常備されてる筈ですよ。」

「じゃ、そこから始めよう。やれやれ、岸上君がいればな……。彼、案外肉体労働者なんだよ。運ぶの手伝って貰いたかったな。」

「……岸上君はもう来ないんですか？」

「今日はね。彼にも同じ睡眠薬を打っておいたから、多分明日までダウンしてる筈だ……。」

襖の向こうでヤツラが立ち上がる気配を感じて、俺は慌ててレストランを飛び出した。

さっきの会話によると、ウサギはまだ死んではない。

根尾はやっぱり、生きたまま移植に踏み切るつもりだ。

自殺するまで待つなんて器用なマネ、せっかちな根尾にできるわけではない。

そうでなくても、ヤツの奥さんの命のタイムリミットは刻一刻と迫っている。

悠長なことをしている余裕は無い筈だ。

体は大分動くようになってきたものの、そうすると今度は今まで感じなかった痛みが全身に広がり始めた。

特に脱臼して無理矢理嵌め直した腕の関節は、歩く度にグラグラして力が入らない。

最初のパンチを食らった顔の左半分も熱を持ち始めて、見えない左目と合わせて四谷怪談みたいになってるに違いない。

俺はヤツラに気付かれないように、敢えて非常階段でフロントのあ

る一階まで歩いて昇って行った。

だっ広いホテルのロビーには人っ子一人いなかった。

いつもフロントで澄ましている女も人払いされたんだろう。

姿が見えない。

ガランとしたロビーを俺は足早に抜けて、ホテルの外に出た。

外は既に真っ暗で、出た途端に潮の香りが鼻をつく。

海鳴りが遠くで響いて、満点の星空が広がっている。

いい夜だ。

俺の人生最期の思い出を作るのには申し分ないシチュエーションに
思えた。

ホテルのエントランスを囲むように南国系の樹木とツツジが等間隔
に植えられている花壇があつて、俺はその茂みに身を隠して座り込
んだ。

あいつら、絶対、ウサギを担架に乗せてここまでやってくる。

チャンスはそこしかない。

俺は祈るような気持ちで、星が瞬く空を見上げた。



どのくらい待っただろうか。

長かったような、短かったような。

時計を持ってなかったので実際には分からないが、体中負傷してい

る俺には長い時間に思えた。

しゃがみ込んだ姿勢にも疲れてきた頃、ホテルの中から人が歩いてくる気配がした。

先頭を歩く根尾の姿がエントランスに見えた時、俺は息をひそめて茂みの中で体を丸めた。

根尾が先頭で、その後ろを担架の反対側を支える小笠原院長が続く。下方にボコッと膨らんだ担架の中身は横たわっているウサギに間違いない。

その担架に付き添うように、しずかちゃんが並んで歩いていく。

奇妙な行列が俺の目の前を過ぎる時、ヤツラの話し声が聞こえた。

「このまま、病院まで歩きましょう。アルファードのキーは、部屋で寝てる岸上君が持ってるんですよ。」

「キーなら私がスペアを持っている。ここから病棟まで500mはあるだろう。結構、窓から外を見ている入院患者は多いんだ。見られるとまずい事になる。車で運ぶぞ。」

「さすが、院長！じゃ、そうしましょう。僕は、肉体労働に向いていませんしね。」

根尾がヘラヘラ笑いながら調子のいい事を言ってるのが聞こえて、俺は呆れた。

さっきは、体育会系だって言ってたクセに。

だが、俺に追い風が吹いてきたのは間違いない。

俺は、担架を御神輿みたいに運んでいく三人の後について歩き出した。

アルファードは朝、俺が止めたのと同じ位置で止まっていた。
ヤツラは後部座席を開けて、ウサギを押し込もうと三人で担ぎ上げている。

俺はその間に、運転席側の車の陰に身を潜めた。

三人とも慣れない仕事でテンパッているに違いない。

ウサギの搬入に集中するあまり、車の反対側にまで気が回らないんだろう。

やがて、三人はウサギを二列目座席に寝かすことに成功した。
そこに付き添うように、しずかちゃんが車に乗り込む。

根尾が運転して、院長が助手席に座るつもりだったんだろう。

しずかちゃんが乗ったところで、根尾は後部座席のドアをゆっくり閉めた。

俺が待っていたのはこの瞬間だった。

後部座席のドアが閉まると同時に、俺は渾身の力で運転席のドアを開けて素早く飛び乗る。

ハンドルを握り締め、既に手に用意していたキーを差込み反転させると、アクセルを思いっきり踏み込んだ。

逃走 1

急発進したアルファードは後部座席に座っていたしずかちゃんを横倒しにして、駐車場を飛び出した。

せっかくのハイブリッド低燃費も意味がないくらい、俺はアクセルを踏み続ける。

ミラー越しに、駐車場に取り残された根尾と院長の姿が見えたが、いきなり走り出した車に驚いたのか、二人はただ立ち竦んでいた。

逃げるなら今の内に距離を稼いでおかなければ。

根尾が、まず自分の車のキーとノートパソコンを取りに部屋まで戻ることを、俺は想定していた。

せっかく人の体に埋め込んだマイクロチップをやツが使わない筈はない。

それを目印にヤツらはすぐに追いかけてくるだろう。
捕まる前に、この街を出てウサギを解放しなければ。

「き、岸上くん？ どういうこと！？ どうしてここにいますか！？」

運転席のシートにしがみ付きながら、しずかちゃんが俺の背中に悲鳴のような声で叫んだ。

ミラーでチラリと見ると、不安を隠せない顔のしずかちゃんと目が合った。

結果的に俺は彼女も裏切った事になるんだ。

でも、その時、俺には新たな覚悟ができていた。

この計画を終わらせ、根尾の奥さんもしずかちゃんの娘も助かって、ウサギも解放する唯一の方法を、俺は実行しようとしていた。

「ごめん、しずかちゃん。俺はやっぱりできない。今からこのウサギを街中まで連れて行って解放する。その時、しずかちゃんも一緒に降りてもらう。」

「ど、どうして？今更、急に怖くなったの？」

しずかちゃんは少し責めるような口振りで問いかける。

無理もない。

いきなり初回で俺がリタイアしたら、今までの準備も苦労も水の泡だ。

それについては、俺は素直に悪いと思った。

「・・・謝るよ。俺が甘かった。でも、怖くなったのは殺す事だけじゃないんだ。殺された人間の臓器を移植される詩織ちゃんが可哀相だと思ったのと、あとは、しずかちゃんと根尾さんに犯罪者になって欲しくないんだ。」

俺の言葉にしずかちゃんは黙り込んだ。

自分の気持ちを伝えるのは苦手だったけど、俺は彼女だけには理解して欲しくて懸命に言葉を探した。

「・・・根尾さんにね、俺にはあなたたちの気持ちは分からないって言われたんだ。自分を提供するほど大切な人間がいないからだって。でも、俺ね、大切な人いたんだよ。しずかちゃんと根尾さんの為なら、俺はどうなってもいいくらい、二人が大切なんだ。」

「な、何言ってるの？」

しずかちゃんの声が少し高くなった。

今すぐ彼女の細い体を抱き締めたい衝動に駆られながら、俺はハンドルを握り締める。

「・・・しずかちゃんが娘の為に殺人までできるように、俺もしずかちゃんの為に、どんなことをしてもこの計画を止める。詩織ちゃんを残して刑務所入りたくないだろ？」

「そ、そんなこと、とっくに考えてます！そのくらいの覚悟があったから私達は始めたのよ！」

「でも、詩織ちゃんは望んでない。俺だって、しずかちゃんが手を汚すくらいなら目なんか要らないよ。」

ミラー越しに見るしずかちゃんは激昂して、既に泣き顔になっていた。

女の涙に弱い俺の胸がギュッと締め付けられる。

「じゃ、じゃあ、あの子がこのまま弱って死ぬのを待ってろって言うの？私は弱っていくあの子をもう見ていられないから、この方法を選んだのよ！あなたに私の気持ちが分かるの？」

「・・・だからさ、俺の使ってよ。」

「え？」

車は、朝来る時に通った畑の一本道をひた走っている。

あと、15分も走れば住宅地に出る筈だ。

しずかちゃんが乗ってきたことは誤算だったが、こうなって寧ろ都合が良くなった。

俺は軽く深呼吸して、話を続けた。

「これから住宅地に出たら、最初に見つけた交番にしずかちゃんとウサギさんを置いていくよ。」

そこで、自殺サイトに応募したら主催者の死神っていう男にクスリ飲まされて、強姦されかけて逃げてきたって言って欲しい。今回のウサギの誘拐は俺の単独犯行にして欲しいんだ。勿論、根尾も楽園会も関係ない。

名古屋在住の岸上っていうフリーターが、自殺サイトで女を釣ってやろうとしてた。

それだけのことだ。」

「一人で罪を被るつもり？その後、あなたはどうするの？」

本気で心配してくれてるしずかちゃんがミラーに映って、思わず表情が緩んでしまう。

この人に会えて本当に良かった。

愛してもらえて良かった。

そう思って、俺の胸が少し温かくなった。

「俺の体にね、マイクロチップが入ってるんだ。根尾さんは俺がどこにいてもすぐに駆けつけてくれる筈だ。

だから心配しなくていいよ。万が一、行方が分からなくなっても、腕に刺青のある死体が俺だ。探しやすいだろう？」

的を得ない俺の回答に、しずかちゃんは半ばパニックになってヒステリックに叫んだ。

「意味が分からない！何なの？マイクロチップって・・・岸上君、何するつもりなの？ちゃんと説明してよ！」

俺の計画を今、彼女に言うべきかどうか分からなくて、俺は唇を噛んだ。

その間に、彼女は細い体を利用してサイドブレーキを跨いで乗り越え、助手席に乗り移ってきた。

勢いのまま俺の腕にしがみ付いてきて、文字通りハンドルを取られた俺は慌てて急ブレーキをかける。

アルファードは農道に頭を突っ込んで急停車した。

「・・・つぶねえなあ！横転したらどうするんだよ！」

「構いません！私だって今更、自分が死ぬことなんて怖くありません。だから、話して下さい。」

思わず怒鳴った俺に、しずかちゃんは動じもせず、真っ直ぐな瞳で俺を見つめ返した。

敵わないな、この人には。

仕方ない。

惚れた弱みだ。

俺は苦笑して、サイドブレーキを引いた。

「根尾さんは、浜辺で死んだばかりの刺青のある死体を見つけることになる。そいつは自殺サイトの管理人で強姦未遂で逃走中の犯罪者だ。B型だから、すぐに病院に運んで検査して欲しい。うまく適合したら詩織ちゃんと瑞穂さんに移植して。これで事件は解決、計画は成功、全てが丸く収まる筈だ。」

これが俺にできる最良の方法だと思われた。

そこまで言った途端、しずかちゃんの両腕が俺の首に巻きつき、彼女の柔らかい唇で次の言葉が遮られた。

逃走 2

しずかちゃんは俺の首に両腕を巻き付け、しがみ付くように体を預けてくる。

彼女の舌はすぐに俺の唇を割って、それこそ息もできないくらいに深く侵入してきた。

彼女自身が体中に入ってきてそうすごいキスに、俺は戸惑いながらも必死で応えた。

ハードルになっていくサイドブレーキの上から彼女の体を引っ張り上げ、向き合う姿勢で膝の上に抱き上げる。

狭い運転席で俺達は抱き締め合い、何度も唇を重ねた。

籬が外れて制御が効かなくなった俺は、左手で彼女の細い首を支えながら、右手ではもうその体を薄いワンピースの上から愛撫し始めていた。

俺を跨いでいる白い太腿をなぞってスカートの中に侵入した俺の右手は、既に熱を持ち始めた彼女の敏感な部分に到達した。

キスが続ける彼女の呼吸が艶っぽく乱れてきて、その甘い吐息に俺は身震いする。

ワンピースの上から僅かに隆起している胸を咬んでやると、女神のような顔が快樂で泣いてる様に歪んだ。

「もっと見せて……。今日で最後だから……。俺、あなたの事、好きでした。」

湿り気を帯びたその部分を弄りながら、俺は乱れて涙を浮かべている彼女の顔を見つめて、もう一度告白した。

かぶりを振りながら、しずかちゃんは泣き声で言い返す。

「だめ！私達は最後まで一緒だって言ったでしょう？一人で全部被って、一人で死ぬなんて許さない！」

「でも、拉致監禁まではやっちゃったんだよ。このウサギさんが警察にチクったら、根尾さんもあなたも、いや、病院ごと潰れることになる。主催者は俺だ。それを後悔した俺は浜辺で自殺する。それを発見した後、移植すれば誰も悪くならないだろ？適合しなかったら、太平洋に水葬で構わないから・・・。」

「イヤ！そんなのダメ！」

ダダっ子のように泣きながら俺にしがみ付いてくるしずかちゃんが愛しかった。

泣き顔にキスしながら、右手は休むことなく彼女の熱く濡れてきた部分に刺激を与え続ける。

「あ・・・！」

突然、彼女の細い体が弓のように仰け反り、嬌声がその唇から洩れた。

無意識にしなる彼女の体を抱き締め、キスで口を塞ぐ。

ギュっと瞑った彼女の目から享楽の涙がポロポロこぼれ落ちた。

すぐるように俺の首に巻き付いてきた両手に力が入り、背中に彼女の爪が食い込んでくるのを感じる。

その痛みさえも嬉しくて、俺は絶頂に達した彼女を思い切り抱き締めた。

「俺ね、あなた達に愛してもらえて嬉しかった。二人の事守りたいんだよ。だから俺の気の済むようにさせて？」

耳元で囁きながら、俺はぐったり体をもたれさせてくる彼女の頬にもう一度小さなキスをした。

返事はなかった。
その代わりに、俺の首に巻き付けた彼女の腕に力が籠ったのを感じた。



理解は得られても、どうしても納得はして貰えそうもなかった。
だから、今言うべきかどうか迷ってたのに。
黙りこくって、ただポロポロ涙をこぼす彼女を見ていると、やはり言うべきじゃなかったようだ。

しずかちゃんを助手席に座らせたまま、俺は車を再び走らせた。
感情に流されてしまったけど、悠長な事をしている時間はない。
根尾は俺の体内のマイクロチップを目印に追いかけてくる筈だ。
早いとこ、このウサギを俺から離さないと。

走り出したら、案外すぐに住宅街に出た。
この街に馴染みのなかった俺は、交番を探そうとしても時間がかかりそうだったが、ナビで検索しながら車を走らせて、ようやく近くに派出所があるのを発見した。

ウロウロと細い道路を走り回って行く内に、街路樹で囲まれた小さな公園が現われた。

その公園をグルリと一周すると、道路を挟んだ反対側に小さな赤いランプがついた派出所が見えた。

その派出所に俺は車を寄せて、透明のガラス戸越しに中を覗き込む。
あいにく警官は常駐してなくて、机の上にポツンと置かれた電話機があるのみだった。

少なくとも、ここにいれば田舎のヤンキーに暴行される心配はないだろう。

その内に警官も帰ってくるに違いない。

俺はしずかちゃんの方を振り向いて言った。

「ウサギさんと一緒にここで降りて。警官が戻ってきたら、さっき俺が言った通りに説明して欲しい。いいね？」

「・・・お断りします。私はあなたと行きます。」

しずかちゃんは俺の顔を見ようともせず、助手席に座って身じろぎもしない。

淡々と拒否された俺は、頭を掻いた。

時間を無駄にする訳にはいけないので、俺は諦めて一人で運転席から降りた。

車の反対側の後部席のドアを開くと、ゴロンと寝かされたウサギの二本の足が出てくる。

足首を掴んで引っ張り出すと、赤い顔で気持ち良さそうに寝息を立てているウサギの顔が見えた。

生きてるのは確かだ。

しかし、クスリの威力は恐ろしい。

こんな状況で、しかも人がカーセックスやってる後ろで、よくこれだけ眠れるもんだ。

俺は苦笑しながら、ウサギを横抱きにして車から降ろした。

派出所のドアを開けて、壁にくっついて置かれている破れたソファの上にウサギを寝かせた。

ソファは小さくてウサギの膝から下ははみ出してたけど、起きる気配は全くなかった。

スヤスヤ寝息を立てているウサギは、こうして見るとなかなかかわ

いい。

あんまりツいてなかった人生だったみたいだけど、コイツはきっと大丈夫だ。

俺を海に突き飛ばしたあのパワーを思い出して、俺は可笑しくなった。

バイバイ。

あんたと話して、結構楽しかったよ。

柄にもなく俺は心の中で別れを告げてから、そっと派出所のドアを閉めた。

決着 1

運転席に再び戻った俺は、助手席にまっすぐ前を見て座っているし、ずかちゃんの横顔を見た。

横顔が綺麗な人は本物の美人だって、誰かが言ってたのを思い出す。すっと通った鼻筋に形のいい唇が連なり、シャープな顎のラインに続く細い首。

唇を噛んだまま決意を固めたその顔は、テコでも動かないと言わんばかりだ。

俺は降参するしかなかった。

「しずかちゃん、降りないなら一緒に連れてくよ。早くここから離れないと、根尾さんがウサギさんを取り返しに来るかもしれない。」

「そうして下さい。」

「俺、一応死ぬ予定なんだけど？」

「構いません。一緒に行きます。」

「じゃ、俺が死に切れなかったら、介錯してくれる？」

「お断りします！」

キッと切れ長の目を吊り上げて、彼女は俺を睨んだ。

こんな激しく感情を見せてくれるしずかちゃんは初めてだった。

そして、彼女をこんなに愛しく感じたのも。

激しい口調でしずかちゃんは続けた。

「約束して下さい！死ぬなんて言わないで。あなただけに罪を被らせる訳にはいきません。あなたが死ぬ気なら、私達も同罪です。」

「でも、誰かが被らないと、それこそ一蓮托生、全員逮捕されるかもしれないよ。」

「それでもいいの！約束して！私を置いていかないで！」

涙を溜めて懇願するしずかちゃんを見て、不覚にも目頭が熱くなってくる。

俺は観念して、笑みを見せて言った。

「・・・分かった。死なないよ。しずかちゃんを置いていけないしね。」

便宜上、口から出た俺の言葉に、しずかちゃんはやっと落ち着いて、柔らかな表情で笑った。

死にたくないな・・・。
この人と離れたくない。

あつてはならない思いが頭をよぎる。
せっかく固まっていた決心がブレ始めて、俺は思いを振り切るように前方を向いてエンジンをかけた。

見えないのが左目で良かった。
助手席にいる彼女の泣き顔が、俺の視界に入らないことがありがたかった。



ナビの液晶のデジタル時計は、深夜3時になっていた。

俺は今来た道をひたすら戻って海を目指していた。

さすがに片目での夜道の運転はこたえる。

そうでなくても、前日の5時に出発して名古屋まで往復していた。

俺にいたっては、ウサギに海に突き飛ばされ、根尾に半殺しにされた後、麻酔をかけられ体もガタガタだ。

疲れてない筈がない。

しずかちゃんも半分目を閉じて、窓に頭をもたれて必死で睡魔と闘っている。

俺が突然バックレなかったら、今頃どうなってただろう。

もしかして、詩織ちゃんと瑞穂ちゃん両方にウサギの臓器が適合して、いきなり計画は終了、ハッピーエンドになってたかもしれない。俺はやっぱり悪い事したんだろうか？

派出所のソファでスヤスヤ眠っていたウサギの顔が頭をよぎった。

少なくとも、俺は彼女を助けた。

自分が呼び出して、ここまで連れてきたっていうのに、俺はウサギを死なせないで済んだことには満足していた。

ただ、この落とし前は自分でつけなければ。

根尾としずかちゃんに迷惑が掛かる前に。

やがて、車は『海浜公園』と書かれた大きな看板がある駐車場に到着した。

ナビで確認すると、その駐車場の向こうは海岸になっている。

俺達が滞在していたホテルの前の海岸と繋がっている筈だ。

ただ、あの海岸からは、電車の一駅分くらいの距離はありそうだった。

松の木の並んだガードレール沿いの駐車場に車を停車させ、エンジンを切ると、突然、静寂が戻ってきた。

夏とは言え、明け方の海岸は寒いくらいで、エアコンがなくても車内は快適だった。

緊張の糸が切れたしずかちゃんは、完全に眠りに入っていた。

俺が死なないって言ったのが、彼女を安堵させたんだろう。彫刻のような白い顔は、すっかり目を閉じて死んだようにピクリとも動かない。

俺は、その白い頬に触ろうと手を伸ばして、そこで諦めて再び引込んだ。

「さよなら、しずかちゃん。」

彼女を起こさないように、俺は聞こえないくらい小さな声でお別れを言った。

そして、音を立てないようにそっとドアを開けて、俺はキーを挿したまま車を離れた。

外に出ると、涼しい潮風が顔を撫でていった。

空は少し明るくなってきたものの、まだ一面、星が瞬いている。

波の音を頼りに俺は浜に向って、伸びをしながらゆっくり歩いていった。

まだ光を放っている月に明かりに照らされた海は、幻想的だった。砂利の混ざった砂浜を踏みしめて、波打ち際まで歩いていく。

あまり海に近いと、根尾に発見される前に流されてしまう危険がある。

早過ぎて死後硬直が始まってから発見されても意味がないし、遅すぎると、起きてきたしずかちゃんに止められるかもしれない。

俺はシュミレーションしながら、文字通り死に場所を求めて海岸をウロウロ歩き回った。

その時。

背中肩甲骨の間の皮膚が、僅かに振動したのを感じた。
本当にマイクロチップが埋め込まれているなら、何かに反応したのかもしれない。

俺は、さっき車を止めた駐車場の方を見た。
微かに車がこちらに近づいてくるエンジン音が聞こえた。

間違いない。

根尾がここに向って来てる。

完全に野生のカンだったが、その時は神がかり的に確信を持ってヤツを感じた。

ジャストタイミングだ。

今やれば、ヤツがここに来た時には俺は半死半生、三途の川を渡る寸前くらいだろう。

俺は砂浜に空を仰いで大の字になって、寝転がった。

波の音を聞きながら、振ってくるような星空の下で俺は逝く。
なかなかできない贅沢だろう。

ポケットに突っ込んでおいた木製の果物ナイフの鞘を外して、俺はまだ痺れの残る右手の手首に刃を押し当てた。

意外に切れ味のいい果物ナイフは、スパッと手首の皮を切り裂いた。
勢いよく血が流れてきたのを確認して、俺は手を下ろして砂浜に大の字になったまま目を閉じた。

脱臼したお陰でまだ痺れている右手は痛みは感じなかったけど、生暖かい血が腕を伝ってダラダラ流れていくのは分かって、血に弱い俺はそれを直視することができなかった。

目を閉じて潮騒の音に耳を傾けていると、急激に睡魔が襲ってきた。同時にだんだん頭がクラクラしてくる。

そろそろ迎えが来るのかな・・・？

そんなことを考え始めた頃。

俺の見えない筈の左目に、こっちに向って歩いてくる根尾の姿が鮮明に映った。

決着 2



「岸上君、起きろよ。」

目を瞑った俺の顔の上で、懐かしい根尾の声がした。
少し高めの優しい声。

さっき別れたばかりだというのに、久し振りに聞いたような気がした。

不思議な事に見えない方の目には、俺を見下ろす根尾の姿がはっきり見える。

もしかしたら、夢を見てるんだろうか。

それとも、俺は既に死んでいるのか。

・・・何でもいい。

最後に根尾に会えて良かった。

照れ臭くて一度も言えなかった台詞を言う機会を、神様が与えてくれたに違いない。

俺は薄れる意識を必死に手繰り寄せ、見える方の右目を開けようと試みる。

そこには確かに根尾がいた。

感覚のなくなった血まみれの俺の右手を取って、じっと俺を見つめている。

いつもの白い顔に一見穏やかな緑がかった黒い瞳。

柔らかい栗色の髪が額にかかって、少年みたいな雰囲気だ。

俺はこの人が好きだった。

気ままで常識がなくて、子供みたいな無邪気さと残酷さを持ち合わせた変った男。

俺を求めてくれた初めての人だった。

俺は力を振り絞って、最後の告白をした。

「ね、根尾さん……。ごめん。俺、できなかった……。あんたにも、しずかちゃんにも人殺しさせたくなかったんだ……。あの子を逃がしちゃった。裏切ってすまない。」

「……。ああ。」

「俺、B型だから……。あんたの奥さんに俺の心臓使って……。肺はしずかちゃんの娘に……。ダメだったら太平洋に水葬してよ。俺、ここの海好きなんだ。」

「……。ああ。」

「俺ね、嬉しかったんだ。初めて人に求められて。こんな顔なのに綺麗だって……。すごく嬉しかったよ。俺、あんたのこと好きだった。だから、絶対に止めさせなくちゃって思ったんだ。」

「……。分かってる。」

根尾は、そこで初めて表情を緩めて笑みを浮かべた。

反対に、今際の際にペラペラと告白を続ける俺は、感情の高ぶりを抑えられず、ポロポロ涙が出てきた。

セックスの最中にも泣いてしまうほど涙腺が弱い俺は、これが最期と恥をかなぐり捨て、根尾の前でベソをかき始める。

根尾は優しく見下ろして、俺の頬に手を添えると、顔についた砂をそっと払ってくれた。

「根尾さん、俺、先に逝くけど、あんたのこと守ってやるよ。だから……。死ぬまで抱いてて……。俺、死ぬのが少し怖いんだ……」

。最期にあんたが抱いてくれたら、もう悔いはないから・・・。」
「・・・君は死なないよ。」

泣きながら告白をしていた俺の言葉を遮って、根尾はプっと吹き出した。

クスクス笑いながら、握っていた俺の右手を見せる。

「もう血は止まってるよ。このナイフで死ぬ気なら、睡眠薬を酒で飲んでから、血が止まらないように水の中に手を突っ込んでおくんだな。」

・・・何だって？

根尾の言葉に俺はギョっとして、思わず起き上がった。

最初だけ大量出血したかに思えた右手は、今見ると確かに出血は止まっていて、手を濡らしていた血液は既に乾いていた。

「あ、あれ？だって、さっき意識がなくなってきて、あのまま出血多量で死ぬかと思ったんだよ？」

「眠かったんじゃないのか？もしくは血を見て、クラっときたんだよ。男は血に弱いヤツが多いからね。献血にきた巨漢が自分の血を見て倒れるなんてよくある話だ。そもそも、切り口が動脈に当たっていない。これじゃ、死なないよ。」

可笑しそうにクスクス笑う根尾を、俺はしばし啞然として見ていた。同時に今告白したことが頭をよぎって、俺は穴があったら入りたい程、恥ずかしくなった。

根尾は自分の履いてたスラックスの革ベルトを外すと、俺の血糊のついた右腕に器用に巻きつける。

応急処置で止血したらしい。

「・・・裏切られたのは残念だったけど、君の誠意は受け止めたよ。病院に戻ろう。血は止まっても、砂の中に傷口が埋まってたからな。消毒してから何針か縫うから覚悟しとけよ。」

根尾は立ち上がってさっぱりした表情で、砂の中に座り込んだままの俺を見下ろした。

ヤツの差し出した手を俺はしっかり握り締め、それを支えに立ち上がる。

立った瞬間に眩暈がして座り込みそうになった所を、根尾の力強い腕が俺の肩をグイっと支えた。

細いのに逞しい腕で俺をしっかりと支えながら、根尾はゆっくりと歩き始めた。

「・・・病院に戻っていいのか？俺、裏切ったのに・・・。」

「もう、いいんだよ。計画は終了だ。」

「・・・え？」

根尾の言葉に俺は思わず立ち竦む。

根尾は弱弱しく笑みを見せて言った。

「ちょうど君がアルファードで飛び出した後、病院から連絡があったんだ。瑞希は昨日夜七時に死亡した。間に合わなかったんだよ。」

根尾の言葉に俺は衝撃を受けて、その場に硬直した。

7時って言えば、あのレストランで皆が集まった頃だ。

俺が目覚まして、ゲロゲロ吐いてた時間ということになる。

あの時、あの寝たきりの少女は死んでしまったというのか・・・？

根尾は最期に彼女と会えなかったんだ・・・。

俺の目から再び涙が零れ落ちた。

俺がウサギを逃がさなければ、もしかして助かったのかもしれない。

もう少し早ければ……。

「ごめん……。根尾さん、ごめん。」

「いいよ。僕もね、思ったんだ。彼女は僕の凶行を死をもって止めてくれたんじゃないかって。僕が手を汚すのを本当は嫌がってたんじゃないかってね。麻酔が効いてる筈の君が起きてきたのには驚いたよ。これも彼女の仕業かもな。」

悲しみでおかしくなるかと思いきや、吹っ切れた顔で根尾はサバサバと答えた。

「あ、じゃあ、院長は……？」

「君が逃げた後、僕らは連絡を受けて病院に戻ってたんだ。彼はそのまま残ってる。あの人も可哀相な人だよ。」

根尾はふと表情を曇らせて、俺を支える腕に力を込めた。

しばし沈黙があった後、やがて彼はポツリと低い声で俺の耳元に囁いた。

「今から言うことは、夢だと思って聞いて欲しい。瑞希はね、本当は僕の娘なんだよ。」

決着 3

奥さんが実は本当の娘？

根尾の言葉に、頭の回転の悪い俺は、混乱して首を傾げた。

俺を支えながら歩く根尾の横顔を、バカみたいに見つめると、それに気付いた彼は恥ずかしそうに少し笑った。

「難しいことじゃないだろう？よくある話だ。院長の奥さんは、研修医だった24歳の僕と浮気してたんだよ。それまで子供ができて悩んでたし、病院の跡継ぎ問題で周囲からプレッシャー掛かっててね。妊娠したって分かったら、すぐフラれた。悪びれもせず、堂々と院長との子供だって言い張るんだから、すごい女性だよ。」
「・・・バレなかったのかよ？」

「バレてるかもしれないね。子供ができなかったのは院長が原因なんだよ。院長が自分に種がないことを検査して知ってしまったら、自分の子供でないことはすぐ分かる筈だ。」

悪戯がバレた悪ガキみたいに首をすくめて、根尾はしゃあしゃあと言った。

その神経の凶太さに、根尾のことは知り尽くしたと思ってた俺も啞然とする。

「バレてるかもしれないのに、あんた、院長と同じ病院で、娘の担当医になって、しかも入籍したのかよ？」

「院長がどう思ってるかは本当のところは分からない。バレてないかもしれないしね。瑞希は初めて担当医として紹介された時に、すぐに僕の娘だって分かったんだ。まともに外にも出た事がないのに、本当に素直ない子だった。僕は育ててくれた院長に感謝したよ。」

同時に、堂々と愛してあげる事ができない彼女の為に、僕は何でもやってみようと思っただ。」

彼女の笑顔でも思い出してるんだろうか。

根尾は遠い目をして溜息をついた。

「彼女はおませさんでね。10歳の時には、夢は僕と結婚することなんて言ってたよ。先のない命で、歩く事もできない彼女と誰が結婚してくれる？僕は、彼女と籍を入れる事には全く抵抗はなかった。娘の夢を叶えるのは父親の僕にしかできない事だろ？ただ、当然ながら彼女に性的欲望を持つことはできなかった。男女の愛じゃないっていうのは、そういう事さ。親子の愛なんだよ。」

俺は黙って聞くしかなかった。

想定範囲を完全に超えた根尾の常識外れな愛。

浮気相手にできた子供を、影になって見守ることなんてできるだろうか？

「・・・浮気、じゃなかったの？院長の奥さんのこと、本気で好きだったのか？」

ふと、思い当たって問いかけると、根尾は目を伏せた。

そして、少し悲しそうに唇を噛んでから、小さな声で言った。

「好きだった。初めて本気になって、初めて捨てられた人だったんだ。あの時は若かったな・・・。」

薄紫色に染まってきた空は次第に明るくなって、一面に瞬いていた星はもう消えていた。

潮風を感じながら、俺達は駐車場に向ってノロノロと歩いていく。フラフラしている俺を支えながら歩く根尾には苦痛だったかもしれない。

でも、俺はこのまま根尾とどこまでも歩いていきたい、なんてボンヤリ考えながら、いう事をきかない足を動かしていた。

「岸上君、さっき、肺はしずかちゃんにあげるって言ったよな？」

唐突に根尾に問いかけられた。

いつものクセで、俺は首を傾げてから、コクンと頷く。言われなくても、その覚悟は変っていない。

「死ねたらね。やっぱり、俺のこと殺す？」

「いや、肺は死ななくてもいいんだ。生体移植が可能だから。つまり、君の肺を半分提供してくれば、彼女の娘の病状は大幅改善される筈だ。君の方は日常生活には支障はない。柔道生命は絶たれるけどね。死ぬほどの覚悟があったんだから、肺を半分あげるくらい大したことじゃないだろう？」

勿論、柔道できなくなっても、全く構わない。

そもそも最初から、死ぬつもりでこの海岸に来たんだから。

それができれば、どんなにいいか・・・。

てか、何で最初っから言わなかったんだ？

「あげるよ、俺ので良ければ。でも、適合したらの話だろう？」

「するさ。君がサプリメントのバイトしてた時に、毎日検査してただろう？あの検査の一部は移植手術の為のものだったんだ。君ならしずかちゃんの娘のドナーになれる事は分かってたんだよ。」

俺は眉間に皺寄せて、首を捻った。

「・・・つまり、あのバイトはドナーを探して、臓器を強奪する為だったってこと・・・？」

「まあ、それも目的の一つだった事是否定しないよ。」

ハハハ、と根尾は笑い飛ばしたが、俺はぞっとして思わず根尾の手を振り解く。

「ホラ見ろ！やっぱり、最初は俺の臓器を狙ってたんじゃないか！」

「君のって訳じゃない。バイトを募集したら、たまたま君が来ただけの話さ。でも、できなかったんだよ。」

よろよろと逃げようとする俺を、根尾は後ろから羽交い絞めにして抱き寄せた。

俺の首にヤツの柔らかい髪が触れ、肩にキスされたのを感じた。

そして、耳元に息がかかり、ヤツの柔らかい声が囁く。

さっきまで病室にいたであろう消毒液の匂いが鼻を掠めた。

「僕も静香もできなかった。君と同じ理由さ。僕らは君が大好きになっちゃったんだよ。」

「ご、ごまかされるか！あんたって人は・・・。」

言いかけたところで根尾の唇が言葉を遮った。

俺の体の向きを変えて正面から向き合おうと、改めて強く抱き締められた。

最初は鳥が啄ばむように、そしてだんだんと獣が獲物を貪るように、角度を変えては何度もキスを繰り返す。

されるがままになっていた俺も、いつしか両腕で根尾の背中を抱き締め、懸命にキスを受け止めていた。

「岸上君、ドナーになるのに法的な条件が一つあるんだよ。」

絡めた舌を名残惜しそうに離して、根尾は言った。

もっと欲しくて、俺は無意識に根尾の唇を追いかける。

それを避けるようにして、ヤツは少し寂しそうな口調でこう続けた。

「生きてるドナーは、親戚か、血縁関係のある人間か、もしくは配偶者でなければならぬんだ。君が静香と結婚すれば、万事OK。君と詩織ちゃんは親子になるからね。どうする？」

どうするも何も……。

それこそ、一人で決められる問題じゃない。

寧ろ、彼女の方に選択権はある。

ただ、俺に異存はないことだけは、間違いなかった。

決着 3（後書き）

ここまで読んでくださった方々、ありがとうございます。
明日から、最終章です。
もう少しお付き合い下さいませ。

夢 1

夢を見ていた。

名古屋の実家に私はいた。

仕事が無くなってから、夜中、お菓子を食べながらネットを見て、朝方ベッドに入り、昼前にノロノロ起きて台所に出てくる。

私の為に用意された朝食は既に片付けられている。

最初から、用意してないのか・・・。

そこでは母親と、失業した弟が連れてきた若い嫁が楽しそうに話をしながら、仲良く昼食の支度をしている。

まだ幼稚園の子供が嫁の周りをウロウロ歩き回って、邪魔な事この上ない。

いや、彼女達にとって本当に邪魔なのは、この年になって嫁にも行けず、ダラダラ毎日を寝て過ごしている私だろう。

仲睦まじい二人の間に割って入ってまで、話しかける雰囲気じゃなくて、私は玄関から外に出た。

家の前には一本道があって、私は当てもなくノロノロ背中を丸めて歩き出す。

もう、死んじゃおっかなあ。

俯きながら考えていた時、私の腕をギュッと掴んだ大きな手があった。

振り返ると、見覚えのある斬新な髪型の男性が、首を傾げてニッコリ笑っている。

赤みの強い紅茶色の目に、白い顔。

前髪に隠れている白い眼帯。

半袖シャツからチラリと見える刺青。

ああ、この人知ってる……。

誰だっけ？

そう思った途端に、彼は私を引っ張って歩き出した。

戸惑って立ち竦む私を見て、彼は片目を細めて笑いかける。

「まだ早いよ。もう少し頑張れ！」

私の手を引っ張りながら前を歩く大きな背中を、私は必死で追いかけていく……。

夢はそこで終わった。



「君、ちょっと、君！起きなさい！ここで何やってんだ？」

ユサユサと肩を揺さぶられて、私はボンヤリと目を覚ました。

窓から差し込む強烈な夏の朝日が、私の顔を直撃している。

眩しさの余り、私は再び目を閉じようとした。

「こら！いつまで寝てる気だ？いいかげん起きなさい！」

さっきの低い声がまた響いて、私は露骨に嫌な顔をした。

薄目を開けると、日焼けした角ばった顔の男性のアップが目の前に

あった。

驚いた私は思わず、ヒイイっと変な声を出して後ずさる。

どっかで見た青い制服にお揃いの四角い帽子。

コスプレでない限り、警官だということは間違いない。

と、いうことは・・・？

私はぐると自分の周りを首を一回転させて見回した。

コンクリート張りの床に会議用の長い机が狭い部屋の中央にポツンと置かれてる。

奥の半開きのドアの向こうには、使われている様子が全くない流し台が見えた。

たった一つある入り口は安っぽいガラス戸で、到底、民家とは思えない。

田舎の駐在所みたいだった。

いや、警官がいるということは本当に駐在所なんだろう。

その一角に置かれた小さなソファで私は眠っていたらしい。

私は頭を抱えて、必死で記憶を手繰り寄せた。

どうして、私はここで寝てたのか？

昨日は確か最期の晚餐で、ネオさんたちとホテルで・・・。

「あ、そうだ。私、昨日の飲み会でお酒飲んで・・・。」

「そんなことは見れば分かる。君、酒臭いよ。どっから来たの？名前は？」

いつものことだと言わんばかりに、四角い顔の警官はウンザリした顔で、腕を組んで溜息を付いた。

見かけほど年は取ってなさそうな、張りのある声だ。

「わ、私、宇佐美響子です。名古屋から来たんですけど。昨日の朝、

ここまで皆と来た筈なんですが・・・。」

「はあ？名古屋から、わざわざここまで合コンに来たのか？まさか一人じゃないだろう？友達は？」

「あ、一人で参加したんです。他のメンバーは知らない人ばかりで・・・。」

「なるほど、お見合いコンパってヤツだな。時々あるんだ。なんか取られたか？」

意地悪そうな警官の言葉に、私はカチンときながらも、自分がレストランまで持っていたバッグを持っていないことに気が付いた。衣服は昨日と変わりなかったものの、サンダルも履いていなくて、素足でどうやってここまで来たのか全く分からない。

「あ、あれ？本当だ。私、全部置いてきちゃった・・・。」

「その手のコンパはね、参加者を酔わせて暴行したり窃盗したりするのが目的なんだよ。主催者とか、団体名とか覚えてる？」

「・・・主催者？」

それはあの死神さんになるんだろうか？

でも、彼は私を殺そうとしてたんだろうか？

ネオさん達とレストランで飲んだ時は、彼はいなかった。

でも、最後に私の視界に彼は現われたのだ。

「・・・分かりません。覚えてなくて・・・。」

説明できなくて、というより、彼を犯罪者みたいに話したくなくて、私は言葉を濁した。

警官は訝しげに私を見下ろしてから、ヤレヤレといった顔で溜息をつく。

「ま、無事で良かったんじゃない？一応、被害届け出しとく？失くしたものが返って来たら連絡するけど。出した所で、殆んど見つからないけどね。」

じゃあ、届けを出す必要なんかないじゃないの？

いちいちカチンと来るこの警官の口調はどこか死神さんに似ていた。私もムっとして、あからさまに不機嫌な顔で言い返す。

「いいです。私、別に騙されて来たわけじゃないですから。これから名古屋に帰ります。」

・・・っていうか、どーしてあなたは私がお見合いコンパに来たっと思うんですか？

「どーしてって・・・。違うの？そう見えただけだ。」

「な、何ですって!？」

失礼極まりない。

35才のいき遅れに見えろと言われたようなものだ。

完全にキレた私は裸足のまま立ち上がった。

「あなたにそんなこと言われる筋合いはないです！今から、駅までパトカーで送って下さい。あ、名古屋までの電車賃2000円くらい貸して下さい。あと、靴も。トイレの下駄でも構わないから。」

「ずうずうしいな。でも、それはできないよ。警察の金を貸すのは、俺の一存では・・・。じゃ、待ってて。本部に許可取るから。」

御託を並べながら、立ち上がって受話器を手にした警官に私は更に激昂する。

何て小さい男だ。

「まどろっこしいのよ！男でしょ？2000円くらいポケットマネ

「で個人的に貸しなさいよ！トイレの下駄くらい後から弁償するわよ！ケチなこと言ってんじゃないわよ！そんなはした金、後から利子つけて返してやるわ！」

私に怒鳴られた警官は、しばし呆気にとられていたが、やがて、プッと吹き出してから大笑いした。

「了解。じゃ、公務を離れて個人的に貸すよ。その代わり、あんたも個人的に返しに来いよ。」

いたずらっぽく笑った警官の顔は、子供の頃、クラスに必ずいたガキ大将がそのまま大人になったような雰囲気だ。少し鼓動が速くなった胸に私は気付かないフリをして、彼を睨む。

「・・・どういう意味ですか？」

「そういう意味だよ。俺もお見合いコンパの常連なんだ。財布取られた事もあるんだぜ。」

照れ臭そうに彼は笑いながら言った。

夢 2

その日の昼、トイレの下駄を履いて、警官の貸してくれた2000円だけを頼りに、私は名古屋駅に戻ってきた。

「携帯番号、教えてよ。家に帰ったら電話するから。ちゃんと利子つけて返すからね。」

駅まで送ってくれた警官に、私はぶっきらぼうにそう言った。

一つは照れ隠し、もう一つは別れがちょっとだけ寂しかったからだ。警官は笑ってポケットからメモ帳とペンを取り出すと、サラサラつと殴り書きして、パトカーの窓越しに手渡した。

たじまよしゆき

田島義之

090—XXXX—XXXX

そこで初めて私は彼の名前を知った。

よくある昭和の雰囲気の名前だ。

『宇佐美響子』といい勝負な普通っぽさだ。

「よくある名前ですね。」

思わず出た言葉に彼は苦笑した。

「あんたもね。じゃ、気をつけて帰れよ。」

ピンと伸ばした右手を額に当てて敬礼すると、窓が閉まって、彼は

車を走らせ去って行った。

名古屋駅からトイレの下駄履きのまま市バスに乗って、私はノコノコと実家に戻って来た。

大騒動になっているかと思いきや、玄関を開けたら皆の靴がなくって、どこかに出掛けているみたいだった。

無職になってから、二日間くらい部屋から出ず、平気で引き籠ってた私だ。

一日いなかったくらいでは、誰も気が付かないだろう。

幸か不幸か分からないが、とにかく自殺計画に失敗した今、この件については誰にも知られなくなかったので

家族が気が付いていないのは都合が良かった。

死ぬつもりで出掛けたのが、おめおめと帰ってきたんだから、これ以上恥をかきたくなかった。

結局、私はあそこまで行ったものの、死ぬほどの覚悟もなく後悔しまくって、お酒を飲んで、他の参加者に呆れられて、始末に困ったもんだからあの駐在所に置き去りにされたんだろう。

ネオさんや、あの美人の奥様、それとミナミのドンはエデンに逝ってしまったんだろうか・・・？

今頃、もうこの世にはいないんだろうか。

主催者の死神さんは、あの後、どこに行っただろう。

半分、夢だったような気までしていた。

でも、今でもハッキリ目に浮かぶことが一つだけあった。

首を傾げて見つめる死神さんの瞳。

見えない方の目も衝撃だったけど、私にはあの射抜くような紅茶色の瞳が忘れられなかった。

もう二度と会うことはないだろう。
それだけは、何故か確信があった。



その夜、ケータイまでバッグと一緒に置いてきてしまった私は、自宅の電話から警官・田島に連絡をした。

「もしもし、田島です。」

受話器の向こうで落ち着いた低い声が聞こえて、私は再び鼓動が速くなるのを感じた。

「あ、宇佐美です。あの、色々言ってしまったけれど、今日はありがとうございました。返金させて頂きたいので、銀行口座教えて貰えますか？下駄の弁償代と合わせて振り込みますので……。」

今までの営業職のクセで電話の対応は常に業務的になってしまう。堅苦しい話振りに、受話器の向こうから笑い声が聞こえてきた。

「いーよ、そんな固くなんなくて。俺、今自宅だし。本気で返してくれるの？」

「返します。約束ですから。」

「だったらさ、俺、名古屋まで回収に行くよ。手渡しで返してくれる？」

思いもよらないその言葉に、私は完全にテンパった。
それはつまり、どーいう意味なの？？？

「な、名古屋まで来ると高速代とガソリン代で2000円越えると思いますけど。それ、する意味あるんですか？」

既に胸はドキドキ、久々のトキメキで弾けそうなのに、何故か、かわいくないことを言ってしまう。

こんなんだから今まで結婚できなかったんだ。
分かってるのに再び同じ過ちを繰り返している自分に嫌気が差す。

「もちろん、それに見合う事は期待してるよ。あんたと話したい。来るなってんなら行かないけど。」

私のトゲトゲしい口調を気にする風もなく、彼はさっぱりした口調で言った。

さっきは「小さい男」って言っちゃったけど、意外と器量の大きい男なのかもしれない。

ここでつまらない意地を張ったら、一生後悔するかも。
もう、後悔はしたくない。

昨日、あれだけ後悔して、どういう訳だか分からないけど一命を取り留めたんだ。

意地張ってる場合じゃない。

この命は楽しい方向に使わなければ。

「・・・来て下さい。私も逢いたいです。」

思い切って言った私の言葉を待っていたかのように、電話口で彼の笑い声が聞こえた。

「了解！よかったあー！断われたら自殺モンだったよ。あー、緊張した・・・。」

私達は電話越しに笑い合った。



それを期に、私達は付き合い出した。

車もお金も仕事もない私を氣遣って、会う時はもっぱら彼が名古屋まで車で来てくれた。

定期的な休みが取れない彼にとって、無職で時間だけは膨大にある私が都合が良かったみたいだ。

どちらかと言うと、ずんぐりムツクリな体型で顔もイケてるとはいえない難い田島クンだったが、彼といると不思議と落ち着いた。

肝が据わってるというか、私のヒステリーにも全く同じることなく、常に同じ態度で接してくれる大きさがあった。

「どうして今まで彼女いなかったの？」

付き合って半年ほどした頃だろうか。

名古屋港を二人でブラブラ歩いていた時、私はふと彼に聞いた。

そう聞いた私に、彼は赤くなって頭を掻きながら言った。

「ルックスがイケてないのはともかく、一つは職場に女性がいないで出会いがない。あと、俺ね、転勤多いんだ。でもって、実家は農家なの。お見合いコンパで、プロフィールの『相手に対する希望』に、農家の嫁とか、転勤族の嫁って書いたら、大抵相手にされないよ。あんたは？」

「・・・は？」

「転勤族もしくは農家の嫁になってくれる？」

「私？ねえ、それってプロポーズのつもり？」

聞き捨てならないその言葉にしがみ付き、私は彼に詰め寄る。
更にガリガリと頭を掻きながら、田島クンは降参したように言った。

「あー、もう！もっとカッコよく言おうと思ってたのに。付き合っ
て半年しか経ってないのに早いだろう！」

襟首を掴んで必死に詰め寄る私を、彼は太い腕で抱き締めた。

幸せだった。

やっと私も大切な人ができた。

あの時、死なくて本当に良かった。

夢かと思うほどの幸福感を私が味わっていた頃、機種だけ変えた新
しいケータイに見知らぬ番号からメールがあった。

同じケータイ会社からのメールだろう。

アドレスはなくて、番号だけでそのメールは送信されてきた。

090－XXXX－XXXX

件名 死神より

本文 お返ししたいものがあります。

明日朝10時、名古屋駅前の待ち合わせ場所だったバス停留
所にてお待ちしております。

見た途端、私は蒼白になってケータイを握り締めた。

再会 1

「自殺ツアー エデン」

それが、私が申し込んだ死への旅だった。

死神さんからのメールを見た瞬間、私の脳裏にあの暑い夏の日がハッキリを浮かんできた。

誰も喋らなかった気まずい雰囲気的車内。

死神さんと話をしたあの海。

最後にメンバーと顔を合わせたあのレストラン。

忘れたくても忘れられないのに、思い出そうとしても鮮明でない、嫌な夢のようなあの日の記憶が輪郭を持って私の頭の中に浮かんできた。

今更、死神さんは私に何の用だろう。

渡したいモノっていうのはさしずめ、置いてきたバッグだろうけど。

海の中で少年みたいに笑った彼の顔が思い出されて、私は胸が締め付けられた。

思えば彼の本名が岸上っていうことくらいしか、私が知ってることはないのだ。

どういう人だったんだろう？

どうして、彼はこんなツアーを計画したんだろう？

彼に会いたい。

いや、会わなければ・・・。

会ったところで、何を話していいか分からないけど、とにかくそう

思った。



メールの指定通りに、私はあのバス停に再びやって来た。

あの日は8月でセミの声が煩いくらいの暑い日だったのが、時は流れて今は二月。

朝の冷たい風が肌に突き刺さるような日だった。

どんより曇った空は、雪でも降りそうな重苦しい色をしていた。

その冷たい風の中、名古屋駅に到着した私は、バス停に向かって歩き出した。

もう10時を少し過ぎている。

少し遅れてしまったけど、死神さんは待っていてくれるだろうか？

私は足を速めて、バス停までトコトコ小走りに向っていった。

朝の通勤ラッシュが終わった名古屋駅はさほど混んでいなかった。

待ち合わせのバス停からちょうどバスが出て行く。

その停車していた場所で立っている一人の女性が見えた。

黒いロングコートにベージュのストールを襟元に巻いている。

ヒールの高い革のロングブーツを履いたスラリとしたシルエット。手には大きめの紙袋を二つ持っている。

サラサラした黒いロングヘアーに真っ白な整った顔。

その立ち姿は、まるで昔の映画女優みたいだ。

そして、私はこの女性を知っていた。

「・・・しずかさん？」

私は無意識にその名を呼びながら、立ち竦んだ。

幽霊でも見たような顔になっていたに違いない。

何故なら、私の頭の中では彼女はとくにエデンに逝ったことになっていたんだから。

呼び声に気が付いて、彼女はこっちを振り向いた。

穏やかな顔で会釈をすると、黒髪をなびかせ、私の方に向かってゆっくり歩いてくる。

その歩き方さえ優雅で、私はその場で硬直したまま、しばし見惚れていた。

私の目の前まできたしずかさんはニッコリ笑った。

花がパッと咲いたような明るい笑顔だった。

同性なのに、その微笑にドキドキしてしまう。

「ウサギさん、元気でしたか？半年ぶりですね。」

聞き覚えのある大人の女性の声。

落ち着きのある、優しい声だった。

「しずかさん……ですよね？死神さんは？どうしてあなたが……？」

「ごめんなさい。彼は来ません。私では役不足だったかしら？」

肩を竦めて、彼女は申し訳なさそうに答えた。

私は慌てて首を横に振る。

「いえ、いいんです。その節は皆さんと最期まで同行できなくてスイマセンでした。私、お酒飲んだ後の事は、あんまり記憶がないんですけど。皆さん、エデンには行って……ないんですよね？」

シドロモドロに話す私に、しずかさんは口元を押さえてコロコロと笑った。

「見ての通り、私もエデンには逝ってないんですよ。その事で、あなたにお話することがあるんです。お時間よろしいかしら？」

「はい、大丈夫です。」

「じゃ、ここではなんですから、どこか入りましょうか？ モーニングのおいしい所でも、ね？」

しずかちゃんは女子高生みたいに、私の手を取ると駅の方に向かってクイクイ引っ張りながら歩き出した。

あの時とは少し違うテンションの彼女に、私は戸惑いながらも大人しく従った。

・・・今の彼女の方がキレイだな。

漠然とそう思った。



私達な駅の裏にある昔ながらの小さな喫茶店に入った。

喫茶店王国名古屋は、朝、コーヒーを頼むと自動的にゆで卵とトーストがついてくるモーニングセットなるものの発祥の地と言われているらしい。

名古屋育ちの私は、子供の頃、父親とモーニングを食べに喫茶店に入ったものだ。

レトロな雰囲気のレストランは入ってみると意外に中は広くて、私としずかちゃんは窓際が一番隅の席に向かい合って腰掛けた。

黒光りしているアンティークなテーブルは肘を付くのが申し訳ないくらいだ。

「モーニングセット二つ、私はホットで。ウサギさんは？」

しずかちゃんは優雅な口調で注文を取りにきたマスターにそう言うてから、私にも伺いを立てる。

「私はカプチーノをお願いします。」

還暦は迎えているであろう白いひげのマスターは、黙って注文を聞くと、少し笑みを見せてから厨房に戻っていった。

彼が完全に話し声の聞こえる範囲から出て行ったのを確認して、しずかちゃんはガサガサを紙袋を私に差し出す。

「まずは、これをお返ししなければ。あなたの忘れ物です。」

言われて中を覗き込むと、案の定、レストランに置いてきた筈のバッグとサンダルが入っていた。

何となく気恥ずかしくて、私は慌てて袋を閉じると椅子の下に突っ込んだ。

その仕草を見ていたしずかさんは優しく微笑んだ。

「ごめんなさい。もっと早く返したかったですけど、私の娘の手術があったものですから。」

「あ、あの、障害があつて治らないって言ってた子ですか？どうでした？」

私の問いに、彼女は穏やかな顔で答える。

「お陰様で手術は成功しました。まだ完全ではないですが、日常生活を送るには差し支えない所まで回復したんです。明日、退院するものですから、お話しするなら今日しかないとって連絡した次第

です。」

その言葉に私までホッとして笑顔がこぼれた。

「良かった……。おめでとうございます。もう、エデンに逝く必要はなくなったって事ですネ。」

しずかさんの表情が少し固くなった。

しばしの沈黙の後、決心した顔で私を見てから、こう言った。

「……。そうです。その必要がなくなったからこそ、私は罪を償いに来ました。あなたをネットで呼び込み、ツアーと装ってホテルまで連れて行き、睡眠薬をお酒に混ぜて飲ませて昏睡状態にしたのは私なんです。全ては娘の為でした。」

彼女の告白に、私は硬直して動けなくなった。

再会 2

私は、目の前のしずかさんの整った顔を啞然として見つめていた。

どういうこと？

しずかさんは最初から参加者じゃなかったってこと？

回転の鈍い頭を私は必死で働かせた。

でも、半年前の記憶は既におぼろげで、あの時の状況は上手く思い出せなかった。

しずかさんは穏やかな表情のまま、でも、腹を括った潔い口調で話を続ける。

「私と死神さん、いえ、後の二人も全員、最初からあなたを殺すつもりで集まったんです。娘に移植するための臓器提供者が必要だったの。『自殺ツアーエデン』っていうのはドナーを集める為のカモフラージュでした。」

「・・・じゃ、お酒を飲ませた後は・・・？」

背筋が冷たくなってくるのを感じながら、私は恐る恐る聞いてみる。

「彼が・・・死神さんが命がけであなたを助けなければ、私達はあなたを殺してしまったと思います。あの時の私はもう狂っていました。娘の命を救う為なら何でもするつもりだったから。でも、彼は自分を犠牲にしてまで、あなたを助けました。私もそれでやっと目が覚めたんです。」

死神さんが命がけで私を助けた・・・。

最後にホテルの部屋で話をした時の彼の顔が思い出される。少し怒ったような、寂しいような、何か言いたいような、複雑な表情。

あの時、彼は既に私を助けようかと迷っていたんだろうか・・・？

そう思うと、出会ったときから彼の態度は曖昧で捉えどころがなかった。

葛藤を抱えて、ずっと迷っていたんだとしたら、あの意味深な言動にも説明がついた。

彼女はゆっくりと話しを続ける。

「彼のお陰で私達は最悪の事態を起こさずに済みました。でも、あなたを拉致監禁して昏睡状態にして、あの派出所に放置したのは事実です。あなたはこの事実を知る権利があつて、私は罰せられる義務があります。今まで黙っていたのは逃げていた訳ではありません。娘の手術が成功して、安定するまでは動けなかったんです。でも、もう心残りはありません。あなたが警察に届けるなら、私はそれを受け入れます。」

「・・・届けて、あなたが逮捕でもされたら、娘さんはどうなるんですか？明日、退院するんでしょう？一人になっちゃうじゃない！」

思わず声を荒げた私に、彼女は幸せそうな、そして誇らしそうな顔で笑った。

「もし逮捕されることになったら、私が刑期を終えるまで、死神さんがあの子と一緒にいてくれます。私達、結婚したんです。娘に肺の一部を提供してくれたのも彼でした。」

「け、結婚!？」

聞き捨てならないその言葉に私は思わず、テーブルを叩いて立ち上がった。

なんてことだ・・・!

あの男にまで先を越されるなんて・・・!

悔しさなのか、嫉妬なのかよく分からないドス黒い感情が私を包んだ。

その時、さっきのヒゲのマスターがモーニングセットのトレイを両手に乗せて現われた。

立ち上がったまま息を切らせている私を面白そうに見てから、上品に座っているしずかさんに笑みを見せて、トレイをテーブルに置く。私は毒気を抜かれて、ヘナヘナを椅子に座り込んだ。

「だから、娘のことは心配いりません。私は告発されれば罪を償う用意はできてます。後は、あなたの判断にお任せします・・・あの、もしかしてショックでした?」

しずかさんはコーヒーに口を付けながら、悪戯っぽく笑った。

その余裕の表情に私は意味もなくムカついて、思わず好戦的な態度に出る。

「全然、ショックじゃありません!私だってもうすぐ結婚するんです! ついでに言うと、あのツアーの事は私の人生の汚点なんだから、もうどうでもいいです! 蒸し返したくないんです! 大体、今更、警察に言っただけでしょうがないでしょう。彼氏が警官なのに・・・。」

「まあ、彼氏が警官? その方と結婚されるのね?」

それを聞いた彼女の顔がパッと明るくなった。

所詮、他人事だろうに、心から嬉しそうに笑うと私の両手を握ってブンブン振った。

「嬉しいわ。じゃあ、あなたも今、幸せなのね？もうエデンに逝く必要はなくなったんですね？」

「お陰様で。だから、あのツアーのことは忘れます。あなたももう忘れてください。結局、それがきっかけで私も幸せになれたので・・・」

そうだ。

あのツアーに参加していなければ、田島クンと出会う事もなかった。そういう意味では、私の自殺行為は確かに実を結んだことになるだろう。

きっかけはどこに転がっているのか分からない。

人生、何でもやってみるものだ。

「・・・ありがとう。ウサギさん。あなたならきつとそう言ってくれるだろうって、死神さんも言っていました。でも、一度はあなたに許しを請わなければ、私の気が済まなかったんです。本当にごめんなさい。」

「謝らないで下さい。お互いエデンに逝かずに済んだんだから。これからも頑張りましょう。」

私の言葉に目を潤ませたしずかさんは、慌ててハンカチで目元を押さえた。

泣き顔まで綺麗って反則だ・・・。

あの死神さんも、これでやられたに違いない。

女に甘そうな、弱気な死神さんの顔が頭に浮かんだ。

冷め始めたモーニングセットに手をつけながら、私達は初めて心を許して語り合った。

真冬の寒空から白い雪がチラチラと落ちてきたの窓越しに眺めながら、しばし穏やかな時間を共有したのだった。

彼女には友達というより、かつての戦友、みたいな妙な親近感を感じた。

生きてきた方向の全く違う私達が、ひょんなことで接点を持って、お互い別々の終点に辿り着いた。

人生の面白さってこんなことなんだろう。

「・・・やっぱり、生きてて良かったですね。」

「最後まで何があるか分からないものね。私も生きてて良かったわ。」

そう言った私に、しずかさんも肩を竦めて少女のように微笑んだ。

旅立ち 1

「・・・いてて・・・」

まだ時々痛む胸の傷跡を抑えて、呻きながら俺は布団を担いだ。

明日は、しずかちゃんの娘の詩織ちゃんが退院してここに帰ってくる。

ここと言うのは言うまでもなく、しずかちゃんの自宅だ。

俺達が滞在していたホテルから車で10分程の所に彼女は自宅を持っていて、そこから病院に通勤していた。

戸籍上、父親になった俺は、帰ってくる彼女の為にできることを探している内に、突然、布団を干す事を思いついたのだった。

片目が見えない上に、肺も半分無くなって、胸と手首にはツギハギの縫った痕が残るし、根尾にぶっ飛ばされた時に外れた肘は靱帯が伸びていた。

背中のだっかに埋め込まれているマイクロチップもそのままになっている。

殺人事件にせずに済んだものの、あの計画のお陰で、俺の体はかなり踏んだり蹴ったりな状態になっていた。

それにも勝る大きな幸せは、しずかちゃんと入籍したことか。

ベランダに出ると、二月の風が肌を差すようだった。

空はどんより曇って、雪でも降りそうな勢いだ。

せっかく担いできた布団のやり場に困って、俺はベランダにもたれて空を仰いだ。

しずかちゃんは、朝からウサギに懺悔に行くと行って名古屋に出掛

けていた。

「私がウサギさんに訴えられて刑務所に入ったら、詩織の事、宜しくお願いしますね。」

涙ながらに言って、しずかちゃんは俺をギュッと抱き締めた。

ウサギがそんな事をするヤツじゃないことは確信があったので、俺は、ハイハイと曖昧な返事をしておいた。

あいつはバカで行き当たりバッタリな女だけど、今更、後ろ向きな事は絶対しない。

俺にはそう思えた。

思い返せば、あの事件から既に半年が経っている。

根尾の奥さん、いや、娘さんの葬儀は親族だけでしめやかに行われたらしい。

俺としずかちゃんが葬式に呼ばれなかったのは当然だとしても、根尾さえも呼んでももらえなかったのには驚いた。

「院長の奥さんが来るんだから僕が呼ばれる訳ないよ。これでこの病院とは何の関係もない人間になったんだからね。葬式で元旦那をお披露目して、跡継ぎ問題になるのが嫌なんだろ。」

根尾は負け惜しみみたいに言って笑ったが、さすがに辛そうだった。その様子は多少は気になっていたけど、俺達はする事が沢山有り過ぎて、考えている暇はなかった。

まず、彼女の住民登録があるこの街の役所で俺達は婚姻届を出した。プロポーズも何もない。

移植手術の為だけの便宜上の結婚だった。

それでも提出する時は緊張したし、嬉しかった。

結婚は二度目の彼女はさすがに落ち着いていたけど、俺が顔を見ると慌てて目元を手で擦った。

女って何度結婚しても、感動するんだ。

それを見た涙脆い俺も、やっぱり感動して涙を抑えることができなかった。

移植手術は楽園会グループではなく、生体移植専門の外科医がいる名古屋の病院で行われた。

俺も1ヶ月程の入院を余儀なくされたが、何もしないでいる事には慣れているので、苦痛ではなかった。

人生、何でもやっておくものだ。

詩織ちゃんには、俺がしずちゃんと結婚した事や、ドナーになる事は伏せておいた。

「女の子はデリケートだから、要らないとか言い出したら困るですよ？」

見かけによらず毒舌なしずちゃんにそう言われて、俺は苦笑いするしかなかった。

「海賊の肺じゃイヤ、とか？」

「・・・まあ、そういう心配もあるってことです。詩織がもっと物事が分かる年になったら、ゆっくり説明したいの。」

「でも、俺と一緒に住んでたら変だろ？」

「それは大丈夫です。海賊さんがママを守る為に船を下りたので、住む所がないって言うてあります。あなたが同居する事については、詩織はとっても喜んでるわ。」

船を降りたホームレスの海賊を装って同居することについては、いささか疑問を感じたけど、事なかれ主義の俺は「嘘も方便」が座右の銘だったから、結果オーライなら何でも良かった。

ぼんやりと今までの事を反芻している内に、鼻の先に冷たいものがフワリと落ちてきた。

これに続いて、暗い雲からハラハラと粉雪が落ちてくる。寒いと思ったら、とうとう降り出した。

俺は慌てて担いできた布団を、家の中に引き摺り込んだ。



2LDKの小さなマンションは、しずかちゃんと詩織ちゃんが二人で住むには丁度いい大きさだった。

几帳面な彼女らしく、床はいつも磨かれていて、壁に傷の一つもない。

男ばかり3人兄弟の岸上家では、常に壁や襖に穴が開いていて落書きだらけだったというのに、やっぱり女の子は大人しいんだろう。カントリー調のローチェストの上に、しずかちゃんと詩織ちゃんが仲良く抱き合って写っている写真が置いてあって、さすがに女の部屋だと感心した。

正直言って、俺がしずかちゃんと詩織ちゃんと一緒にいていいのか、自分でも分からなかった。

ここにいたら詩織ちゃんが、海賊を匿ってるって言われて学校で苛められたりしないだろうか？

ただでさえ外見に問題がある俺がしずかちゃんと一緒にいたら、彼女が悪く言われたりしないだろうか？

タバコを求めてポケットに手をつっ込んでいるのに気が付いて、俺

は苦笑する。

そうだ、もうタバコは一生吸えないんだっけ。
ドナーになって一番辛かったのは、その事だった。

手持ちぶたさに、俺は布団を抱き締めたまま、しずかちゃんと一緒に寝ているダブルベッドに仰向けで寝転がった。

根尾はどうしているんだろう。

不安になる時、いつも思い出すのはアイツの悪びれない飄々とした顔だ。

俺はしずかちゃんが大好きだけど、同時に根尾のことも好きだった。
彼女を何度抱いても、何かが足りない。

俺を求める執拗な愛撫。

左目を見つめる異常なまでのあの執着。

俺よりもか弱く見えて、組み伏せられると身動きさえ取れない力強さ。

メチャクチャにされたい。

この不安な気持ちごと、アイツにぶち壊されたかった。

「ただいま、岸上さん。」

突然、玄関からしずかちゃんの声がして、俺はびっくりして飛び起きた。

コートを脱いで、バタバタと粉雪を叩き落としている彼女の姿が見える。

雪に降られたんだろう。

寒さで顔が真っ赤になっている。

子供みたいに真っ赤なホッペをして手を擦り合わせてハーッと息を

吹きかける、そんな仕草もまたかわいくて、思わず表情が緩んでしまう。

俺が寝転がっているベッドに腰を下ろすと、しずかちゃんは冷たい手を俺の頬に当てた。

その手をそっと掴んで、俺はお姫様にするみたいにキスした。

「・・・ウサギさん、どうだった？元氣だった？今更、怒ってなかっただろ？」

「ええ、正直に話して許して貰いました。彼女、結婚するんですって。幸せそうでしたよ。」

何？・・・結婚だと？

俺は思わず、ガバッと起き上がった。

あのウサギに男ができるなんて、捨てる神あれば拾う神ありとはよく言ったものだ。

まあ、よく見りゃそれなりにかわいかったし、蓼食う虫も好き好きだしな。

本当にあの時、殺さなくて良かった。

ブツブツ独り言を呟いている俺の前に、彼女は黙って、持ってきた紙袋を差し出した。

意味が分からずに中を覗くと、そこには見覚えのあるノートパソコンが入っている。

俺がブログの管理をしていたあのパソコンだ。

「・・・これ、根尾さんの・・・？」

俺はしずかちゃんの顔を見上げた。

彼女は深く頷いて言った。

「帰る前に、名古屋の根尾先生の自宅マンションに寄りました。これをあなたに渡すようにって言われて預かってきたの。先生、楽園会病院を退職したんです。明日にはマンションも引き払うそうです。行き先は教えて貰えませんでした・・・。」

根尾がいなくなる・・・？

心臓が掴まれる様な不安に、俺は思わずパソコンを抱き締めた。

旅立ち 2

今まで考えた事もなかった事態に、俺は訳もなく焦燥感を覚えた。黙り込んだ俺にしずかちゃんはぴったり寄り添い、頭を俺の肩にくっ付ける。

「・・・先生、今、引越しの準備の最中でした。行き先は教えないって・・・。あなたと幸せになるように言われました。」

「・・・そう。」

「先生ね、瑞希さんが亡くなられてから、落ち込んでたみたいです。計画がこんな形で終わって、あなたがバイトしていた名古屋の病院に戻ってたのですが、やっぱり居辛かったんでしょう。奥様のこと、思い出しますからね。」

「・・・そう。」

「私、あの人が心配です。どこに行くつもりなのか……。お金には困らないでしょうけど、行く当てもなさそうで……。」

・・・樂園^{エデン}

俺の頭に浮かんだのは、その言葉だった。

一生きることに執着がない。

いつか、あいつが言ってた言葉を思い出す。

そんなヤツが今までハングリーに生きてた理由は、一重にあの少女の為じゃなかったのか？

その少女が亡き今、根尾は何を頼りに生きていくつもりなんだろう。

「・・・根尾先生のところに行きたい？」

俺の気持ちを見透かしたかのように、しずかちゃんは優しく笑った。

俺はベッドに座ったまま彼女と向き合って、思いきり抱き締めた。

「ごめん、しずかちゃん。俺・・・。」

「いいのよ。分かってます。私は大丈夫だから、先生のところに行つてあげて。早くしないと、本当に連絡も取れなくなります。」

俺はすぐに立ち上がって、俺の全財産とも言うべき、いつものスポーツバッグを引っ張り出した。

前回は夏だったのでバッグは一つで済んだけど、今回は冬服がかさばったため、バッグは二つになった。

移植手術後、退院してここで暮らしたのは結局3ヶ月ほどだったけど、しずかちゃんと二人きりの生活は結構、新婚気分を満喫できた。詩織ちゃんも元気になって、明日ここに帰ってくる。

あの時、助けたウサギも自力で幸せを掴んだ。

俺も自分の人生にはもう悔いはない。

あるとしたら、自称キアヌ・リーブス激似のあの外人顔が見れなくなる事だけだ。

しずかちゃんは穏やかな顔で、荷物をまとめる俺を見つめていた。

そうだ、行く前に彼女に伝えておかなければ。

唐突に思いついた俺は、さっき彼女が持ってきたノートパソコンに電源を入れて立ち上げた。

デスクトップに名前のないファイルがあって、それをクリックすると画面いっぱいには日本地図が広がった。

少しづつ拡大していくと、愛知県の太平洋に面した位置に点滅する赤い点が現われた。

「何ですか、これ？」

パソコンに向かって地図を見ている俺の肩越しに、彼女が背伸びをして覗き込む。

しずかちゃんは、このマイクロチップの事とか、攻撃仕様の改造スタンガンの事なんかは知らないんだろう。

言ったところで、驚きはしないだろうけど。

俺より根尾と付き合いの長い彼女だから、少なくともアイツが良いヤツでないことは知っている筈だ。

「根尾さんにね、猫が迷子になっても発見できるような、人間用のマイクロチップを入れたんだ。ぶん殴られて腕折られてから、スタンガンで感電させられて無理矢理、ね。」

「えええっ!？」

衝撃の事実にしずかちゃんは驚いて裏返った叫び声を上げる。

さすがのしずかちゃんもビックリだったか。

俺は苦笑しながら、パソコンを彼女に見せた。

「ほら、この点滅してるのが俺。日本中どこでもにいても、このパソコンで俺の居場所は分かるから。これはここに置いていくよ。あと、右腕に刺青のあるバラバラ死体が見つかったら、それは俺だからね。」

「もう!変な事言わないで下さい。」

真っ赤になってポカポカ殴りかかって来る彼女の細い腕を、俺は笑いながら掴んで、引き寄せた。

半年前より伸びたサラサラの黒髪をすくって口付ける。

この人に会えて良かった。

ひとときでも彼女の夫となって甘い時間を過ごすことができた俺は幸せ者だ。

「・・・せっかくしずかちゃんの旦那になれたのに残念だけど・・・ごめんね。」

「大丈夫ですよ。私達は運命共同体なんだから。どこにいても一緒です。根尾先生のこと宜しくお願いします。」

力強く言い切った彼女が俺は愛しくて、その唇に何度もキスをした。

そうだ、俺達は切れる事はない。

あの夏の日の記憶を共有する俺達は、これからも運命共同体だ。不思議なほど穏やかな気持ちで、俺達は別れを惜しんだ。



両手にパンパンに膨らんだスポーツバッグを提げて、俺は懐かしの名古屋駅に到着した。

さっきチラホラ振り出した粉雪は、今年初めての大雪に変わっていた。

ダイヤの乱れに翻弄された人達で名古屋駅はごった返していた。

人波に逆らいながら、俺はなんとか駅から出ることに成功した。

並んでいたタクシーに乗り込み、しずかちゃんに教えてもらった根尾の住所をポケットから引っ張り出す。

紙切れを見たメタボ体型のベテラン運転手は黙って頷くと、速やかに車を走らせた。

駅前は電車に乗れずにタクシーを拾う人で、列ができて始めている。もう少し名古屋につくのが遅かったら、駅前で立ち往生していたかもしれない。

運はまだ俺の元にある。

雪がひどくなってきた名古屋の街並みを、俺はガラス越しに見つめていた。

30分ほど走っただろうか。

タクシーは郊外の住宅地の一角にある二階建ての小さな白いマンションの前で止まった。

どこかで見たような造りだと思ったら、俺の住んでたマンスリーマンションと同じ不動産会社の物件じゃないか。

金持ちのクセして、何でこんな学生みたいなどこ住んでんだ？

住所をもう一度運転手に見せて確認させるも、ここで間違いないとのことだったので、俺は金を払ってタクシーを降りた。

雪で白くなってきたエントランスに入ると目の前に階段があった。

エントランスに並んで設置された郵便受けの201号に『根尾正和』の名前が張ってあるのを確認して、俺は二階に上がっていった。

どう見てもマンスリーマンションだったけど、金にも物にも食べ物にも執着のない根尾らしい棲家と言えないこともない。

201号は一番奥の角部屋だった。

両手に提げたスポーツバッグを廊下に下ろして、俺は部屋の前に立って表札を確認する。

ヤツの名前がそこにあるのを確認してから、俺はブザーを押した。

昔ながらのピンポンという音が部屋の中から聞こえてくる。

安っぽいドアの向こうの物音は丸聞こえで、中からドタバタこっちに向ってくる足音が聞こえた。

期待感で、俺の鼓動が速くなる。

「はい、どちらさま……」

突然、内側から開いたドアから半身を出した根尾が現われ、言いかけたまま硬直した。

少し痩せた白い顔にいつもの緑がかった目が、俺を見た驚愕で見開かれている。

栗色の髪は伸びてボサボサになっているが、それがヨーロッパの俳優みたいな色気を出していて、以前よりカッコよくなったみたいだ。ジーンズ、ハイネックの白いセーターの上にジャケットを羽織って、もういつでも出掛けられそうないでたちだった。

ドアを閉められる前に、俺は根尾の体をグイグイと中に押し返しながら、マンションの中まで強引に侵入した。

狭い玄関で向かい合ったまま、俺達はしばらくお互いの顔を見つめ合った。

「・・・早まるなよ、根尾さん。三人とも夢を叶えるまで計画は終わらないんだろ？俺はまだ目を手に入れてないんだけど。」

俺の言葉に、根尾はフッと固かった表情を緩めて笑った。

旅立ち 2 (後書き)

ここまで読んでいただきましてありがとうございます。
次回、最終回です。

旅立ち 3

根尾は柔らかい栗色の髪をクシャッと掻き上げて、少し照れたように俺を見た。

「今日は客が多い日だな。さっき静香が押しかけてきたと思ったら、今度は君か。恋路の邪魔をしたくなかったから黙って消えようと思ってたのに……。今、引越しの最中なんだよ。聞いたかもしれないけど、病院も辞めて、まさに樂園を追われたアダム的心境だ。ま、入れよ。何にもないけど。」

根尾の後ろについて、俺は見覚えのある造りの部屋の中に足を踏み入れる。

しずかちゃんの言った通り、本当に引越しの準備をしていたらしい部屋には積まれたダンボール箱の山と質素なパイプベッドがあるだけだった。

そのパイプベッドに俺達は並んで腰を下ろした。

「本当に何にもないじゃん。お茶くらい出してくれないのかよ？」
ガランとした白い部屋を見回して、俺がブツブツ言うのと、根尾はベッドの下に無造作に置かれたコンビニのビニール袋を差し出した。

「コーヒーを入れようにもカップを片付けてしまった。これでも飲んでくれ。最近、僕もアルコールに手を出すようになってね……」

物憂げに溜息をつく根尾はカッコ良かったんだけど、袋の中身は桃チューハイだのオレンジブロッサムだのジュースとさして変らないモノばかりで、相変わらぬ下戸ぶりに俺は苦笑した。

せっかく勧めてくれたのでビニール袋の中身を物色すると、なんと

タバコの箱まで入っている。

今更、チヨイ悪中年にイメチェンするつもりか？

「あんた、タバコ吸ったつけ？」

「いや、君が吸ってるのを思い出して、吸ってみようかと思ったんだ。丁度良かった。どうやって吸ったらいいんだ、これ？」

どういう心境の変化か知らないが、色々チャレンジしている根尾がかわいくなって、俺は箱から一本出して、彼の口に咥えさせてやる。ビニール袋と一緒に入ってた安っぽいライターで火を点けるが、吸ってないので点火しない。

「吸わないと点かないよ？」

俺の言葉を聞いて、根尾は思いっきり煙を吸い込むと、お約束どおり、むせ返ってゲホゲホ咳き込んだ。

中学生かよ……。

デジャブーのようなシチュエーションに、俺はあの日のウサギを思い出した。

「……僕には向いてないことが分かったよ。これに味を感じることはできなさそうだ。残りは君にやるよ。」

目に涙を浮かべて、根尾は吸いかけのタバコを俺に返す。

愛煙家だった俺は反射的に口にもっていったが、何とか思い留まった。

無意識に咥えてしまう前に、玄関のすぐ横に設置された台所のシンクに放り込む。

ジュっと小さな音を立てて、シンクの中から細い煙が上った。

「ダメだよ。俺、もうタバコは一生禁止だって。肺が人より機能し

なくなったからね。」

「・・・それは良かった。益々、僕好みだ。」

可哀相に、なんて言われるとは思ってなかったけど、根尾らしい返事に、俺は寧ろ嬉しくなった。

隣に座った根尾に少し体を寄せる。

根尾は反応もしなかったけど、嫌がりもなかった。

お互い前を向いたままの姿勢で、根尾は話し始めた。

「岸上君、僕の事はもう気にしないでいい。結婚もしたんだし、君は静香と詩織ちゃんと仲良く暮らせばいいんだ。彼女がフルに働いて、君が専業主夫になればいいだろう。静香には君が必要だよ。」

「あんたは？しずかちゃんには詩織ちゃんがいる。でも、あんたは誰もいないだろう？」

「・・・それは同情か？」

弱気な笑みを浮かべて、根尾は俺を見た。

同情じゃない。

俺は多分、この人と離れたくないんだ。

認めたくないけど。

「根尾さん、エデン計画はまだ終わってないだろ？あんたの奥さんは亡くなって、詩織ちゃん肺をゲットしたけど、俺の角膜はどうなるんだよ？これで終わったら、俺だけ骨折り損じゃないか。」

素直に自分の気持ちを言うのが悔しかった俺は、言い訳がましく責めてみる。

文字通り、腕まで脱臼したんだから、寧ろ正当な言い分だ。

根尾はその言い分を聞いてクスクス笑った。

「確かに、君だけは踏んだり蹴ったりだったね。でも、あげたくても僕の角膜は君に適合しないよ。僕だって結局、何も得られなかったんだしね。それとも、また自殺ツアーを敢行するかい？」

「・・・それは、もういいよ。また怖気づいて裏切ったら、今度はそあんたに殺されそうだからな。」

「そうだね。じゃ、どうしたらいい？」

根尾の問いに俺は小さな声で返事をした。

「・・・俺を連れてってよ。あんたと一緒に。どこに行くのかは聞かないから・・・。」

その言葉に根尾は優しく笑って、俺の肩をポンと叩いた。

「悪いけど、それはできないな。僕は今、前向きな行動ができそうにないんでね。正直に言うよ。この荷物は僕の実家に送ることになってるんだ。その後は向こうで始末してもらえるようにね。でも、僕はそこにはもう帰るつもりはないんだ。」

「・・・楽園に行くつもり？」

俺の突っ込みに、彼は頷いた。

「そう考えてた事は否定しないよ。だから、君を連れて行く訳にはいかないんだ。君には静香がいるんだから。」

「だったら、尚更、ついて行くよ。俺がいるところはしずかちゃんにすぐに分かるからな。俺と一緒にいれば、あんたの死体の回収も楽だ。それに俺と一緒に死んだら、身元の確認も簡単だよ。」

腕まくりして、俺は腕の刺青を見せてからニヤッと笑った。

根尾はしばらく沈黙して俺を見てたけど、やがて、俺の肩に腕を回してグッと引き寄せた。

いつものマリン系のコロンの香りがフワリと鼻を掠める。

「・・・後悔するなよ？」

「しないよ。俺達は一蓮托生、運命共同体だろう？」

「・・・そうだったな。」

低い声で笑ってから、突然、根尾は勢いよく立ち上がると腕を伸ばして伸びをした。

何か吹っ切れたようなさっぱりした表情で、俺を見下ろしてニッコリ笑う。

ウェーブのかかった栗色の髪に縁取られた白い顔は、地上に降りた大天使みたいに神々しい。

「最終目的地はエデンとしても、取り合えず、どこに行きたい？付き合ってもらおうお礼に、君に選択権をあげよう。」

「じゃ、九州。」

即答した俺に根尾はキョトンとして首を傾げる。

「どうして？」

「前に言ってただろ？九州から南の人は死なないって。あんたもそこに行ったら気が変わるかもしれないじゃん？」

俺もニヤリと笑って立ち上がると、拳でヤツの腹に軽いジャブを入れる。

一瞬、根尾がウッと呻き声を出した。

「そう簡単には逝かせないよ。俺がついてる限りね。」
「・・・勝手にしろ。」

その顔は見えなかったけど、ヤツには珍しく感動したらしい。
ぶつきらぼうにそう言って、腹に入った俺の拳をぐいっと掴んで振り払うと、くると背をむけて玄関に向かって歩き出す。
俺も慌てて後に続いた。

「ここには明日までいられるからな。メシでも食いに行こうか・・・
ところで、君のフルネームは何だ？」

・・・今更かよ？

突然の問いに、聞かれた俺の方が呆氣にとられた。

そう言えば、聞かれた覚えもないけど、名乗った記憶もないな。
自分に関係ないことには無頓着な根尾らしいと言えなくもない。
俺は呆れて苦笑いした。

「・・・大した名前じゃない。死神って呼べよ。あんたが樂園^{エデン}に行くまで付きまとしてやるから。」

玄関のドアを開くと、外は既に降り積もった雪で様変わりしていた。
雪の降りしきる白い街に向かって、俺達は並んで歩き出した。

Fin.

旅立ち 3 (後書き)

長い間、お付き合い頂きましてありがとうございます。
楽しんで頂けましたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2991v/>

EDEN

2011年10月25日22時08分発行